

中山間地綜合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

長安本郷神代屋遺跡

2002年3月

島根県弥栄村教育委員会

中山間地綜合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

長安本郷神代屋遺跡

2002年3月

島根県弥栄村教育委員会

序 文

那賀郡弥栄村安城地区の中心地、長安八幡宮に隣接する場所で、旧安城保育所の敷地（昭和36年建設）や老人ホーム「寿光苑」の敷地（昭和46年建設）から土器の破片が見つかっており、予てからこの辺りは遺跡ではないかという声が聞かれていました。

この度、この長安本郷の地で「やさかの里地区県営中山間地域総合整備事業」が行われることになりました。水田の圃場整備等様々な工事で旧来の地盤が破壊、埋没することにより、遺跡や文化財が未確認のまま滅してしまうことが危惧されました。そこで、遺跡や文化財の調査を行い、その記録を後世に残していくために本事業へ取り組むことになりました。

平成12年度に試掘調査を行い、遺物等が多く出土し、この付近に集落が形成されていたことがほぼ明らかになり、試掘調査の状況を踏まえて、平成13年度に本格的発掘調査を実施いたしました。

調査では、弥生時代前期から中・近世期までの各時代の遺物が多量に出土しており、古墳時代前半期や奈良～平安時代の溝や建物跡が見つかっています。なかでも、注目されるのは、古代のものとしては県内3例目の焼失竪穴住居跡が発見され、住居内から炭化した屋根材や屋根に使われていた粘土が焼け落ちた状態で残っていたと言われていることです。

本村では、初めての発掘調査であり事業進める上でいろいろな課題に直面しながら取り組んでまいりましたが、関係者のご支援のお陰で多くの成果を収めることができました。

発掘調査及び本書の刊行に当たりましては、島根県教育委員会文化財課、島根県埋蔵文化財調査センター、浜田農林振興センター農村整備課、いなか舎田中義昭氏（元島大教授）をはじめ、地域の皆様から多くのご指導、ご協力を賜りましたことに対しまして心からお礼を申し上げます。

平成14年3月

弥栄村教育委員会教育長

領 家 務

例　　言

1. 本書は、平成12（2001）年6月～10月にかけて島根県弥栄村教育委員会が実施した、中山間地総合整備事業（圃場整備）に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査を行った遺跡の名称は長安本郷^{よこや}神代屋遺跡。遺跡の所在地は島根県那賀郡弥栄村大字長安本郷438-1番地である。
3. 発掘調査の組織は下記の通りである。

調査主体者　　弥栄村教育委員会

教育長　　池田久志（平成13年1月24日まで）

　　領家　務（平成13年2月1日より）

事務局　　牛尾英昭（教育委員会次長）

　　藤井雅也（教育委員会係長）

　　佐々木誠（教育委員会主事）

調査員　　上田俊雄（弥栄村教育委員会嘱託）

調査指導　椿　真治（島根県教育委員会文化財課）

　　田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）

発掘作業参加者　　河村シゲコ　小池友子　小松原君子　鳥越千代子　永見信夫

　　長谷川　彰　長谷川ウメノ　日原静子　前田厚美　森下佳代子

　　山崎サダヨ　山崎トミコ　山崎美恵子　山代辰枝　吉田アキミ

出土品整理者　岡橋知佐子　塚原礼子

4. 発掘調査の実施に当たっては、事業者の島根県浜田農林振興センターより種々の協力をいただいた。また、県文化財課の椿真治氏には数回に亘り来跡いただき、直接指導・援助を受け、県埋蔵文化財調査研究センター調査課長松本岩雄氏、浜田市教育委員会主事の柳原博英氏にも現地調査の指導をいただいた。同じく、県埋蔵文化財調査研究センターの守岡正司氏からは陶磁器の鑑定について指導を受けた。その他、地元考古学研究者の宮本徳昭氏には数度来訪のうえ調査に関して助言をいただいている。以上、明記して謝意を申し述べる。

5. 遺跡の全体図作成についてはワールド（株）山陰支社に委託した。遺跡の位置に関する座標は第Ⅲ系を採用。座標値はX-135740～135775、Y-5160～5235を示す。

6. 出土遺物の実測・浄書・報告書の作成に当たっては田中義昭氏主宰の「いなか舎」のお世話になり、出土品の解説に関しては松本美樹氏（益田市教育委員会）の協力を得た。いずれも明記して謝意を述べる。

7. 本書の執筆・編集は田中義昭氏の指導のもと佐々木誠と上田俊雄が行った。

8. 本遺跡に関する調査記録と出土品は弥栄村教育委員会において保管している。

本文目次

I.	調査に至る経緯	1
II.	自然と歴史の概要	1
1.	位置と村勢	1
2.	遺跡と歴史	1
III.	発掘調査	4
1.	遺跡の立地	4
2.	遺跡の規模	4
3.	発掘調査	4
i)	第1区の調査	6
ii)	第2区の調査	6
iii)	第3区の調査	6
iv)	第4区の調査	7
v)	第5区の調査	7
vi)	第6区の調査	8
vii)	第7区の調査	8
IV.	遺跡と遺構の構造	9
1.	遺跡の構造	9
2.	遺構の構造と時期	9
i)	竪穴住居址	9
ii)	掘立柱建物	9
iii)	土坑	9
iv)	溝	9
V.	遺物	18
1.	土器・陶器・陶磁器	18
i)	弥生土器	18
ii)	土師器・その他	19
iii)	須恵器	20
iv)	陶器・陶磁器	21
2.	石器	22
3.	その他	22
4.	まとめ	22
VI.	総括	38

挿 図 目 次

第1図 弥栄村位置図	1
第2図 弥栄村内遺跡分布図・遺跡地名表	2
第3図 遺跡調査区配置図	4
第4図 試掘トレーンチ設定図	5
第5図 検出遺構全体図	10
第6図 北壁土層実測図（5～6区東石）	11
第7図 南北トレーンチ土層図	12
第8図 S101平面・土層・断面図	13
第9図 SB01平面・断面図	14
第10図 SB02平面・断面図	14
第11図 SB03平面・断面図	15
第12図 SK01平面・土層図	15
第13図 SK02と周辺ピット群平面図	15
第14図 SD02平面・土層・断面図	16
第15図 SD01平面・土層図	17
第16図 SD03平面・断面図	17
第17図 出土遺物実測図	24
第18図 出土遺物実測図	25
第19図 出土遺物実測図	26
第20図 出土遺物実測図	27
第21図 出土遺物実測図	28
第22図 出土遺物実測図	29
第23図 出土遺物実測図	30
第24図 出土遺物実測図	31
第25図 出土遺物実測図	32
第26図 出土遺物実測図	33
第27図 出土遺物実測図	34
第28図 出土遺物実測図	35
第29図 出土遺物実測図	36
第30図 出土遺物実測図	37

表 目 次

土器・陶器・陶磁器観察表	39
--------------	----

図版目次

- 図版I - 1 遺跡の全景・その1（北方より）
2 遺跡の全景・その2（南方より）
3 調査区全景・その1（上空より）
- 図版II - 1 調査区全景・その2（西方より）
2 1区、2区調査区全景（上空より）
- 図版III - 1 3区、4区調査区全景（上空より）
2 6区、7区調査区全景（上空より）
3 S101の全景（北方より）
- 図版IV - 1 焼失したS101・横たわる炭化材（北方より）
2 SB101全景（北方より）
3 SB02全景（北方より）
- 図版V - 1 SK01と周辺のピット群（北方より）
2 SK02
3 SK01と埋土（北方より）
- 図版VI - 1 SD02の全景（北方より）
2 SD03の全景（北方より）
3 7区土器溜り③の検出状況
- 図版VII - 1 弥生土器（1/3）外面
2 弥生土器（1/3）内面
- VIII - 1 弥生土器（1/3）外面
2 弥生土器（1/3）内面
- IX - 1 弥生土器・須恵器（1/3）外面
2 弥生土器・須恵器（1/3）内面
- X - 1 陶器・陶磁器（1/3）外面
2 陶器・陶磁器（1/3）内面
- XI - 1 土師器・甕（1/2.5）
2 土師器・小壺（1/2.5）
3 土師器・甕（1/2.5）
- XII - 1 土師器・高杯（1/2.5）
2 弥生土器・高杯（1/2.5）
3 石器・銅錢（1/3）

I. 調査に至る経緯

島根県那賀郡弥栄村は、「やさかの里地区県営中山間地総合整備事業圃場整備計画」に先立ち、平成9年9月18日当該計画地内に埋蔵文化財所在の有無及び所在する場合の取り扱いに関して村教育委員会に照会した。これを受けた村教育委員会は、平成10年10月23日から圃場整備予定地の長安団地・程原団地・横谷団地・小阪団地・大齊団地・西の郷団地について分布調査及び試掘調査を実施した。試掘調査は2m×2mのトレンチ調査とした。

調査の結果、長安団地の小字名・神代屋の区域の試掘溝より須恵器、土師器の破片が多数出土した。なお、長安以外の上記した団地については遺構・遺物の検出はなく、その存在は認められなかった。そこで村教育委員会は島根県教育委員会文化財課と当該遺跡の今後の取り扱いについて協議し、遺跡範囲を特定する調査を平成12年度に於いて実施する必要があるとの結論に至った。この試掘調査は県教委文化財課の指導の下国庫事業として平成12年11月6日より行った。調査対象とした区域は整備事業による掘削・切り取りが計画されている個所でその面積は約0.15haである。調査方法としては巾1mの短冊形トレンチを等高線に直交させて13本を設定し、発掘した。それぞれのトレンチからは弥生土器、土師器、須恵器が多く出土し、青磁・白磁等の古代末から中世期の遺物もかなり出土した。また、トレンチ6で

は柱穴と思われる遺構が検出された。村教育委員会は、この調査結果を村の事業担当部局へ平成12年12月1日付けで中間報告を行い、本調査が必要である旨を回答した。

平成13年4月18日付けで事業主体の島根県浜田農林振興センターより本調査実施の依頼があり、村教育委員会は当該遺跡について再度、県文化財課の指示・指導を受けて本調査（文化財保護法第58条の2項第1項）を行うこととし、必要な調査組織・体制を編成した。すなわち、村教育委員会教育長を調査責任者とし、その下に教育委員会職員による事務局を立ち上げ、発掘調査担当者は、県教育委員会文化財課職員に依頼した。その指導のもと本村教育委員会嘱託の上田俊雄氏が調査を行った。調査着手は平成13年6月15日、終了は同年10月12日で、所要日数は119日となる。

調査結果については、以下に述べるように溝状遺構・竪穴住居址・掘立柱建物跡等を検出し、多数の出土品が得られたが、遺構の大部分は後世の改変が著しく、また、調査範囲において歴史的にまとまった遺構群を検出することはできなかった。以上、これらの報告を基に事業者と遺跡の取り扱いを協議し、今次調査区については「記録保存」で対処することとした。

II. 自然と歴史の概要

1. 位置と村勢（第1図）

弥栄村は那賀郡の中央やや西よりに位置し、村面積106.0km²、人口1809人（2002年現在）を擁している。北は漁山を介して浜田市と、東も坊主山等の山並みを境に金城町と、南は弥畠山山系を跨いで美濃郡美都町と、西は三隅町とそれ接している。全体に高原状の地形で、その間に三隅川水系の小河川

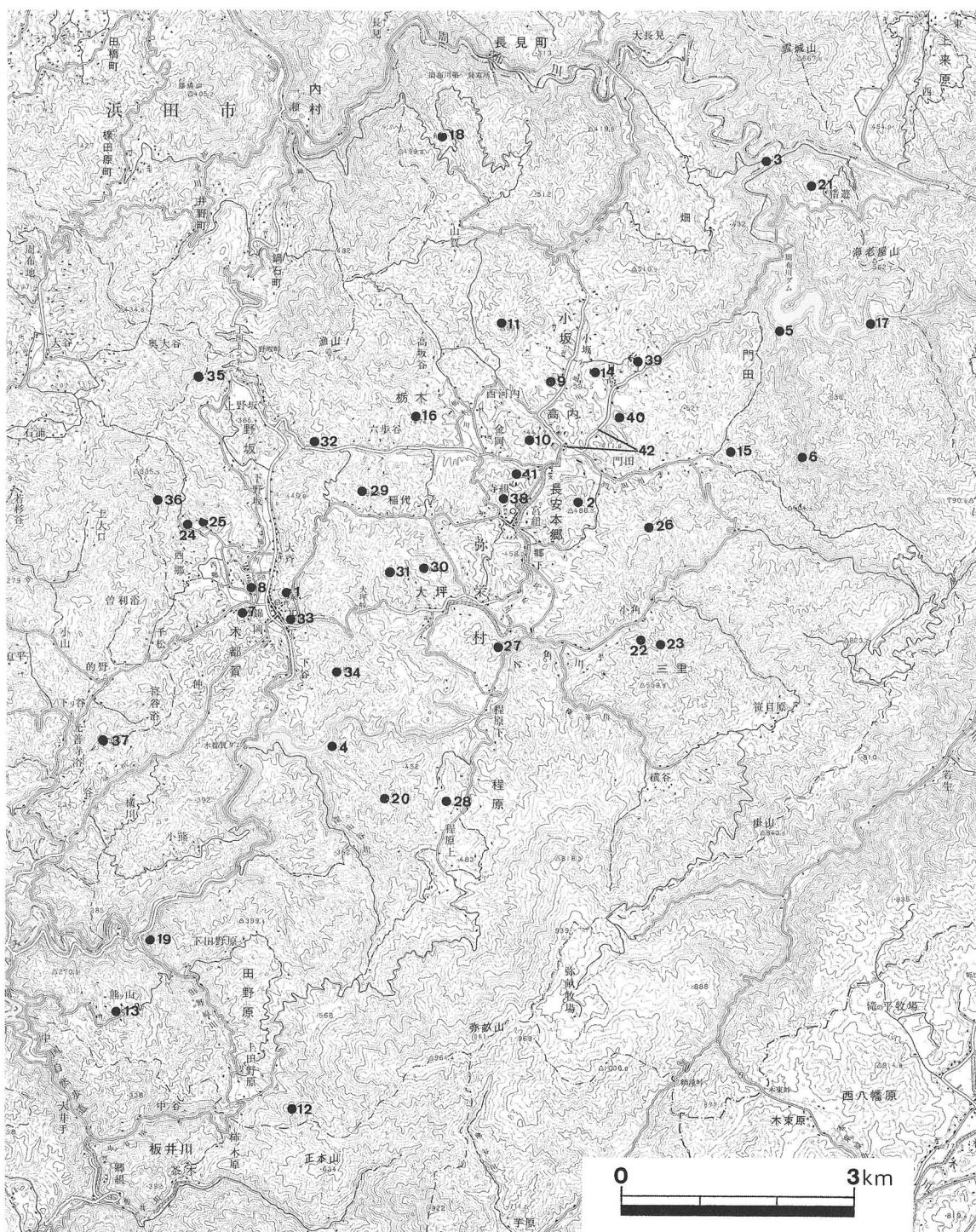


第1図 弥栄村位置図

の浸食による小さな盆地が点在している。神代屋遺跡のある長安本郷地区は西隣の木都賀地区と共に弥栄村では比較的大きな盆地で、農耕地が集中する。産業は農林業主体で一部は浜田市への通勤圏となっている。

2. 遺跡と歴史（第2図）

『増補島根県遺跡地図Ⅱ』によると弥栄村には45個所の遺跡があり、その内訳は遺物散布地（集落跡等）3、古墳4（横穴墓を含む）、城跡22、製鉄遺跡12、その他4となっている。集落遺跡を代表するのは本長安本郷神代屋遺跡で弥生時代の初期から古墳時代・古代・中世の遺物が出土している。当地区的稻作農業の開拓遺跡として、また、地区の中心的な古代・中世集落跡として注目される。次に高内地域の丘陵上で発見された奥の原古墳群は前期（4世紀頃）の方墳群とみられ、石棺2基と大型の土器（壺棺）を利用した棺が見つかっている。弥生時代から長安本郷の盆地一帯を開拓した集団の指導者が全国的な古墳造営の波に乗って早々と墳墓を築いた



番号	遺跡名	時期
1	おつかさん古墳	古墳
2	矢懸城跡	中世
3	烟鉢跡	中・近世
4	大橋鉢跡	"
5	高瀬鉢跡	"
6	明比谷鉢跡	"
7	木都賀経塚	中世
8	田矢城跡	"
9	小坂遺跡	散布地
10	大前上経塚	中世
11	千穂山城跡	"
12	大鹿城跡	"
13	熊の山城跡	"
14	小坂日高城跡	"

番号	遺跡名	時期
15	門田城跡	中世
16	天龍山城跡	中・近世
17	青尾鉢跡	"
18	大井谷鉢跡	"
19	道円坊鉢跡	"
20	程原鉢跡	"
21	猪遊鉢跡	"
22	梨ヶ谷Ⅰ鉢跡	"
23	梨ヶ谷Ⅱ鉢跡	"
24	王子ヶ原遺跡	古墳・古代
25	西ノ郷窯跡	古墳
26	古城跡	中世
27	矢川城跡	"
28	城ヶ谷城跡	"

番号	遺跡名	時期
29	鷹の巣城跡	中世
30	火の口城跡	"
31	大坪城跡	"
32	野坂城跡	"
33	東城跡	"
34	天ノ城跡	"
35	王城跡	"
36	鷹伯差路跡	"
37	白狐城跡	"
38	神代屋遺跡	弥生～近世
39	奥の原古墳群	古墳
40	遠越遺跡	"
41	坂本古墳	"
42	津和野奥筋往還	近世

第2図 弥栄村内遺跡分布図・遺跡地名表

ことが知られる。同じ高内地区の遠越遺跡からは須恵器（6～7世紀頃）の出土が知られており、この遺跡が横穴式石室か横穴墓であったことを伺わせている。古墳時代には高内地区が村内では有力な土豪勢力の根拠地になっていたのであろうか。長安本郷盆地を見下ろす低い丘陵の上には栃木・坂本古墳群がある。9基の方墳群からなる古墳群で、その立地等から見て奥の原古墳群と同様の時期と性格を有する可能性がある。

木都賀地区は南北に流れる本郷川（三隅川の支流）に沿う細長い盆地である。この地区にもおつかさん古墳（円墳）や王子ヶ原遺跡（8世紀頃）があり、西の郷遺跡は須恵器を焼いた窯跡の可能性が指摘されている。散見的ではあるが、こうした事実からすると木都賀地区では古墳時代頃から開発が進んだことを知ることができよう。奈良・平安時代の状況については調査不測で詳しいことは分からぬが、『和名抄』には弥栄村域は那賀郡杵東郷に属したことが記されているから、奈良・平安時代にもあちこちに農民集落が展開していたことは予測しておくべきであろう。

ところで、『県遺跡地図』に登録された弥栄村の遺跡の大半は城跡である。そして、これらのほとんどは盆地周辺の小高い山頂に残されているのが特徴であろう。中世には弥栄村域は益田氏、三隅氏、毛利氏、吉川氏等と各氏の親縁関係にある永安氏、田村氏、小松原氏が激しく所領争奪を繰り広げており、彼らが諸所に山城を築いて合戦に備えたことをこれらの諸城跡が物語っている。小阪地区の千穂山城跡、大坪地区的矢川城跡、長安本郷地区的矢懸城跡、木都賀地区的鷹泊城（三隅氏の居城か）跡等では郭・

土塁・堀切・堅堀等の存在が確かめられており、それぞれの地区の中核的な城であったことが推測される。

城跡に次いで多いのが製鉄遺跡である。これらは鉄滓の採取によってその所在が判明したものである。詳しい調査によらなければ正確なことは分からぬが、概して中世後半から近世にかけて行われた砂鉄利用の製鉄遺跡と見るのが妥当な処ではないだろうか。今後の調査に期待するところが大きい。

近世の遺跡として注目されるのは安城小学校の北西で発見された街道跡である。これは津和野奥筋往還の一部とみられ、この付近を近世街道が通っていたことを示す確実な証拠といえる。古来から長安本郷地区が人々の往来の要衝であったことを伝える重要な事実とすることができるよう。

弥栄村域における文化財調査は、今回の神代屋遺跡調査をもって嚆矢としている。上記したように、周布川と三隅川の中・上流域にあって、まさに中山間地としての地域的特性が長い時間の経過の中で形成されたことを数少ない文化財の存在によっても十分に首肯することができる。今後、さらにいっそうの持続的で入念な調査を展開することによって、当村域の地域的・歴史的特性がより明らかになることを確信するものである。

《参考文献》

- 『日本歴史地名大系33 島根県の地名』1995年
平凡社.
- 『増補改訂 島根県遺跡地図Ⅱ（石見編）』2002年
島根県教育委員会.
- 『石見の城館跡』（『島根県中近世城館跡分布調査報告書 第1集』）1997年 島根県教育委員会.

III. 発掘調査

1. 遺跡の立地 (第3図、図版I-1~3)

三隅川上流の有力支流の一つである長安川は長安本郷地区を北東から南西に向かって流れている。この川は当地区の北東部において栃木川、小阪川、門田川等の小河川の水を集めて水勢を増し、幅広い谷盆地を形成している。神代屋遺跡はこの細長い谷盆地の北西端、つまり長安川右岸の一角に位置している。地形的には南に向かって張り出した山丘の麓に回廊状に広がる低位の河岸段丘上とすることができるよう。遺跡の南西方向には長安八幡宮が建つ低丘陵が東に向かって突出し、それによって段丘の前面には長安川の流れとの間に内湾状の低地が出来上がっている。この低地は谷奥から流れ出る小川との水が長安川の自然堤防に遮られて滞水し、洪水等の影響も比較的少なく、安定度の高い低湿地となっていたことが考えられる。弥生時代の水田の多くがこうした湿地に営まれていたことは各地で知られており、長安本郷においても、ここは良好な耕地として弥生時代以降一貫して利用されていたものと思われる。

2. 遺跡の規模

今回の発掘調査は安城保育所と背後の丘陵裾をほぼ東西に走る道路とに挟まれた地区を対象としている。現況は水田で、その標高は370m前後である。前面の低地の標高が368mであるから、その段差は

2m前後となる。遺跡の中心部はこの水田面にあると思われるが、なお、先の道路の上方も緩斜面をなし、その上限は長安本郷寺組生活改善センターの建物辺りになる。とすれば、遺跡の広がりは東西で約100m以上、南北で50~60m位が想定できるのではないか。それに低地への遺跡の広がりも当然ながら予測されるわけで、全体的にはさらに大規模な遺跡を想定することも不可能ではない。いずれにせよ、神代屋遺跡が弥栄村を代表する重要な遺跡であることが、先ずはその立地と規模から推定されるのである。

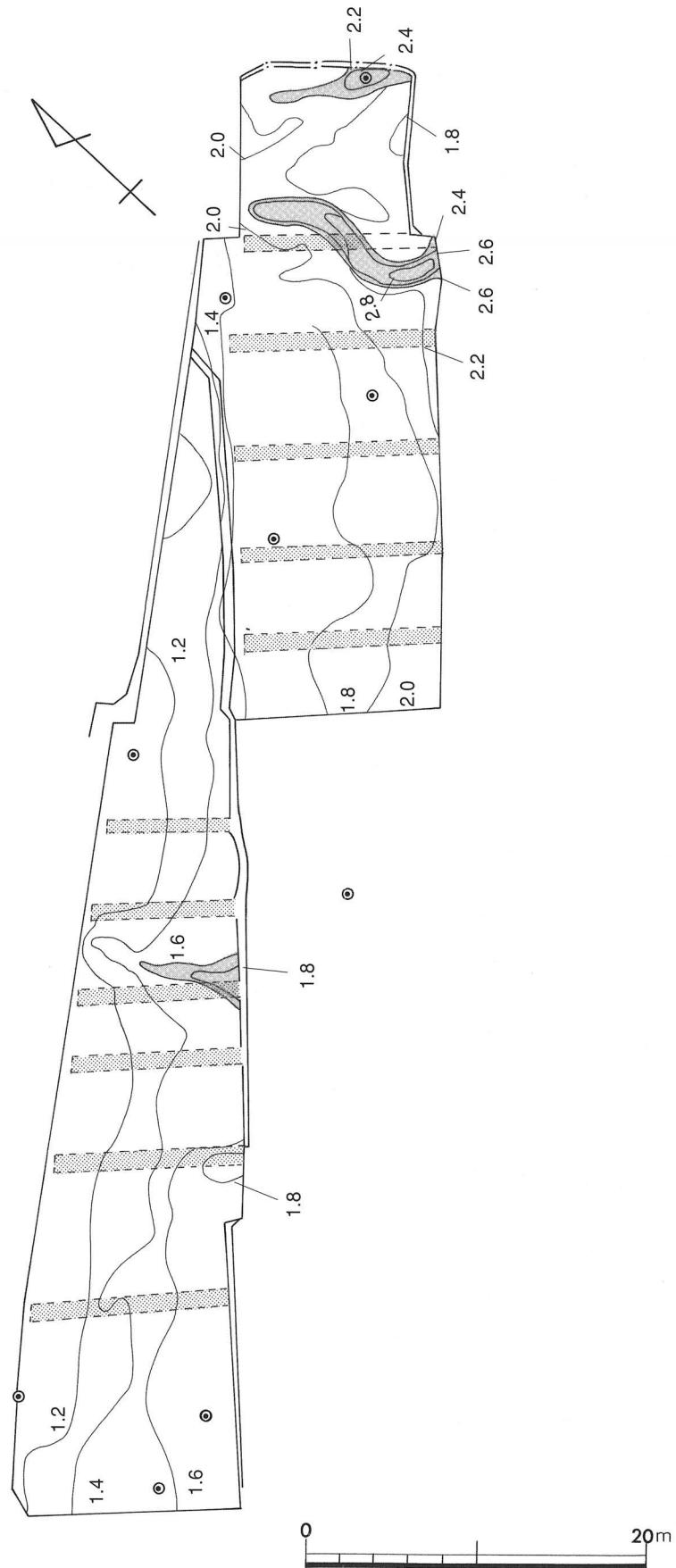
3. 発掘調査 (第4図)

発掘区は道路下方の水田面に設定した。その範囲は東西80m、南北は8~17mである。南北巾が不統一になったのは水田面と低地の境となる段端のラインが場所によって屈曲していることによる。この細長い帯状の発掘区は便宜的にこれを7区に分割し、全区の水田耕土を重機によって除去した後、1区から掘り下げるとした。区の名称は西側から1区、2区、3区、……とし、東端が7区になる。各区の形状と面積は地形のあり方に制約されて不揃いになったので以下にその大きさを表示しておく。

第1区=東西12~13m、南北12~13m。第2区=東西8~9m、南北12m。第3区=東西10m、南北



第3図 遺跡調査区配置図



第4図 試掘トレンチ設定図

10~12m。第4区=東西15.5m、南北7~10m。第5区=東西9.5m、南北17~19m。第6区=東西19m、南北14~17m。第7区=東西10m、南北10m。

i) 第1区の調査：調査区の西端で、基盤層（風化した黄褐色の粘土質層）は南側から西側へ向かって下降する。その上面は浅い凹凸があり、平坦ではない。基盤層の上位には暗褐色の粘質土層（基盤層から離脱した硬い粘質ブロックを含む）があり、この層と基盤層の間には後者から前者への漸移層を識別することができる。

発掘の結果、本区からは円形柱穴状のピット15個と土器、陶磁器、石器、黒曜石片が検出された。ピットについて、その多くは基盤層最上面で確認されたが、その深さ等からすると上層の遺物包含層に掘り込まれたものと思われる。また、分布状態も不規則で、建物跡としての復元はできなかった。

遺物は大半が暗褐色粘質土層から出土した。その出土量は相当多く、内容的には弥生前期の甕・壺片、弥生後期の甕片、高台が付く須恵器坏片、回転糸切底の須恵器坏、須恵器大甕片、陶磁器片（白磁、青磁、青花等の中国製品が大半）、寛永通宝、石包丁片、黒曜石片等が見られた。



Fig1. 1区2区の発掘風景

ii) 第2区の調査：包含層の広がりや厚さ、基盤層の状態が1区とほとんど変化がないので一気に全面を掘り下げる。遺構としては1区の東端から2区の西側中央部において北西-南東方向に主軸をもつ不整長橋円形の浅いピットを検出。SK01とした。また、円形柱穴状のピットを20個検出したが、これは1区東側のピット群に繋がるものと3区南方のピット群と一体をなすものに分かれるようである。とくに、前者の群は2区北東辺りから3区の西側にかけてまとまった分布を示している。とくに、2-1、2-2、2-12、3-8群と、2-17、2-7、2-8、3-1群とは東西方向に一直線に平行に並び、ピットの大きさとピット間隔に規則性のようなもの存在が想定されたので、これを1間×3間の建物跡と見てSB01とした。そし

て、2-1、2-2、3-1の検出面上には2~3片の須恵器の甕片が載っており、時期を想定することができた。同じくピット2-3、2-4の上面でも須恵器片が検出されたので、多くのピットは時期的に大きな隔たりがないと判断された。ただ、これらのピット群は建物跡として復元することはできなかった。

遺物は、1区と同様に多くの土器片、陶磁器片等を検出している。これらは弥生前期の甕・壺、弥生後期の甕、須恵器壺、同じく高台付きの坏・皿・大甕等の破片である。陶磁器の大半は中国製白磁、青磁であった。磨石も出土している。



Fig2. SB01ピット検出面に須恵器片

iii) 第3区の調査：包含層、基盤層共に1区、2区と基本的には変化がなく、一斉に掘り下げる。検出された遺構は円形柱穴状のピットが20個である。これら的一群はSB01の周辺に分布し、他の一群は区の中央から南西方面に集中している。SB01を想定したのと同様な考え方で3-20、3-9、3-5群と、3-17、3-2、3-13群が東西方向に並列していると見てSB02とする建物跡を設定した。間口がやや広い1間×2間の建物である。3-2の検出面上からは須恵器片が出土している。また、この付近ではピットの重複するものが多く認められたので、さらに、いくつかの建物が時間を置いて建てられていたのかもしれない。このことは3区の東半分からピット等が検出されなかたこととも関連があると考えられる。3-4、3-6、3-7のピットの検出面上からは須恵器片が出土し、中でも3-6・ピット上には奈良時代後半期の高台付坏片が見られたことから、多くのピット群がこの時代のものであることを想定することができた。そしてSB01、SB02も奈良時代後半期に属することが考えられた。

出土遺物は土器片でその量はかなりに上る。とりわけ弥生前期の土器片が目立った。



Fig3. SB01の人のによる復元



Fig4. 3-6ピット検出面上の須恵器片



Fig5. SB02の人のによる復元

iv) 4区の調査：この区では多数のピットと竪穴住居址、溝状遺構等が検出された。出土土器も大変多く、調査にはかなり手間取った。まず、4区を便宜的に3小区に分けて発掘を進めた。すなわち、西側から4区-1、4区-2、4区-3にわけ、それぞれの間にセクション用の土手を残し、最初は各小区一斉に掘り下げを行った。しかし、4区-1では南北方向に掘られたSD01が検出され、弥生土器・古式土師器の土器溜①が発見されたことなどで、多くの調査時間を要した。4区-2では方形系統の竪穴住居址1棟が発見された。床面は黄褐色の基盤層(地山)に設けられている。住居内には炭化した屋根材等が多数横たわっており、火災によって廃棄されたことが判明した。

注意されたことは炭化した屋根材の上部には被熱

した粘土が乗っていたことである。屋根上に粘土が貼られていたことを示す事実と思われる。床面中央部には土師器の甕1個体分等の他土器片がまとまとした状態で検出され、甕の形態から奈良時代の住居址と判断された。また、この住居には壁の外側に偏円形の溝が東側より北側にかけて掘り巡らされていた。4区-3では24個の柱穴状のピットが密集状態で検出された。性格は不明である。さらに、このピット群中ではSK02とした土坑を掘り出している。埋土からは弥生前期の甕の破片が出土しているが、後世に混入した可能性が高い。

4区の土層については1区から3区とは少し異なる様子が見られた。耕作土層(重機で除去)下には上手(北側)には真砂土混じりの淡黄色土(1~2層)が基盤層を覆い、中頃から下手(南側)に掛けて茶褐色土(7層)と明褐色土層が堆積している。また、明褐色土(3・6層)の下部には暗灰色土(5層)と基盤層直上に粘質の暗灰色土(8層)が広がっていた。先に記した土器溜①や弥生土器の多くは明褐色土に含まれていた。

4区の出土遺物は土器・陶磁器片が約1000個を数えた。これらは弥生前・中・後期の土器、土師器、須恵器(古墳時代・奈良時代等)、輸入陶磁器、備前焼と多彩である。



Fig6. SI01検出風景



Fig7. S101床面中央付近の土師器出土状態

v) 5区の調査：5区は南北に長い長方形区画である。この区でも基盤層まで一気に掘り下げたが、検



Fig8. SI01炭化材の上の粘土塊

出された遺構は柱穴状のピットが8個で、これらは区内に分散しており、建物として復元することはできない。出土遺物は須恵器片等50点ばかりであった。

vi) 6区の調査：6区は最大の調査区である。しかし、検出された遺構は掘立柱建物・SB03、1棟と溝・SD02、1条であった。SB03は調査区の北西隅で確認された。この一帯からは11個の柱穴状ピットがまとまって検出され、それらのいくつかを組み合わせてSB03を復元して見た。長方形プランで1間×1～2間の建物跡かと思われる。

SD02は調査区の東側で3分の1は7区に延びている。SD01よりやや規模が大きく、S字状に緩く蛇行している。この溝には北西方向から激しく蛇行する小溝が枝状に結び付いていた。

出土遺物は土器・陶磁器・鉄器である。SD02からは弥生時代各期の土器片・古式土師器等が出土している。調査区全体では約800個の破片を採取しているが、それらは弥生土器、土師器、陶磁器（中国製染付け、朝鮮磁器、肥前系）等である。

vii) 7区の調査：この調査区は全体調査区の東端に当たる。範囲は狭いが、区の西北側に6区から続くSD02があり、東側にはSD03とした溝がほぼ南北方向に掘られているのを確認した。また、6区に接する南東の隅からは土器溜③を検出している。

SD02の埋土からは6区の場合同様に弥生前・中・後期の甕片と比較的まとまった形で古式土師器（小型壺・高壺・脚付鉢等）が出土した。また、土器溜③は古式土師器のみでまとまる土器群として注目された。

全体的には弥生前・中・後期の土器片、土師器片、須恵器片、陶磁器片（中国製、備前焼等）が総計約1050点ばかり出土している。4区と共に遺物の密集区である。この区の南北方向の層序については6区と7区の間に設けたセクション用の土手から観察した。そこでは耕作土層（重機で除去）下に北側が厚く、南に向かうにしたがって薄くなる淡灰色土層

（1層）・淡茶褐色土層（2層）が見られる。その下部には北側で黒色土層（3層）が平坦に堆積し、SD02はこの層から掘り込まれているのが確認された。

この溝から南側の土層図はかなり複雑であった。耕作土層の下部には、北側から淡い茶色土（2層）が伸びている。この層下では、大まかには灰色土層・暗灰色土層・黒土色層（3層）の順の堆積が見られた。これらの層は南側から北に向かって少し傾斜し、SD02に落ち込むような状態を示している。最下部には淡黒色土層があり、これが基盤層と思われる。

7区の東側で検出されたSD03はSD02よりも小規模で基盤層を浅く掘り窪めたものであるが、掘り込まれた土層については確認できなかった。木製椀と流木が検出されている。

以上、不慣れと調査条件の制約のために、十分で正確な調査を実施することは必ずしもできなかつたが、とにかく10月上旬をもって現地の調査を終えた。



Fig9. SD02の土層と流木

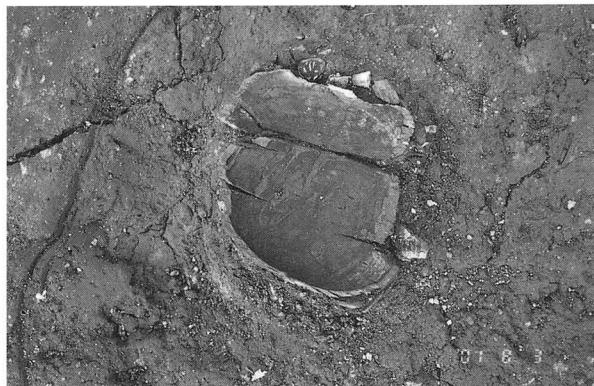


Fig10. SD03木皿出土状態

IV. 遺跡・遺構の構造と時期

1. 遺跡の構造（第5図、図版II-1）

遺跡は長安川右岸の低位の河岸段丘上にある。度重なる水田造成と改造によって、遺跡のかなりの部分が破壊されていた。とくに、1区から5区にかけては黄褐色土の基盤層上面がかなり削平されており、本来存在したであろう各時代の遺構や包含層はSB01と数等の掘立柱建物遺構、柱穴群を除いては認めることができなかった。耕作土層下部からは弥生前期から中・近世の遺物が大量に出土したが、これらは二次的に形成された包含層からのものと判断された。ただ、SI01が検出されたように、一部では遺構廃棄後に形成された未搅乱の土層が残されている。しかし、その範囲はきわめて狭いものと考えられる。

5区から7区にかけては、黄褐色の基盤層は見られず、代わって淡灰色の土層が地山の上面に広がっていることより還元状態にある粘質土層が基盤層をなしているものと思われた。黄褐色基盤層よりはレベルが1~1.5m程度低くなっている、地下水位が少し高いことの反映であろう。淡灰色土層の上部には黒色土層が広く堆積しているが、これは本來的な土層と見られ、その形成時期は古墳時代前半期に遡る可能性がある。

以上、本遺跡はプライマリーな河岸段丘上にあり、弥生時代の初めごろから現代まで絶えることなく利用され続けて来られたものと判断される。そして、弥生時代から中・近世に至る長い期間には集落が営まれた時が少なからずあったと想像される。

2. 遺構の構造と時期

次に、検出された遺構の構造と時期について述べる。

i) 竪穴住居址（第8図、図版III-1, 3, IV-1）

SI01は方形系統の平面形をした竪穴住居址と思われる。火災によって崩壊・廃棄されたものである。規模は、西壁と南壁が失われているため判然としないが、一辺4m程度の住居と考えられる。

柱穴と考えられるピットはP01、P02、P04である。これらの配置からすると主柱穴はP01のみで、東西の対称的な位置に2本の柱を建てて上屋を支える構造が想定されなくもない。P02は壁線が東側に屈折した場所にあり、ここに入り口とするとその構造に関係する柱穴といえる。P04は北壁の外側に接して掘られている。この壁沿いには竈が構築されていた可能性があり、その竈に関係する構築物の柱かも知れない。P03、P05等の残余のピットについては性格不明である。全体的には明確な主柱穴の存在を指

摘できないことと関連して、この住居址が規模から見て無主柱の住居であった可能性も残されている。床面中央の不整形な浅いピットは炉跡の可能性がある。壁高はもっとも高い個所で10cm程度を測るが、これが本来の高さか否かは判断できない。

この住居址の特徴は不整円形の外周堤状遺構を伴なっていることである。外周溝の巾は東側が広く1.8m、北側は1.6mを測る。高さは床面より10cm程度が計測されるが、これが元々の高さかどうかは判断できない。深さも一樣ではないが15cm前後と推定される。方形のプランを円形の周堤で囲った特異な住居址ということができよう。

本住居址の時期については床面から出土した土師器から奈良時代が考えられる。

ii) 掘立柱建物（第9・10・11図、図版II-2, IV-2, 3)

SB01、SB02、SB03の3棟を想定復元した。SB01は間口1間（2.5~2.7m）、奥行3間（5.3m）の中型の建物跡である。性格としては倉庫もしくは作業小屋としておく。ただし、確証はない。奈良時代のものと考えられる。

SB02は間口1間（2.2m）、奥行2間（3m）の小型建物である。性格と時期はSB01と同様に考えられる。SB03は間口1間（2.2m）、奥行1ないし2間（3.7m）と復元した。性格・時期は前2者と同じであろう。

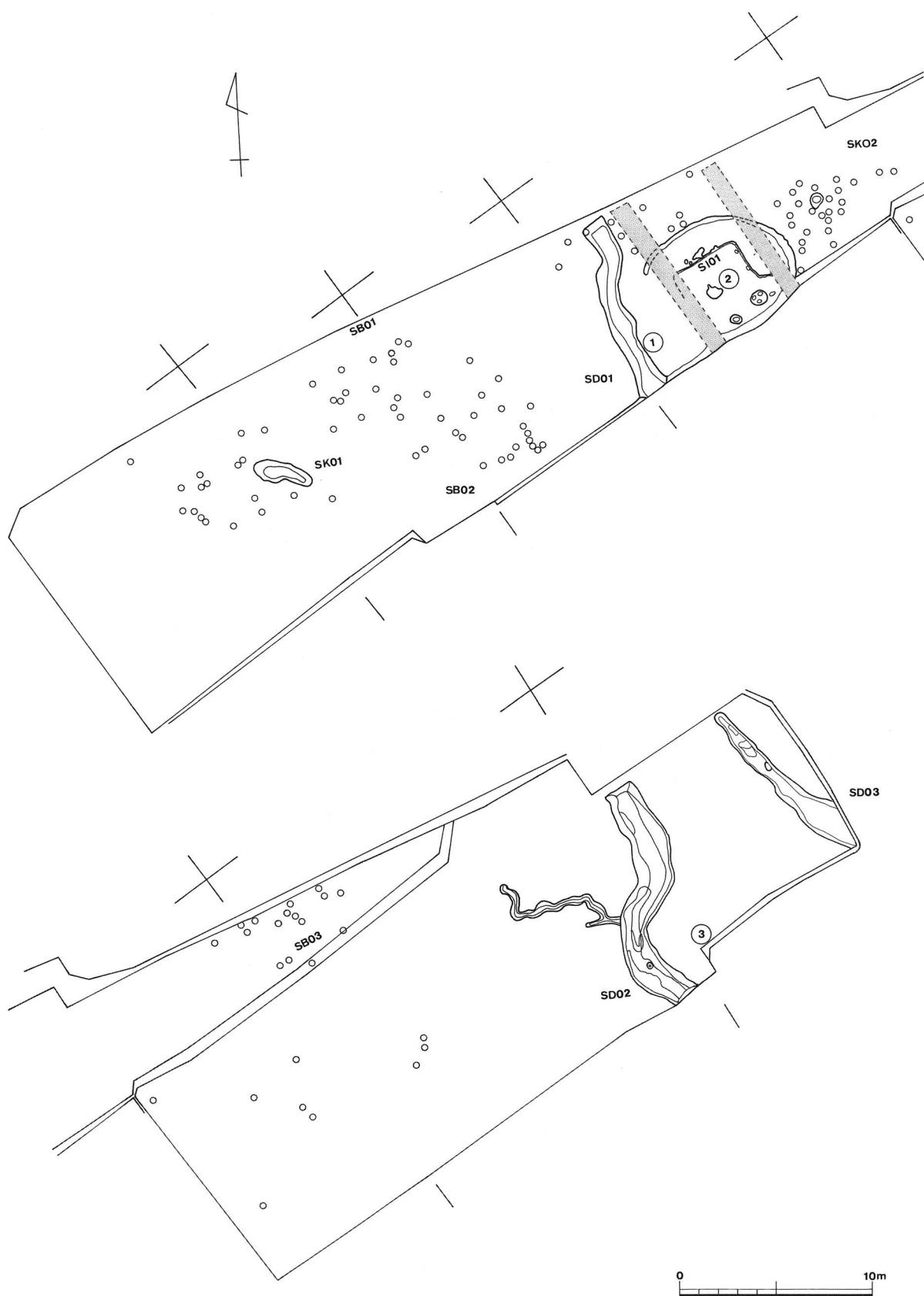
以上3棟の建物跡は多数のピットが集中する場所においてピットの形状と位置関係を捉えて復元したものであり、正確さを欠く恨みがある。しかしながら、こうしてピットが1区から5区にかかる調査区内の一定の個所において集中的に分布することは偶然ではなく、そこに複数の建物群が時期を重ねて存在した蓋然性は高いといえるのではないだろうか。そのことからすれば、これら3棟の建物跡の復元も意味をもつと思われる。

iii) 土坑（第12・13図、図版II-2, IV-2, V-1, 2)

SK01とSK02の2基の土坑を検出している。SK01は長径3m、最大短径約1mの不整長楕円形をしている。深さは0.2mである。性格・時期は不明である。SK02は不整円形の平面形を呈する。径は約0.6m。深さ0.6m。前者同様性格・時期共に不明。

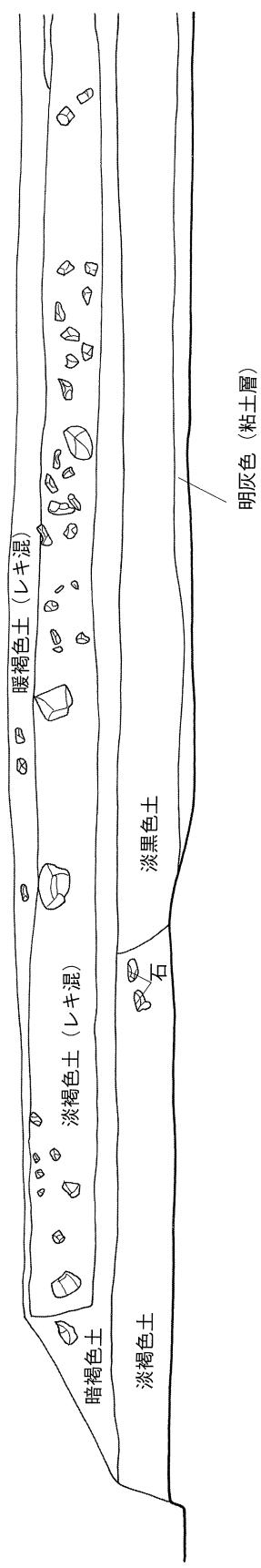
iv) 溝（第14・15・16図、図版III-1, 2, V-3, VI-1, 2)

SD01、SD02、SD03の3条の溝を検出している。SD01は上巾1.0~1.5m、深さ約0.4m。断面が浅い椀状を呈している。長さは約10m程検出した。北から

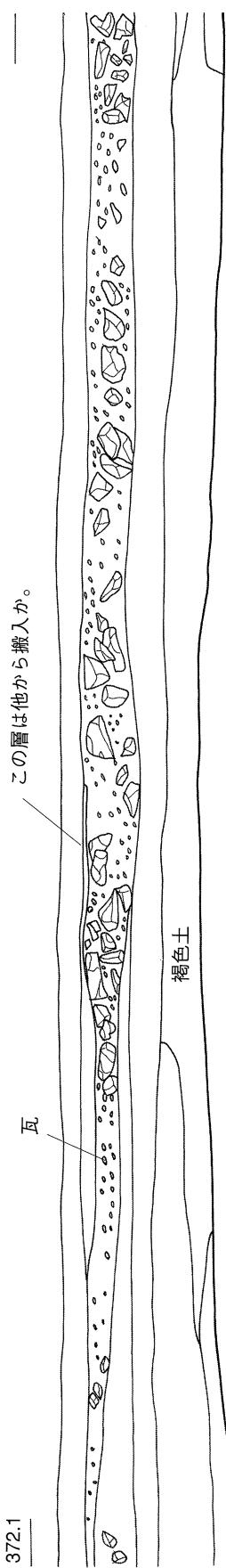


第5図 検出遺構全体図

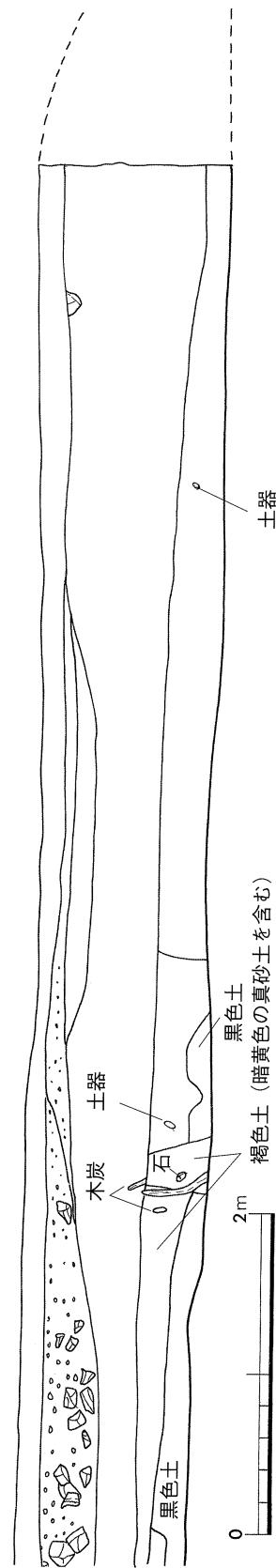
372.1



372.1

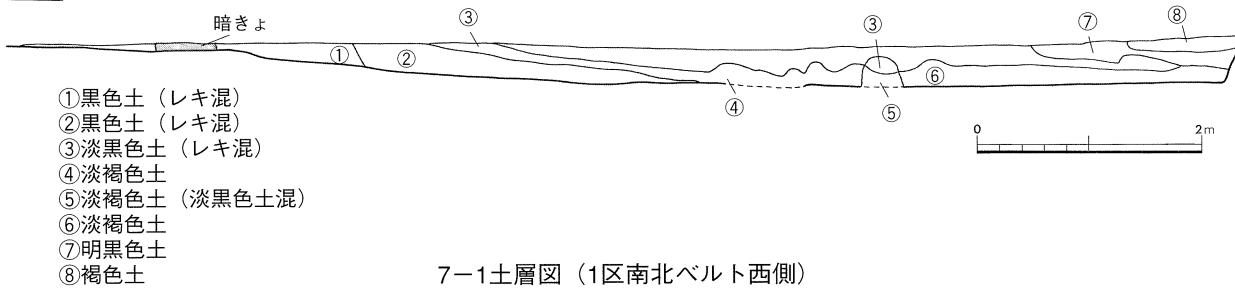


372.1



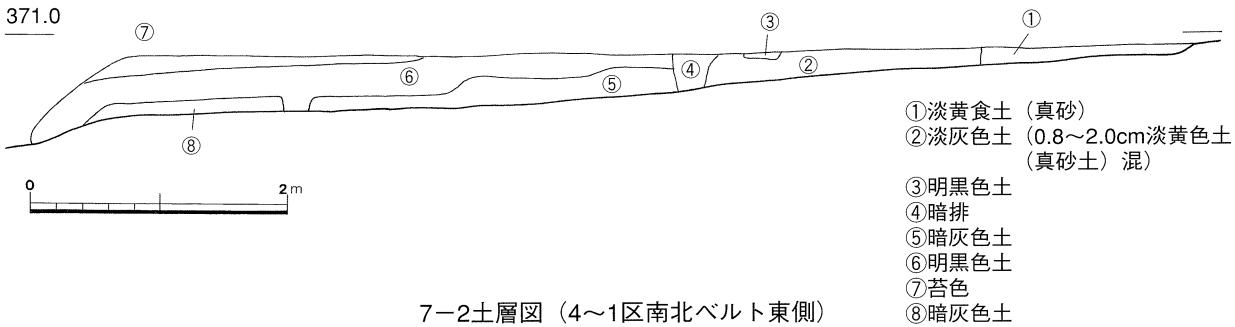
第6図 北壁土層実測図 (5~6区東石)

371.0



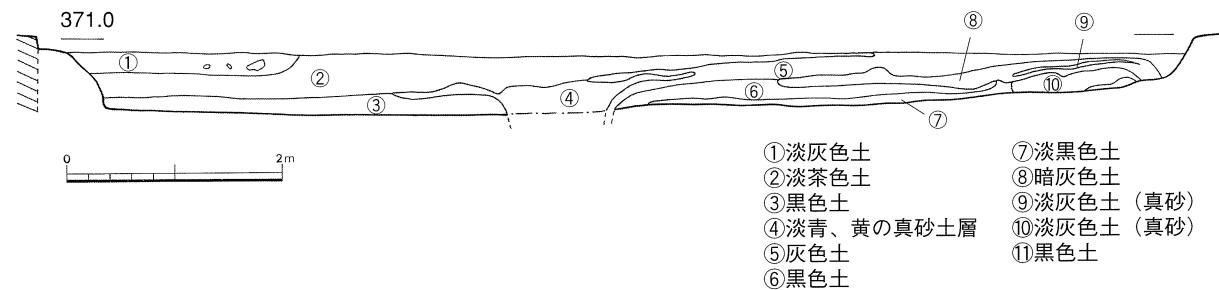
7-1 土層図（1区南北ベルト西側）

371.0



7-2 土層図（4~1区南北ベルト東側）

371.0



7-3・土層図（7区南北ベルト西側）

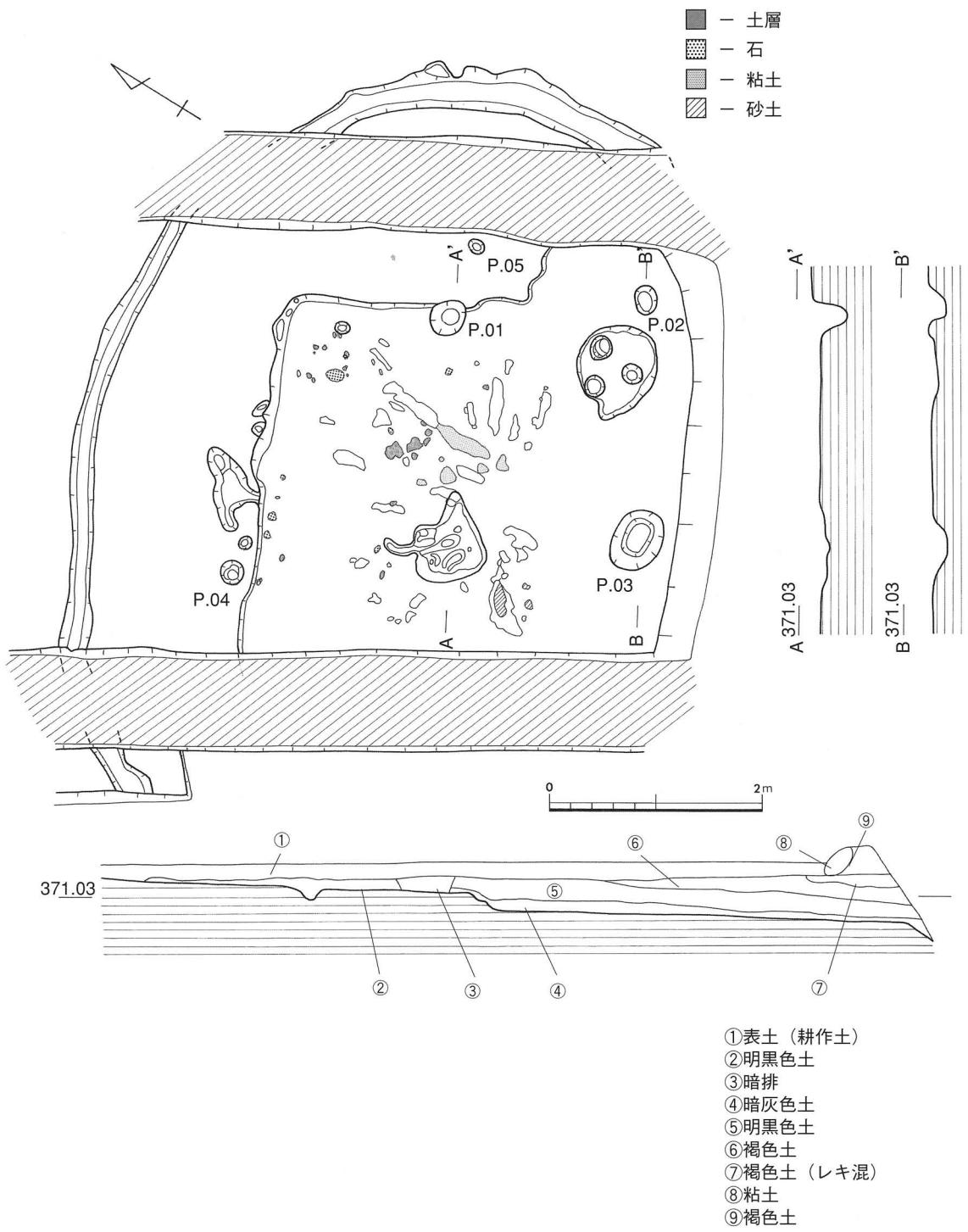
第7図 南北トレント土層図

南に向かって緩く蛇行している。時期は溝の埋土から出土した土器・陶磁器から近世以降と考えられる。性格としては自然流路とみるのが妥当ではないかと思われる。

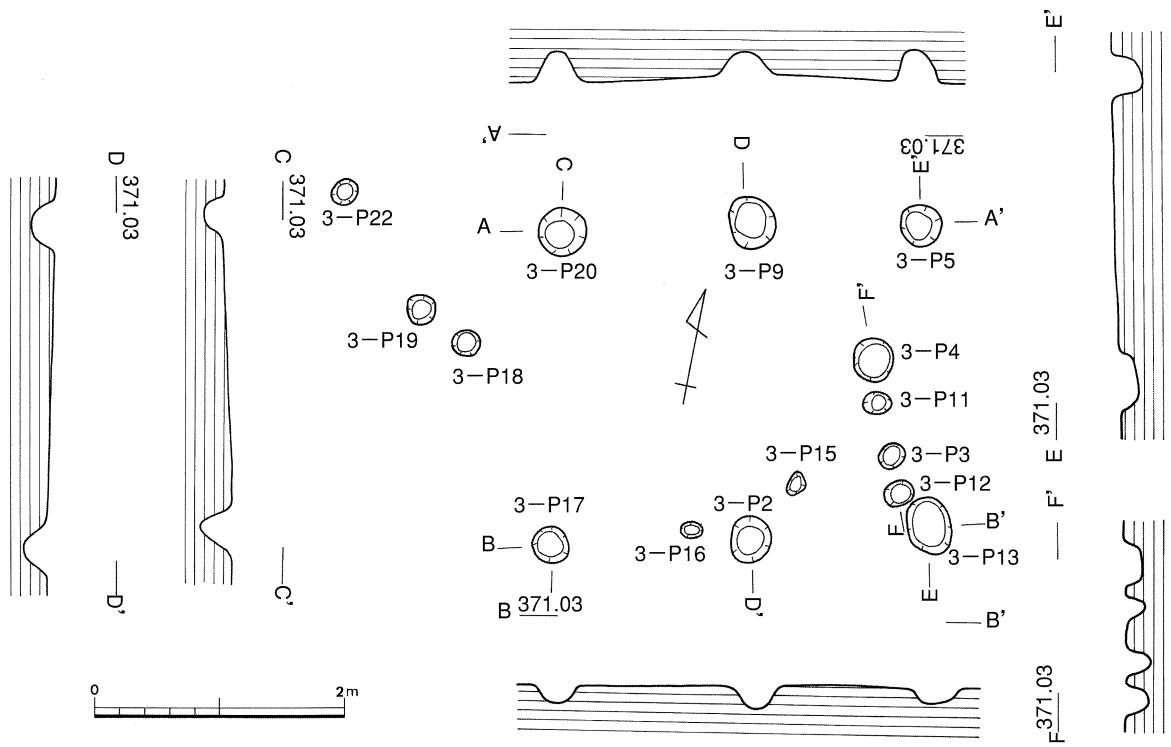
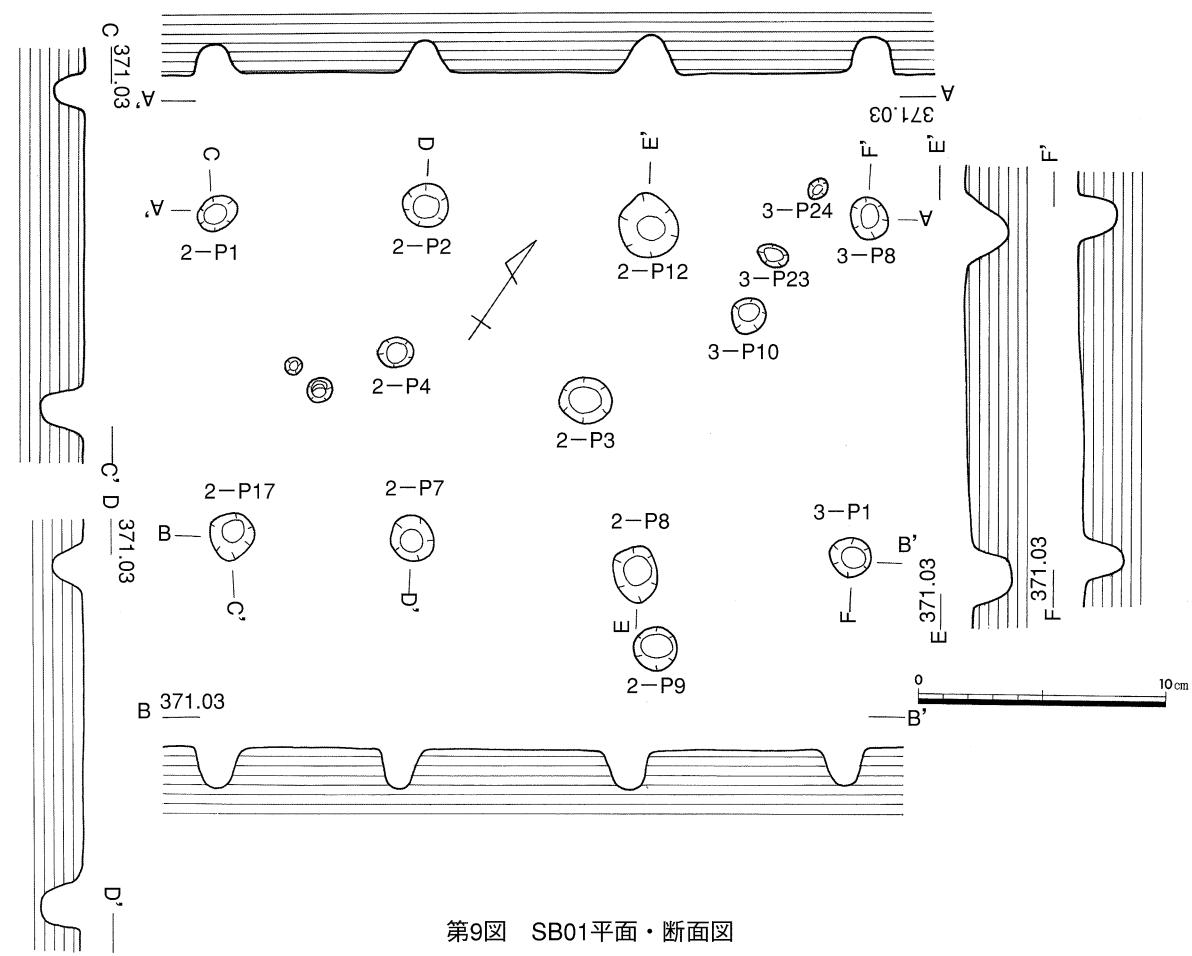
SD02はやや規模の大きな溝である。巾は1.2~2.2m。深さは0.5~0.7mを測る。前者と同じように北から南に向けて強く蛇行する。検出長は約14mである。断面は浅い皿状を呈している。屈曲部で流水の攻撃を受ける側は壁の立ち上がりが急で、溝の外側には押し流されてきた土砂がレンズ状の堆積を示していた（第14図を参照）。溝の埋土下部には水分を含んだ黒灰色の粘土層があり、これには各期の弥生土器片と比較的まとまった古式土師器群が出土して

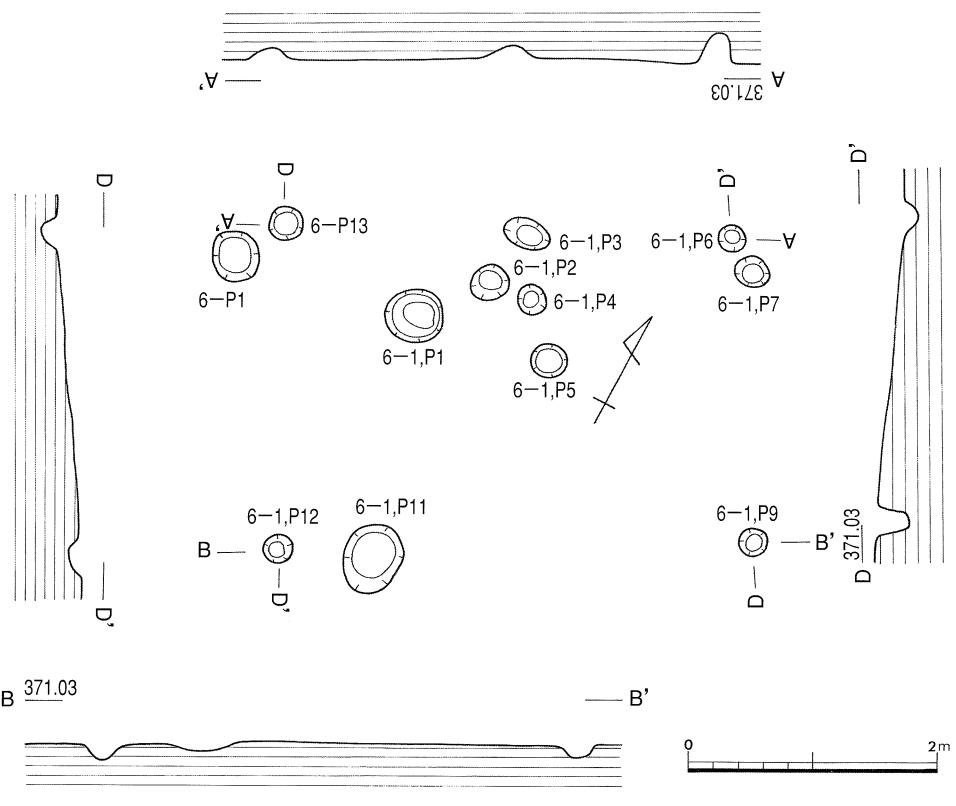
いる。埋土には須恵器や陶磁器類は見当たらないので古墳時代前半期に機能していた溝であることが推定される。性格としては、蛇行している様子や溝外の土層の状態から人工の溝とするよりも自然の流路とみるのが適切ではないかと思われる。

SD03は北から南に向かって直線的に延びる溝である。巾は北側が狭く約0.5m、南側が約2.0mで南に大きく拓く溝である。深さも一様ではないが、最大深は0.2~0.3mを測る。溝底には水流による縦方向の細い条溝がいくつも残っており、自然の流路であったことが知られる。溝内からは木椀が発見されているが、時期を明確にすることはできない。SD02に近く、溝内の埋土の状態も似ていることか

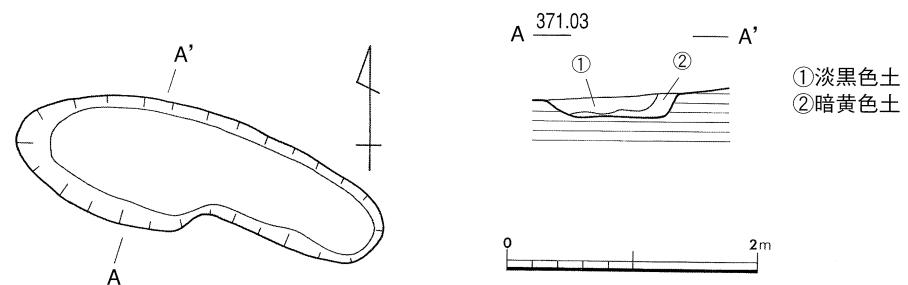


第8図 S101平面・土層・断面図

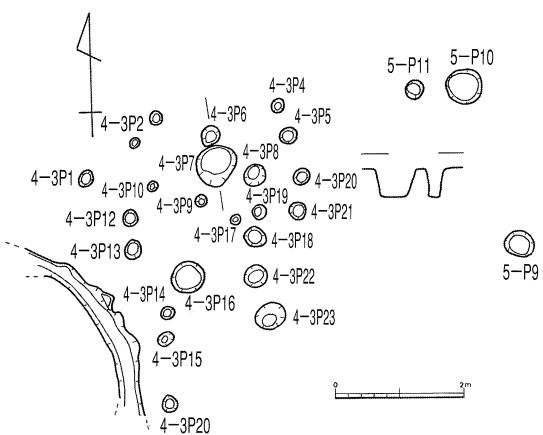




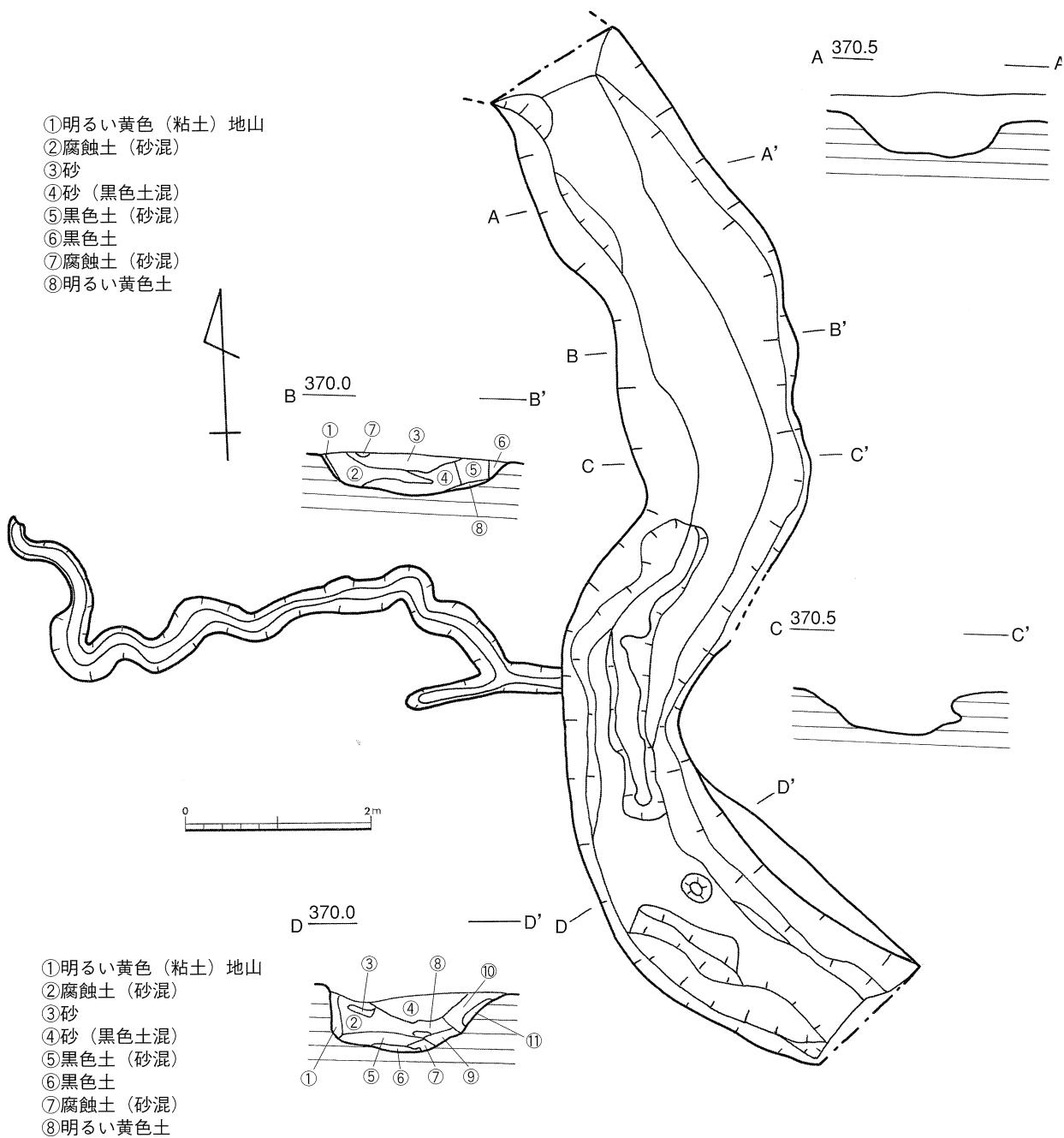
第11図 SB03平面・断面図



第12図 SK01平面・土層図

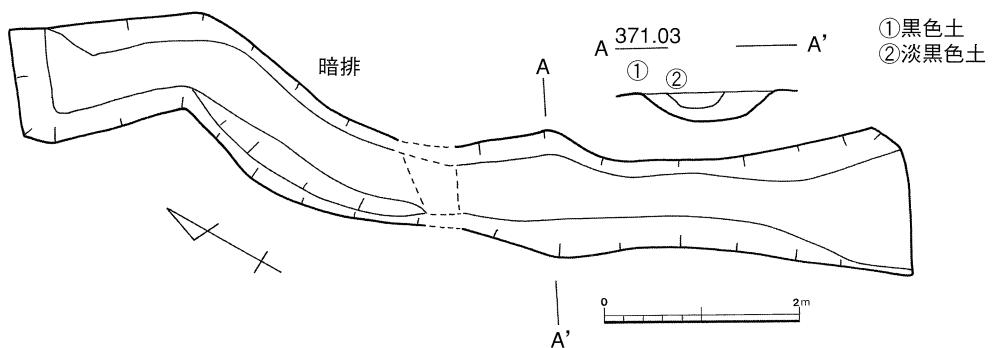


第13図 SK02と周辺ピット群平面図

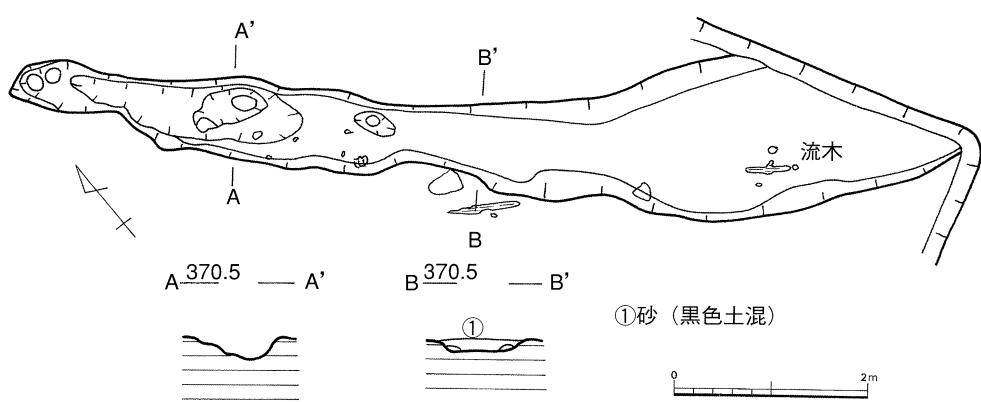


第14図 SD02平面・土層・断面図

コンクリート水路



第15図 SD01平面・土層図



第16図 SD03平面・断面図

V. 遺 物

1. 土器・陶器・陶磁器 (第17~29図、図版V~X)

神代屋遺跡からは土器・陶器・陶磁器類が約5千点の他石器、鉄器等が出土している。以下、形状が明らかで、所属時期の判明したものについて解説する。

i) 弥生土器 (第17~21図、図版V~VII)

前期・中期・後期の土器が出土している。量的には前期と後期のものが多く、中期に属するものは少ない。とくに、中期前半の土器は見当たらない。

〔前期〕 前期の土器には甕と壺が存在する。第17図1~4・6は甕形土器片である。口縁部が如意状に外反し、口・頸部の境に3~6条の平行沈線を巡らしている。1、4、6はやや大きく外反し、2、3は小さく外反する。これらは、いずれも松本岩雄氏の石見編年I—3（以下、「石見」〇—〇と略称する）に属するものである。5は口縁部外反度の小さい甕で口・頸部に2条の平行沈線を巡らす。石見I—2に含まれるものである。7は外反度の大きい甕であるが、頸部付近の詳細が不明。11・12・18は甕の頸部片である。4条の平行沈線が施されている。「石見」I—3に位置づけられる。13は甕の口頸部から胴部にかけての破片で、口頸部境に1条の沈線が認められる。「石見」I—1~2に相当する可能性がある。

第17図8~10・14~17は前期の壺形土器片である。8は大きく外反する口縁の端部に無軸の連続羽状文を刻んでいる。9はラッパ状に大きく外反して開く口縁で、端部を抑えて垂直面をつくり、そこに1条の浅い沈線を入れ、その上下に連続の列点状の刻みを施している。10も外反して大きく開く口縁で、端部を平らにし、その面中央を浅くくぼませている。これらは「石見」I—3の中でもやや新しい時期に位置づけられるものであろう。14~17は頸部付近の破片である。多条の平行沈線が施されている。「石見」I—3に含まれるものであろう。

第17図19~21、第18図22~35は前期土器の底部である。23・25~29は壺の底部と思われる。比較的胴下部のあまり強く内湾しない例が多い。おそらく胴部最大径が中位以上にあるものと思われる。27は大型の壺の底部であろう。以上の他は甕の底部と考えられる。全体的に底径が小さい。

〔中期〕 中期に属すると思われる土器はきわめて少量である。ここでは確実に中期とみられるもの1点を図示した。第19図36は甕形土器片である。口頸部が「く」字状に屈曲し、口縁端部を上下に小さく引き出すように仕上げる。端部面には2条の「凹線」文が巡る。胴部の最大径は上位にあり、ゆるく内湾

して下降している。調整は、外面頸部がヨコナデ、胴部上位はナナメミガキ、中位以下タテミガキ。内面口縁～頸部まではヨコナデ、胴部中位以下に縦方向のケズリが施されている。「石見」IV—1もしくはIV—2に含められよう。

第22図100は中期の甕の底部。台形を呈し、底縁は裾広がりになっている。「石見」III~IVに範囲に収まる器形であろうか。

〔後期〕 後期の土器は出土量が多く、器種も甕・大小の壺・高坏等がみられる。以下、器種毎に説明を加える。

〈甕〉：第19図37~50は甕の口縁～上胴部片である。口頸部が「く」字状に屈折ないし屈曲し、小さく、かつ短く逆「ハ」字状に開く口縁部をもつ。端部は小さく斜め上下に引き出され、端頂部の外面に2~4条の「凹線」もしくは「沈線」を平行に巡らしている。多くのものには上胴部の外面に板状工具の先端を斜めに連続的に押しつけた列状の刺突文が施されている。内面頸部以下にはケズリがみられる。44は頸部から胴部への移行にほとんど変化がなく、鉢とすべきかも知れない。これらの甕の一群は「石見」V—1の範囲に収まるものと考えられる。

第20図51~55は複合口縁の甕である。51はわずかに外傾する幅広い口縁で、外面には多条の平行沈線文が施される。複合部は下方に小さく突出し、頸部は弓状にゆるく湾曲している。外面頸部に板状工具による連続刺突文が巡る。内面頸部以下はケズリ。「石見」V—3に属する。52は逆「ハ」字状に開く口縁部で、口縁外面の多条平行沈線の一部をナデケシしている。口縁端部は尖り気味で複合部は鈍く膨らむ。53は口縁部の形状が52に似るが、端部は丸味をもつ。頸部は「く」字状に屈折し、棗状の胴部に移行する。外面胴部に櫛歯状工具による粗いヨコハケとタテハケが見られる。これら2者は「石見」V—4・古とするのが適當と思われる。54、55は口縁部の高さがやや低めで、小さく外傾している。口縁端部を小さく外側に引き出し、端頂部を平坦に仕上げる。複合部は水平方向に太く、鋭く突出している。55の頸部は「く」字状に強く屈曲している。この2者は「石見」V—4・新か出雲の「大木式」に相当すると考えられる。

第20図57~64、第21図69は単純口縁の甕である。口頸部を「く」字状に屈曲・屈折する57~61、「L」字状に近い屈折を示す62~64の変差がみられる。また、口縁端部をごく小さく内側に引き出す57・58、丸くおさめる60、尖り気味に仕上げる64等の違いも認められる。中でも69は底部を欠失しているが、外

傾して逆「ハ」字状に開く口縁部で端部を少し外側に折り曲げるよう仕上げる。胴部は倒卵形に近い。外面の口縁・頸部をヨコナデ、胴部はタテハケで調整している。内面頸部以下はケズリとなる。以上の単純口縁甕は、その口縁部等の特徴から古墳前半期に属する可能性が高く、複合口縁甕54・55等の一群の土器に併行もしくは後続する土器群と見なすことができよう。65～68の甕は口縁部が大きく外反し頸部は「く」字状から逆「L」字状をなしている。内面も「く」字状に鋭く屈折し、頸部以下にケズリを施している。これらは土師器でも後出の甕と見るべきであろう。69についてもその位置づけには検討の余地があるかも知れない。

〈壺〉：第21図70～74は壺である。70・71は漏斗状に開く口縁部で、端部を少し肥厚させ、端部外面に2～4状の「凹線」もしくは「沈線」を施す。70は頸部下に板状工具の端を使った連続刺突文を入れている。71は口縁部を欠失しているが、「く」字状に屈曲する頸部に楕円状の胴部が付く。以上の2者は「石見」V-1に位置づけることができよう。73は口縁端部が上方に高く引き出され、その外面に5条の「凹線」ないし「沈線」を巡らしている。「石見」V-1もしくはV-2とするのが妥当であろうか。74、75は複合口縁の壺である。74は口縁部が直立し、端部を外反気味に仕上げる。複合部は水平方向に太く突出、頸部は弓状に湾曲している。頸部外面に「\」の連続列状沈線を刻む。羽状文の一部と思われる。75は口縁部と頸部が一体になって外反・外傾している。複合部は直角状をなす。薄手の器壁で内外を丁寧なタテのミガキで仕上げる。類例の乏しい壺で、搬入品の可能性がある。

第21図76～83は小型壺もしくは壠である。76・77は、外傾して逆「ハ」字状に開く高い口縁部に偏球形の胴部が付くもので、いわゆる「小型丸底壠」に類する壺と考えられる。80～83も同類であろう。83は胴部に施文が行われている。78・79は頸部が太く口縁部の形状も前群と異なるが、同類の壺・壠に含めうるものと思われる。これらの小型壺は古墳前半期に広範に出現することが知られているが、造りや形状の細部を見るとこの類の壺でも新しい時期に含めるべきかと思われ、先述の単純口縁の甕等とセットを構成する器種とすることができます。84は壺の上胴部片である。3条一組の薄い平行沈線を3段に巡らし、段間をナナメのハケ線で埋めている。弥生終末から古墳時代初めに該当するであろうか。

ii) 土師器・その他 (第22～23図、図版Ⅷ-1,2,Ⅸ-1,2)

第22図85、86は甕の胴部片である。85はやや下膨らみの胴部で、大型の破片。タテ方向の粗いハケを

施している。SI01の中央床面から出土したものである。92、93、98は強く外反する口縁部をもつ甕で、器壁の厚いのが特徴といえる。外面ハケ、内面はケズリ仕上げとなっている。85、86と共に存する土師器であろう。90は小型の壺もしくは鉢の口縁部か口縁～体部片。赤色顔料が塗布されている。91は小型の鉢。94～96は手捏ねの小型坏片。以上は先に記した単純口縁の甕、小型壺等との共存が考えられる。97は外反する口頸部と胴部の境に鈍い屈折部をもつ土師器の坏片。ヨコナデ仕上げである。85、86の甕と一群をなす器種であろうか。

87～89、99、100は弥生土器であるが、図作成の都合上ここに表示した。87、88は器壁の比較的薄い甕の胴部片である。87は細いヘラ先による「\」状の連続列状文を施す。88は外面を小さいハケ仕上げされている。これらは「石見」V-4に属すると思われる。89は頸部片。多条の平行沈線が施される。「石見」V-1に含められる。99は体部から口縁にかけて逆「ハ」字状に心持ち内湾して開き、口縁端部の一端を下方に小さく引き出している。端頂面は強くナデ浅く窪ませている。外面はハケ後ナデ、内面ケズリ後の指ナデしている。高坏もしくは台付き鉢等の脚の可能性もある。端部の仕上げ等からすると「石見」V-1前後であろう。

第23図101は脚付き鉢である。体部は大きく内湾して立ち上がり、口縁部は小さく内傾している。脚は「ハ」字状に開く。102も鉢もしくは壠で脚付きかと思われる。体部はゆるく内湾し、直立状の口縁部に繋がる。口縁端部は尖り気味に仕上げる。103は台付き鉢もしくは壠の台部。裾部が低く張り出している。

104～107は高坏の坏部、108～116は脚部である。104、106は底部と体部の境に段があり、体部が外反して立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。105、107は底部から体部へは丸味をもって移行し体部はやや小さく外反している。口縁端部は尖り気味に仕上げる。108～112は上・中部の筒状からラッパ状に開く裾部の脚である。105、107の坏部と組み合わせとなるものであろう。113～115は坏部との接合部から「ハ」字状に開く脚部である。器壁は厚い。これらの高坏群は概ね「石見」V-4新段階から古墳時代初め頃の土器群を構成するものと思われる。117は鼓型器台の台部片で、「ハ」字状に開いている。118、119は小型の鉢ないしは壠である。ゆるく湾曲する底部と外反する体部の境に稜もしくは段がみられる。内外面はミガキかナデ調整。一見縄文晩期浅鉢に似た器形を示すが、強いナデを施す。22図97等と相似した時期の土器と思われる。

iii) 須恵器 (第24~25図、図版IX)

須恵器は古墳時代と奈良・平安時代のものが出土している。

〈壺〉：第24図120、121は古墳時代の蓋壺の蓋片である。120はこんもりした天井部と高くほぼ垂直に立つ体部をもつ。天井部と体部の境には段状の突出部が認められる。口唇部は浅い段をなしている。TK47、大谷晃二氏のA 1型であろう。121は前者より体部がやや開き気味になる。TK43、大谷氏のA 3型に近い形状と思われる。

122~130は輪状つまみをもつ壺の蓋である。122、124は天井平坦面が広く、ゆるく湾曲して体部に移行している。摘みは低く、頂部を平坦に仕上げている。123は天井部を描いているが、口縁部が鳥嘴状を呈する。125、130もこれらとほぼ同一の形状であろう。以上の蓋は、久本奥窯跡編年V期に相当すると考えられ、8世紀前半代の産とみられる。126~128は天井平坦面が狭く、つまみの頂部を尖り気味に仕上げている。また、口縁部と体部の境に幅の狭い平坦部が巡り、口縁部は小さい鳥嘴状をなしている。これらは久本奥窯跡編年のVI期で、ほぼ8世紀後半代の所産であろう。

131~146は壺である。高台の付くものと無高台のものとがある。131は無高台で、底部からゆるく湾曲して立ち上がった体部が小さく逆「ハ」字状に開いている。口径が小さい小型の壺である。飛鳥編年IIないしIII期に同類がみられ、7世紀中葉前後であろう。144、148も無高台で回転糸切り痕が残る。9世紀代に属すものであろう。

132~137、142、143、145、146は高台をもつ底部である。その形状から5タイプに分類できる。その1は、132のように底径が大きく、高台は底部と体部の境よりやや内側に貼り付けられているものである。体部はゆるく湾曲して立ち上がる。その2は、高台の貼付位置は前者と同様に底部・体部境より内側になるが、体部が逆「ハ」字状に直線的に開いて立ち上がるもので、133、134が該当する。その3は、高台が底部・体部境に接して貼り付けられ、体部はあまり開かず立ち上がるもの。136、137、143、146がこのタイプである。その4は低い高台が底部・体部境に付くものである。142が該当する。その5は擬高台ともいえる形状の底部で145が相当する。底部・体部境を強くしほって高台状につくり、回転糸切りで仕上げている。体部は湾曲して大きく開くと思われる。138~141は壺の体部・口縁部片である。体部はあまり開かず、口縁端部を尖り気味に仕上げる。底部の3タイプと接合されるものであろうか。138は口縁端部を小さく外反させている。金属製蓋壺の模倣品の流れを汲むものと思われる。147は底

部が丸味をもち、その中心部は地面に接している。壺の底部の可能性もある。

以上の高台付き壺の時期は次のように考えられる。1タイプは蓋122等とセットをなすものであろう。8世紀前半代である。2・3タイプは蓋の126~128とのセット関係が想定されるが、3タイプはやや時期が下る可能性がある。2・3タイプは8世紀後半から9世紀前半に位置づけておこう。4タイプは同形が大田市白堀遺跡に多い。9世紀後半から10世紀に降るタイプと思われる。5タイプは4タイプよりも新しい類と考えられる。

〈甕〉：第25図149~153、第26図154・155は甕の破片である。149は外反する口縁部で、端部は垂直面をなし、そこに2条の太い沈線を巡らす。端部の下方を鋭く突出させている。外面には入念な波状文が施される。120の蓋壺等と同時期に属するものであろう。150はゆるく外反する単純口縁の甕で、端部は平坦に仕上げている。151は、口縁が逆「ハ」字状に開き、端部を玉縁状に仕上げる。外面にはヘラ状工具による波高の高い波状文を施し、その上に3段の凹線を入れて仕切っている。この2者と類似の甕は、久本奥窯跡北側盛土からV期の蓋壺をともなって出土しており、これに近い年代を想定することができる。152~155は甕の胴部片である。152、153には外面に繩蓆文の叩き目、内面に同心円文の当て具痕がみられる。150、151の胴部片の可能性がある。154は外面に格子目文の叩き目、内面に同心円文の当て具痕が残る。内外面とも最後にナデを施す。155は外面に繩蓆文の叩き目、内面には目の粗い当て具痕をもつ。154、155は152、153より後出で、154は9世紀代の所産とすべきかも知れない。

〈壺〉：第26図156~159は壺である。157は円筒状の高い頸部に短く、小さく外反する口縁部がつく。口縁端部は上方に摘み出し、外側に面をつくっている。156は偏球形の胴部片。158~160は底部片。158は削り出しの高台で、球形の胴部につながると思われる。159、160は胴部と体部の境に高台を貼り付けている。胴部は筒状を呈するか。161、162は無高台の小型壺である。161は筒状の胴部で、コップ形の小壺が考えられる。以上の壺については、おおむね久本奥窯跡VI期を中心とした年代を宛てができるようと思われる。

〈その他〉：第26図163~64は鉢である。163は、口縁部が複合口縁状を呈している。164は東播系の鉢の口縁部である。165、166は類品をみない器種である。165はあたかも鼓型器台の台部のような形状である。166は大型の足付盤（三足盤か）の破片と思

われる。盤は浅く反り、足は長方形で端部を内側に折り曲げている。灰白色を呈する。三足盤と称される器種は愛知県猿投窯群で9世紀頃に出現している。

iv) 陶器・陶磁器（第27～29図、図版X）

第27図167～180、第28図194は白磁である。167、168、194は、白磁V類の碗。口縁端部をゆるく外反させ、外面体部は籠状工具により施文されている。170～173、177、179はIV類の碗。口縁端部を外方に折り返し、大きな玉縁状に仕上げている。169は、IX類の皿である。口縁端部の釉をかきとり無釉にする。174は、水注あるいは壺と思われ、内面に強いロクロなどの跡が残る。175は碗の胴部。内面に櫛目文が施されている。176は皿で、内面に灰黄褐色がかかった透明釉が薄くかかり、細かい貫入がはいる。178は端反りの皿で、15世紀後半～16世紀代のものと思われる。180は碗の底部で、淡い水色がかかった透明釉がかけられ、内面底部と体部の境に沈線が巡る。

第27図181～191は青磁である。181、190、191はI類の碗。181は口縁部片で釉は暗緑色を呈し、内面口縁下に沈線がめぐる。190は焼成良好で胎土は淡灰色、釉は灰緑色を呈するのに対し、191の胎土は淡黃白色、釉は黃灰色を呈する。182、183は口縁端部を外反させた碗で、15世紀代のものと思われる。184は稜花皿。口縁端部を輪花状に仕上げ、内面は籠状工具により施文している。185、187、189は盤である。185は口縁端部を大きく外方に屈曲させ、外面体部には鎬蓮弁文が施される。釉薬は暗いオリーブ色を呈する。187は口縁端部を外反させたのち上方に引きだす。内面体部には鑿状工具により蓮弁文が施される。189は盤の底部で、底径は約9cmである。186は同安窯系青磁の皿で、内底部に櫛目文が施文される。188は小碗である。底径は約4.8cmで外面体部には蓮弁文が施される。

第28図192は中国製天目碗と思われる。胎土は灰白色で硬く緻密である。

第28図193、205、207は朝鮮製の陶磁器である。193は白磁の碗。胎土は白色で内外面には細かい貫入が入っている。205、207は施釉陶器の皿。両者とも高台は浅く削り出しており、205は灰白色的釉が、207は灰色がかかった透明釉が高台端部を除く内外面にかけられている。また205は内面底部に砂目跡が残っている。

第28図195、196、201は中国製染付である。195、196は碗。高台端部は195が断面逆三角形に、196は台形に削り出す。両者とも内面底部に草花の文様が描かれている。201はE群の碗で、内底部分が緩やかに盛り上がり、牡丹唐草文が描かれている。

第28図199、200は漳州窯系の染付である。199は碗で、高台は断面四角形を呈し、体部との境もあいまいである。釉は青みをおびた透明釉が厚くかかっている。200は皿で、体部は逆ハの字形に広がる。内面体部下半は釉がかきとられている。

同図197、198、202は肥前系磁器である。198は内面底部の釉を輪状にかきとり、砂を敷き重ねた跡が残る。外面には青磁釉がかけられている。202は紅皿と思われる。

同図203は施釉陶器の壺である。口縁部はラッパ形に大きく開き、端部は丸くおさめる。内外面に黄緑色の釉が薄くかかる。朝鮮製の可能性もある。

同図204は唐津焼の皿。内面と外面体部下半に灰褐色の釉がかけられ、内底部には砂目跡が残る。

同図208は中国製褐釉壺。外面肩部に一本の沈線がめぐり、外面には暗緑色の釉がかけられている。胎土は緻密で黒色粒子を含んでいる。

同図206、209は焼き締め陶器の壺である。206は底径約13cmで、窓によって切り離されている。内外面とも灰黒色を呈する。209は外面体部ナデ、内面体部ヨコハケ調整を施す。胎土に灰白色及び赤褐色粒子を含む。

第28図210～第29図216は備前焼である。210、212は擂鉢の底部。210は内面に一単位6条からなる擂り目が入れられ、器体は明赤褐色を呈する。212は一単位7条からなる擂り目が入れられている。両者ともよく使用されており、内面の摩滅が激しい。211、213～216は、擂鉢の口縁部。211、214は、口縁端部は断面四角形に仕上げられ、端部を下方に突出させている。乗岡氏の中世3期のものと思われる。213は口縁端部を上方に拡張させたもので、中世4期のもの。215は口縁端部を上下に拡張させたものである。胎土は非常に緻密で、1mm以下の砂粒をわずかに含む。中世5期と思われる。216は口縁部を断面逆「く」の字形に仕上げている。

第29図217～219は瓦質土器。いずれも火鉢など鉢形になると考えられる。217は口縁部が逆「L」字状に屈曲し、内外面ともミガキによる調整がなされる。218は口縁端部を内側に肥厚させ、玉縁状になる。219は外面にスタンプによる大小の格子文を施す。3点とも焼成は良好で、内外面とも灰黒色を呈している。

以上、本遺跡から出土した陶磁器類をみて見ると、時代的に量の多寡はあるものの、およそ平安時代の後半頃から近世に至るまでのものが出土しているようである。出土量からすると大きく2つのピークが認められる。一つは12世紀から13世紀中頃の一群で、第27図170～173の白磁IV類の碗や、167、168の白磁V類の碗、186の同安窯系青磁皿に代表される。もう一つは15世紀から16世紀代の一群で、第27図182

の竜泉窯系青磁碗や、第28図195、196、201の景德鎮系染付、第27図178の白磁皿がそれにあたる。国内産陶磁器では備前焼系の擂鉢がある（第28図210～第29図216）。

次にそれぞれのグループにおいて注目される遺物について述べる。第27図167～191の遺物群ではそのほとんどが碗皿である中で174の白磁壺が注目される。また、東播系須恵器の鉢が1点出土しており、これも当該時期のものと思われる（第26図164）。第28図193～207の一群では、朝鮮製陶磁器が3点出土しており注目される（図193、205、207）。近年、島根県内においても朝鮮製陶磁器の出土例が多く知られるようになり、若干の傾向も見えてきたところである。県下において出土例が増加するのは、いわゆる李朝といわれる時期のもので、特に日本海沿岸及び有力大名の拠点において多く確認されている。本遺跡の性格を解明する際に考慮していかねばならない点だと思われる。また、本遺跡からは青磁の盤や中国製天目碗など、饗宴の場あるいは茶の湯が行われていたことを示すような遺物も出土しており、当遺跡を営んでいたのは財政的に豊かであり、また当時の流行やたしなみを身につけていた人物の存在が想像される。

2. 石器（第30図、図版 XII - 3）

本遺跡からは少量ながら石器が出土している。代表的なものを図示し、説明を加えることとする。

第30図220は略長方形状の磨製石器である。断面は薄い長方形を呈する。両面とも光沢を発するほど磨研されている。一長側面角と短側面角には成形時的小さなトリミング状の打撃痕がみられる。再利用品の可能性がある。砥石であろうか。221は扁平な三角形状の石器片である。磨製石包丁の破片と思われる。222は太型蛤刃石斧。刃部が大きく欠損し、頭頂部も一部を欠失している。223、224は磨石。扁平楕円形の川原石を使用。227は打製石鏃。浅い凹基式に属する。安山岩製。228も同型式の打製石鏃。黒曜石製である。以上の石器は弥生時代のものと思われるが、細かい時期の特定はできない。

3. その他（第30図、図版 XII - 3）

第30図225、226は鉄器である。225は板状を呈するが、器種は不明。226は板状の大型品。一側面は小さく折り曲げている。鋤の一部であろうか。両者共時期は不明。229は木製椀の底部。平底で、体部へは内湾して立ち上がる。230、231は寛永通宝。「文錢」と呼ばれる類で17世紀末頃のものである。

以上図示した以外で鍛治滓等の鉄滓や果実の種が出土しているが、いずれも所属時代を特定することはできない。

4. まとめ

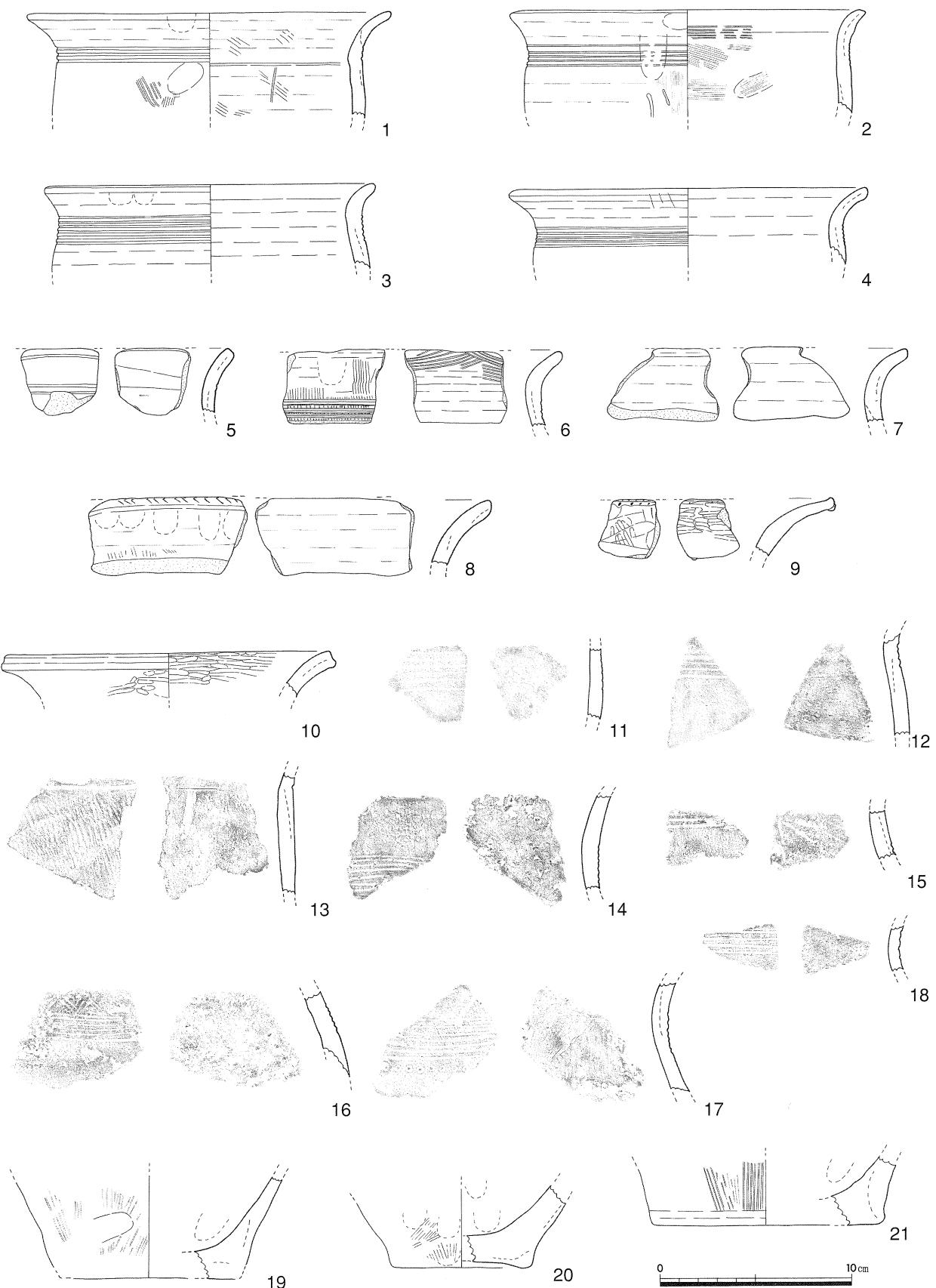
- ① 弥生土器は前・中・後期のものが存在する。量的に多いのは前期と後期で、中期のものはごく少量である。前期の土器は、甕が大多数を占める。これらは、概して如意状の口縁部を呈し、口・頸部境に3条以上の平行沈線文を巡らしている。壺は口縁部がラッパ状に開き、頸部に数錠の平行沈線文を施す類が多い。胴部は最大径を中位にもつ長胴形をなすと思われる。これらは「石見」I—3に相当し、この期に本遺跡が弥生集落として本格的な展開を遂げたことをうかがわせている。しかし、一条沈線の甕も少量ながら認められるので、遺跡の成立期は「石見」I—2までさかのぼることが考えられよう。
- ② 中期の土器はきわめて少量である。それも確認されたのは第19図36の1点だけで、「石見」IV—1とみられる。中期前半の土器は見出せない。このことは、偶然というよりも集落の継続性を示す事実として捉えることが必要であろう。
- ③ 後期の土器は量的にかなり多い。わけても「石見」V—4新段階から古墳時代初期に属すると見られるものが目立ち、「布留傾向」甕系統につながる単純口縁甕が多数出土していることは注意を要する。弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけて集落の繁栄期が存在したことが推定されよう。それとやや対照的には、いわゆる「山陰系」の複合口縁甕が相対的に少なく、江の川水系の沖丈遺跡等とは異なった様相を示すことである。
- ④ 後期の土器でいま一つ注意されるのは、「石見」V—1～2の土器はかなり存在し、中期後葉との連続性をうかがわせているが、「石見」V—3に属する土器は少ない。偶然であろうか。なお、これら後期前半の土器には山陽方面とのつながりを思わせる甕が少なからず見出せることも指摘しておく必要があろう。
- ⑤ 須恵器は5世紀代とみられる古式のものから平安時代の終末期のものまでほぼ出揃っている。量的には奈良時代を中心とした時期のものが目立っている。石見地方では奈良・平安時代に集落の発展期があり、本遺跡もその一つであることが確認される。
- ⑥ 陶器・陶磁器については、その出土総量が発掘面積に比して相当多いことが注意される。中でも中国製陶磁器や朝鮮製陶磁器が少なからず出土したことは遺跡の性格を考える上で看過できない。これら外国産陶磁器出土状況に二つの時代的ピークが認められたことも重要であろう。陶器・陶磁器の大半は国内・国外からもたらされたものであり、これらの出土は本遺跡が交通・交易の要衝地に位置し、それを掌握する有力者が存在したこと

を示唆しているといえる。

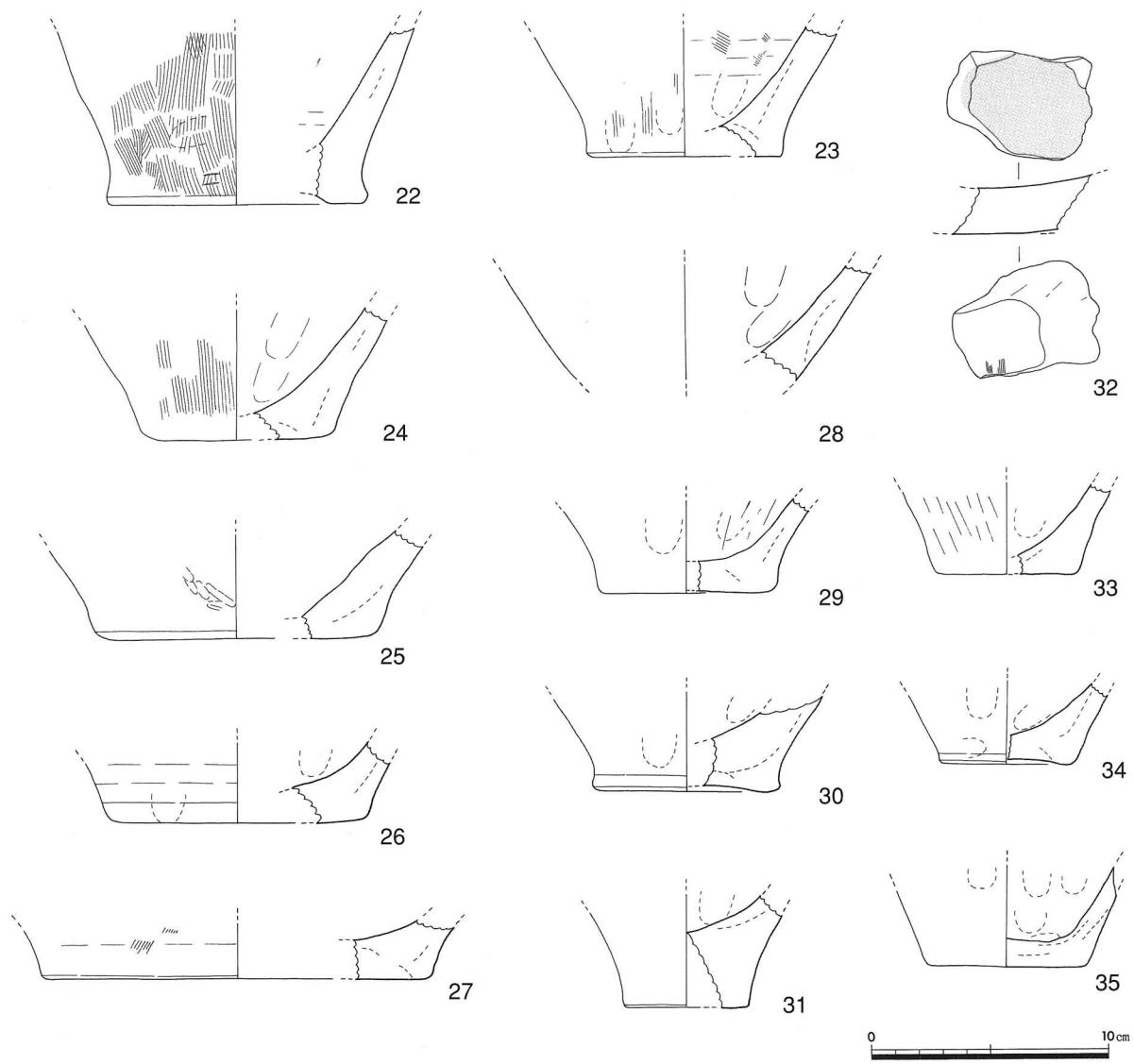
- ⑥全体的には弥生時代から中世～近世までにわたる土器・陶器・陶磁器が万弁なく出土し、この遺跡が弥栄地域の中心的な集落の位置を占め、連綿として核集落の地位を保ちつつ展開してきたことをうかがわせている。また、それぞれの時代において遺物量の多少の違いが明瞭に認められた。そのことが全体の歴史動向をどう反映するのかは大いに検討を要する問題である。

参考文献

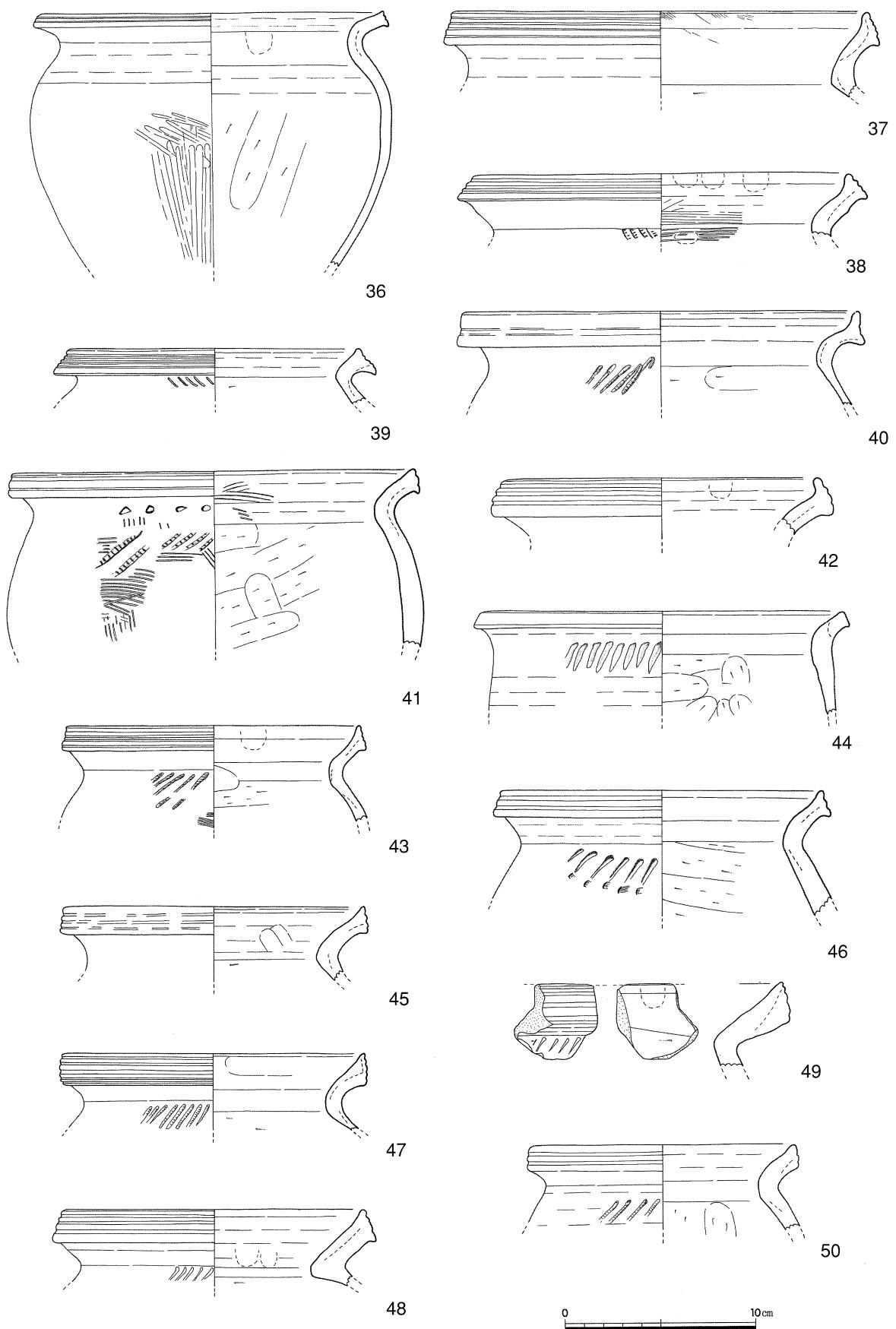
- 大谷晃二「出雲地域の須恵期の編年と地域色」(『島根考古学会誌』11集 1994年)
- 小野正敏「15, 16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 1982年 貿易陶磁研究会
- 西尾克己他「久本奥窯跡」『一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 I』1995年、島根県教育委員会
- 西尾克己・守岡正司・細田美樹「広瀬富田城跡と富田川河床遺跡出土の朝鮮王朝陶磁器について」『松江考古』第9号 2001年 松江考古学談話会
- 乗岡 実「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』 2000年 中近世備前焼研究会
- 松本岩雄「石見地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』1992年、木耳社
- 平野吾郎他「東海地方の歴史時代の土器」『日本土器事典』1996年、雄山閣
- 牧田公平他『沖丈遺跡』2001年、邑智町教育委員会
- 松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」『島根考古学会誌』8集 1991年
- 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4集 1978年



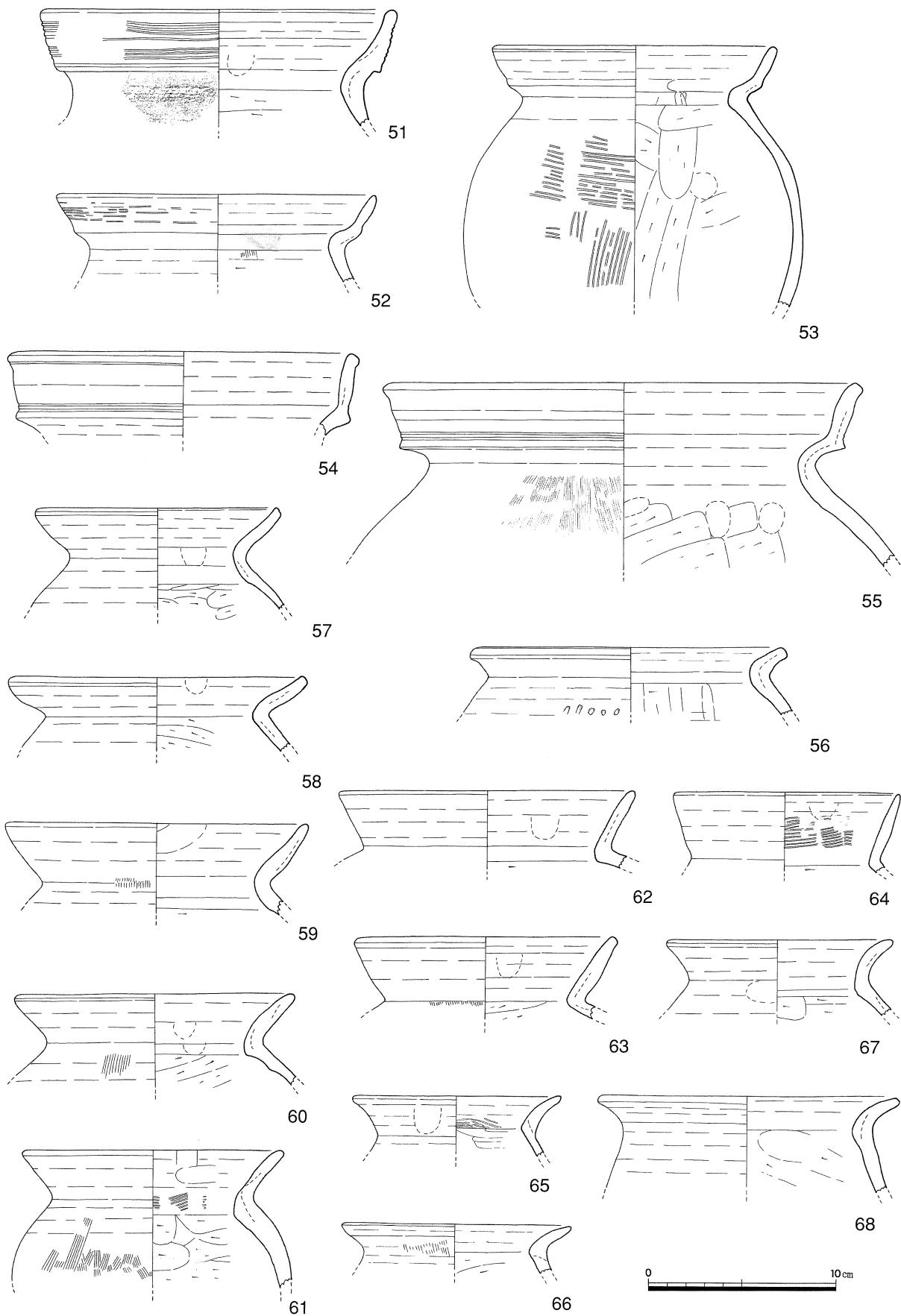
第17図 出土遺物実測図



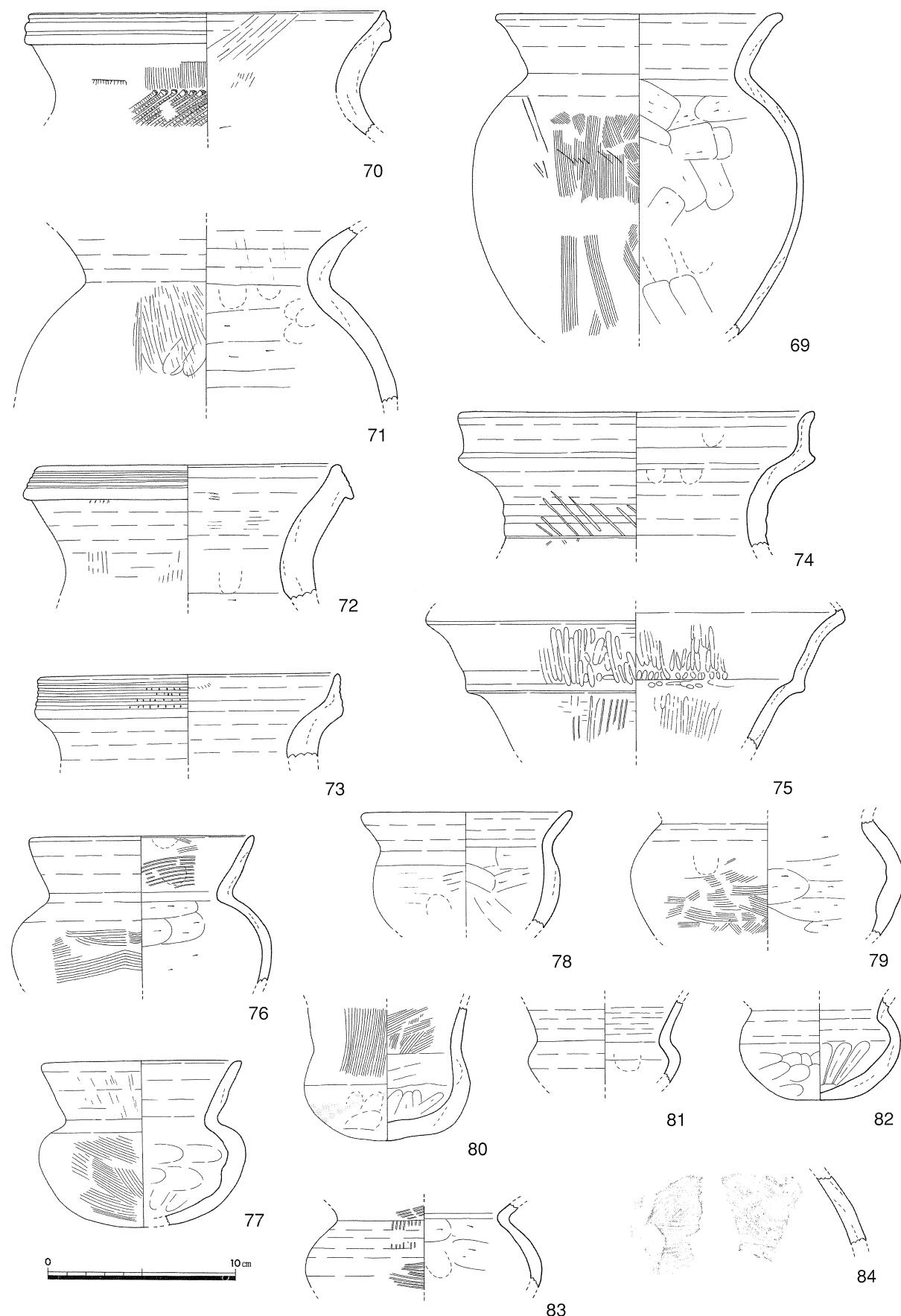
第18図 出土遺物実測図



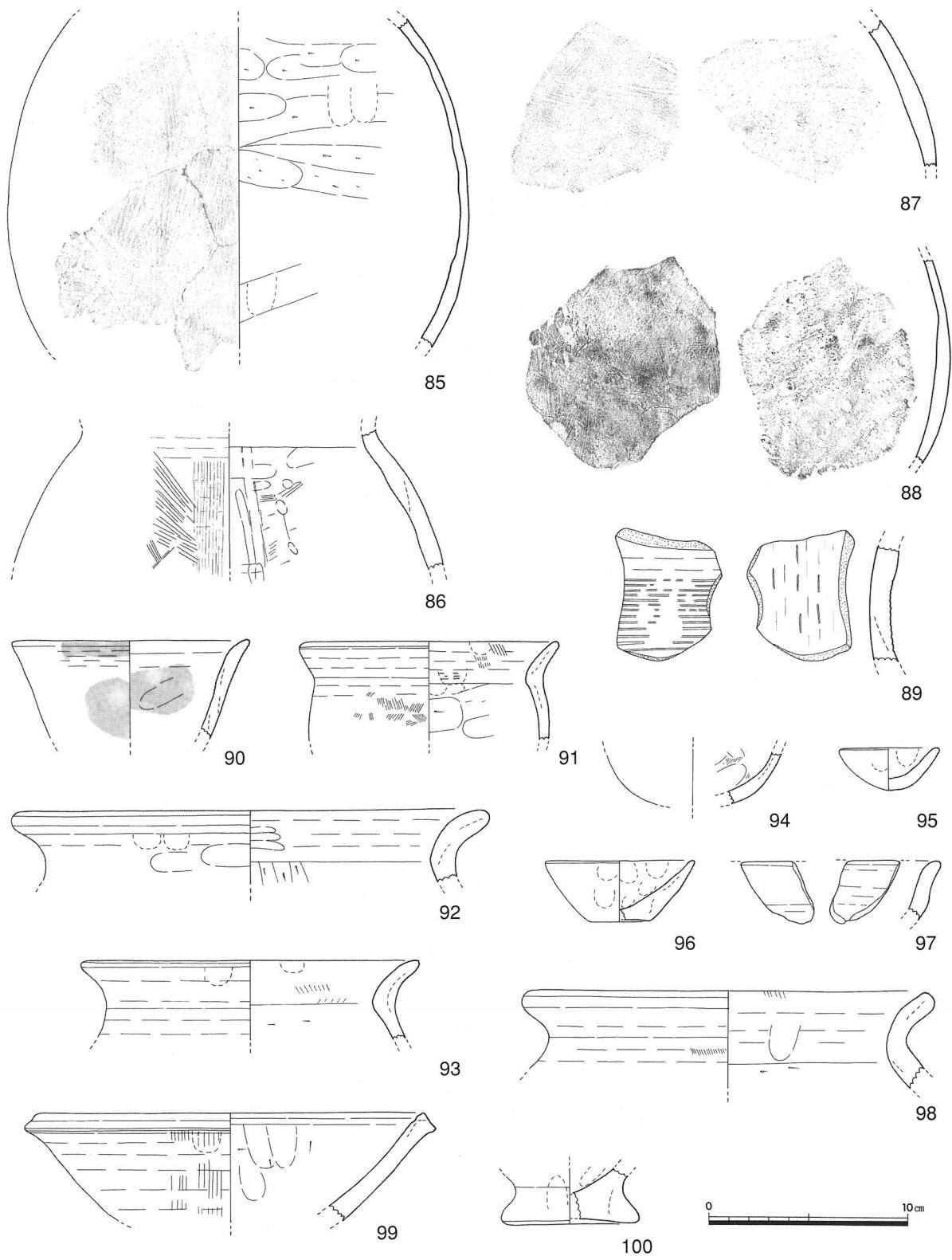
第19図 出土遺物実測図



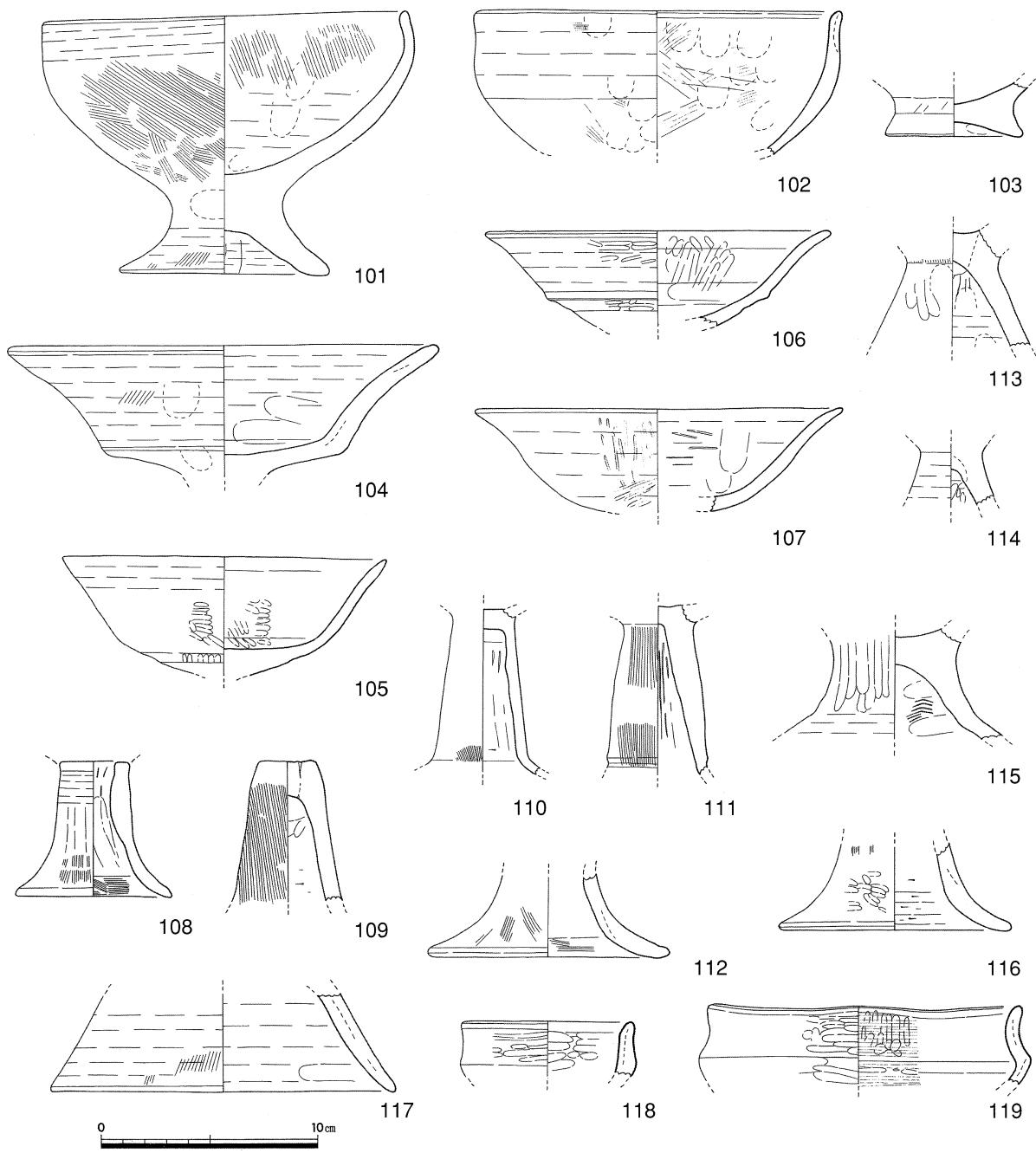
第20図 出土遺物実測図



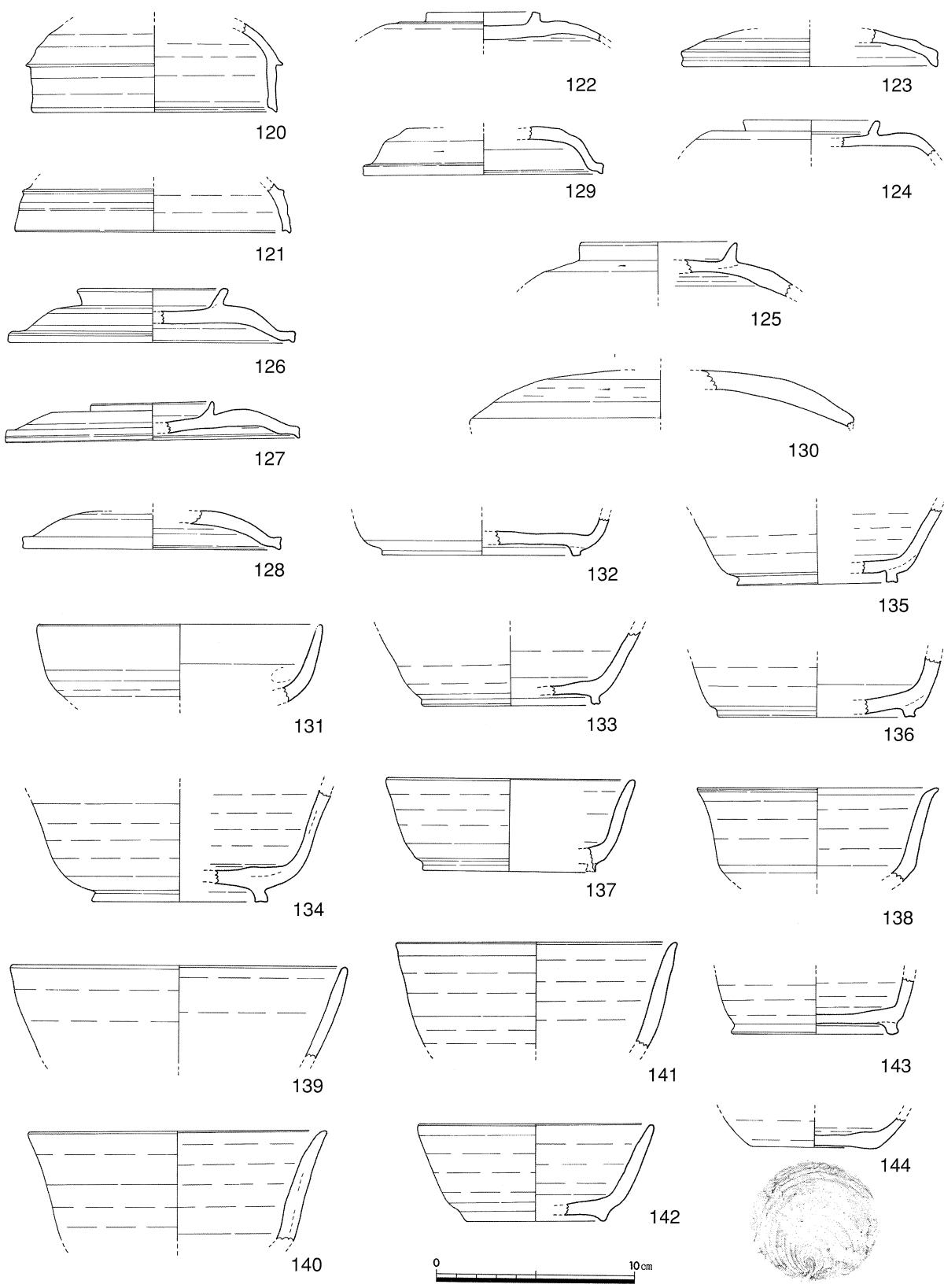
第21図 出土遺物実測図



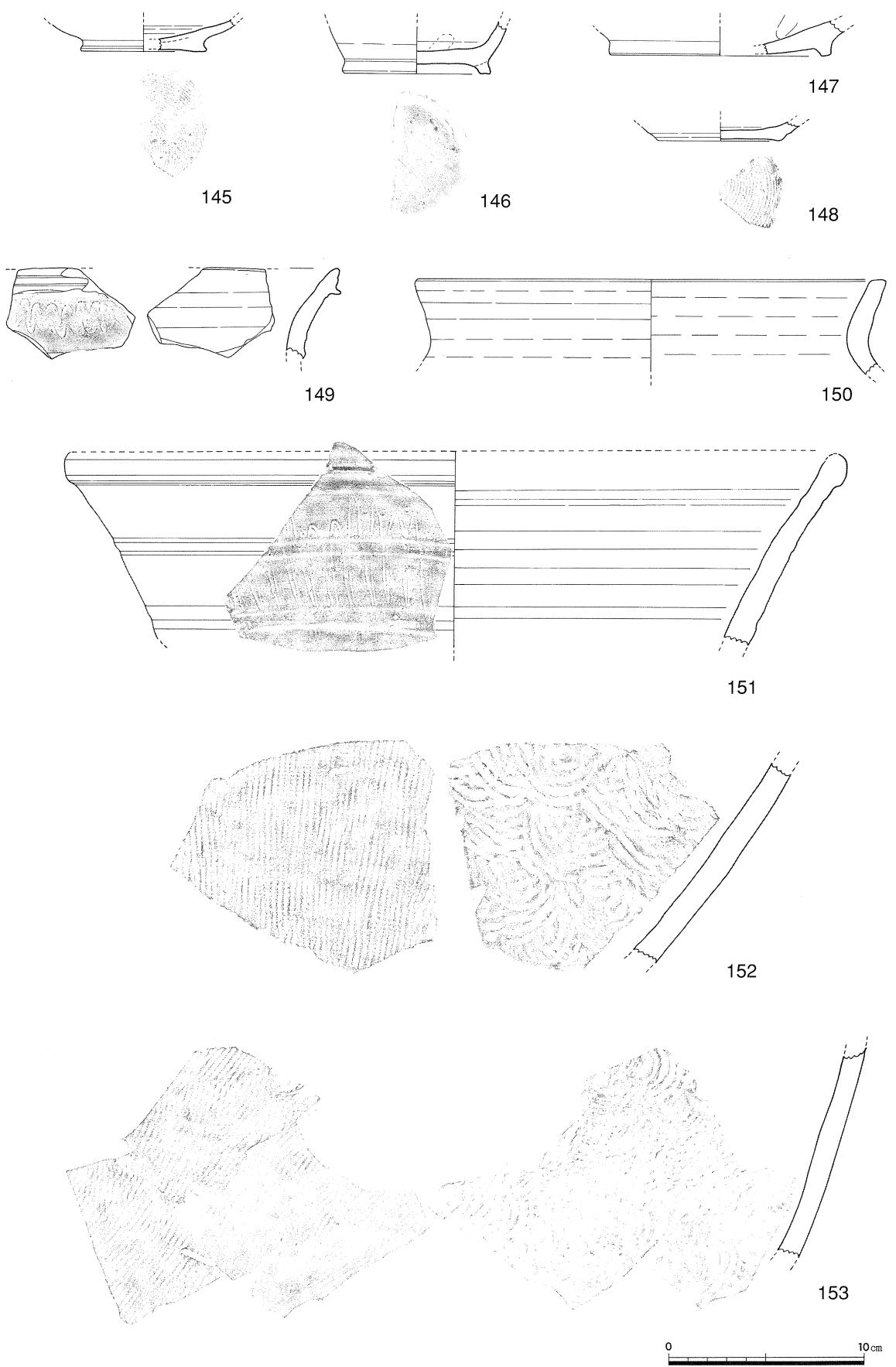
第22図 出土遺物実測図



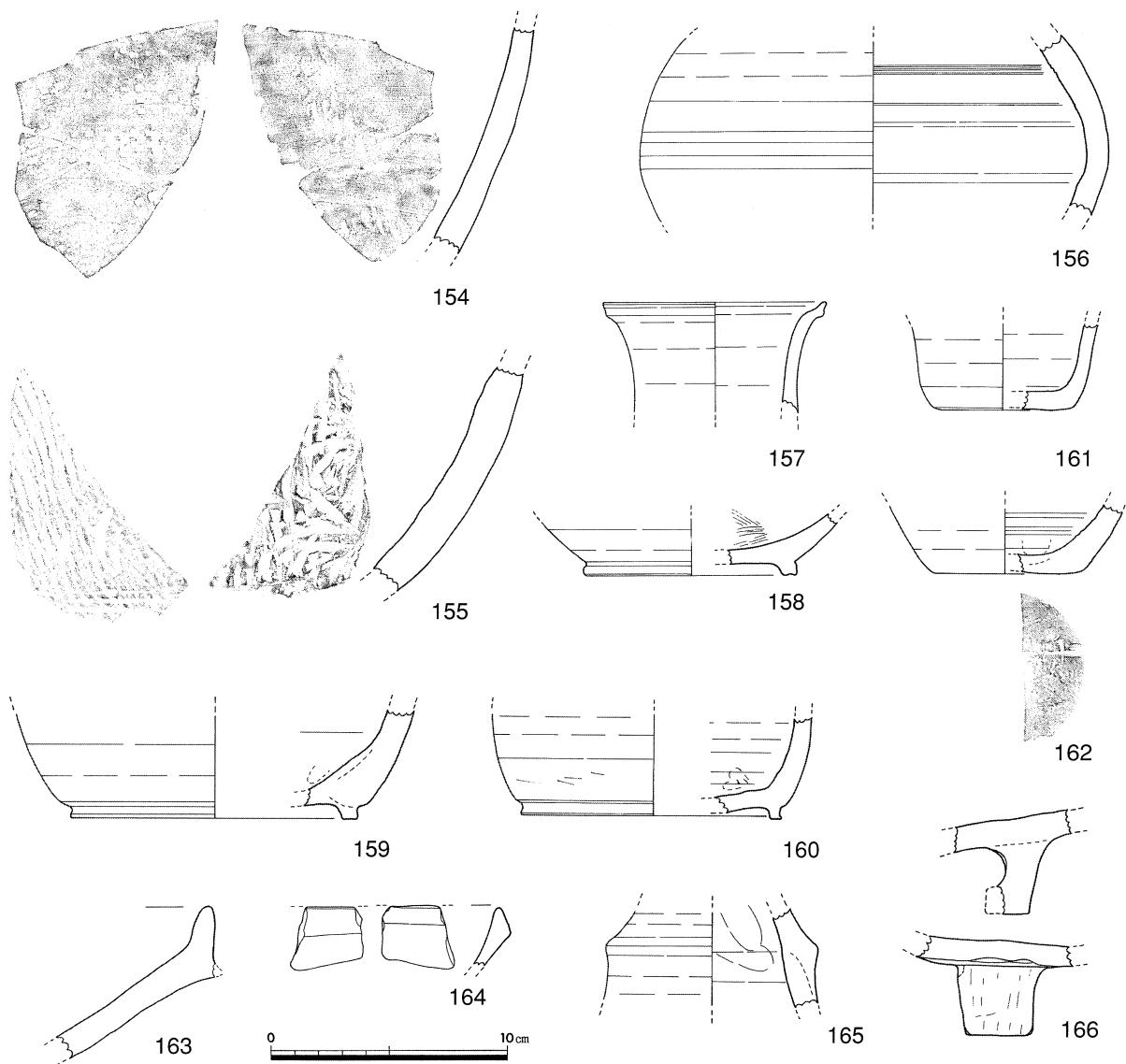
第23図 出土遺物実測図



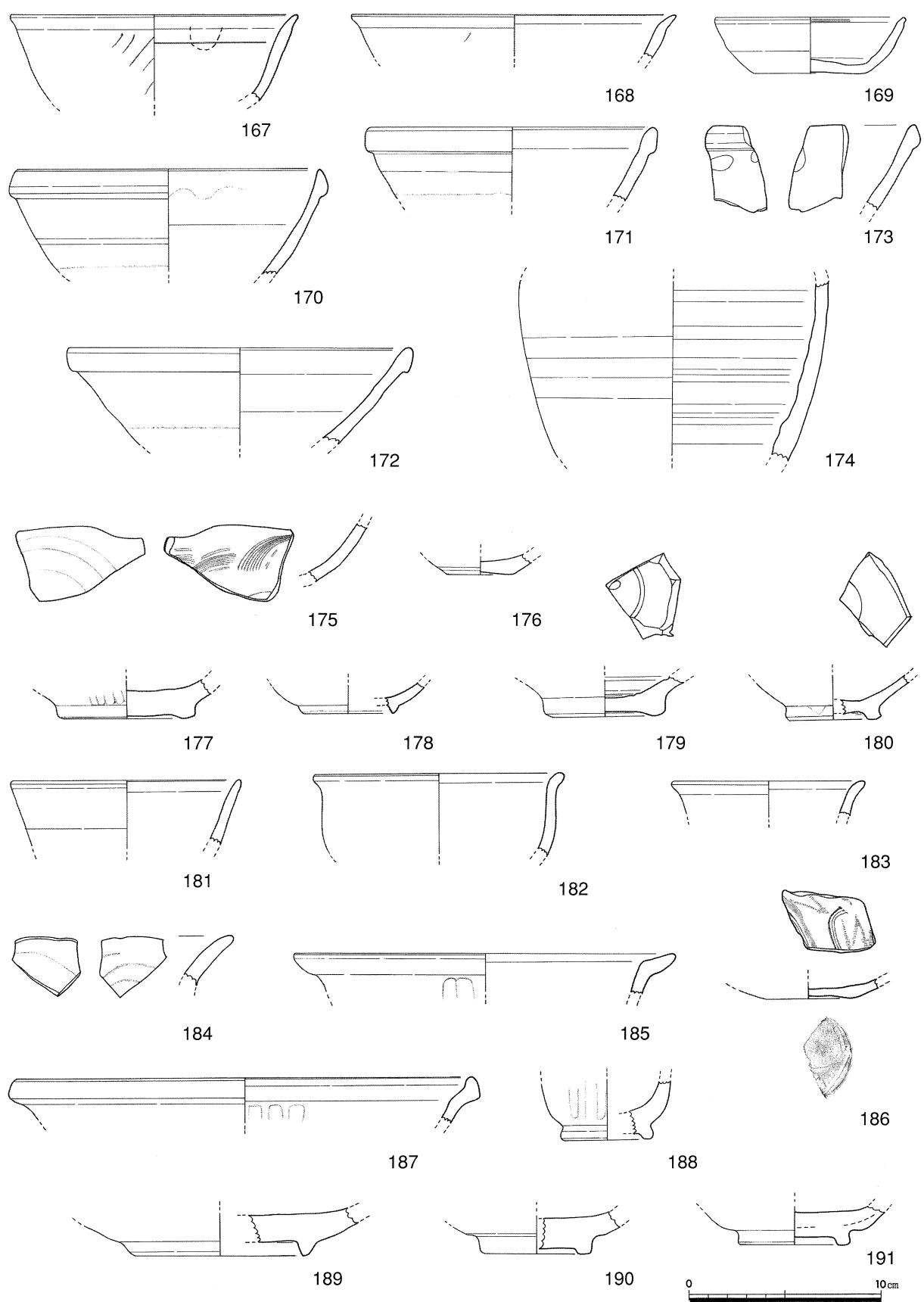
第24図 出土遺物実測図



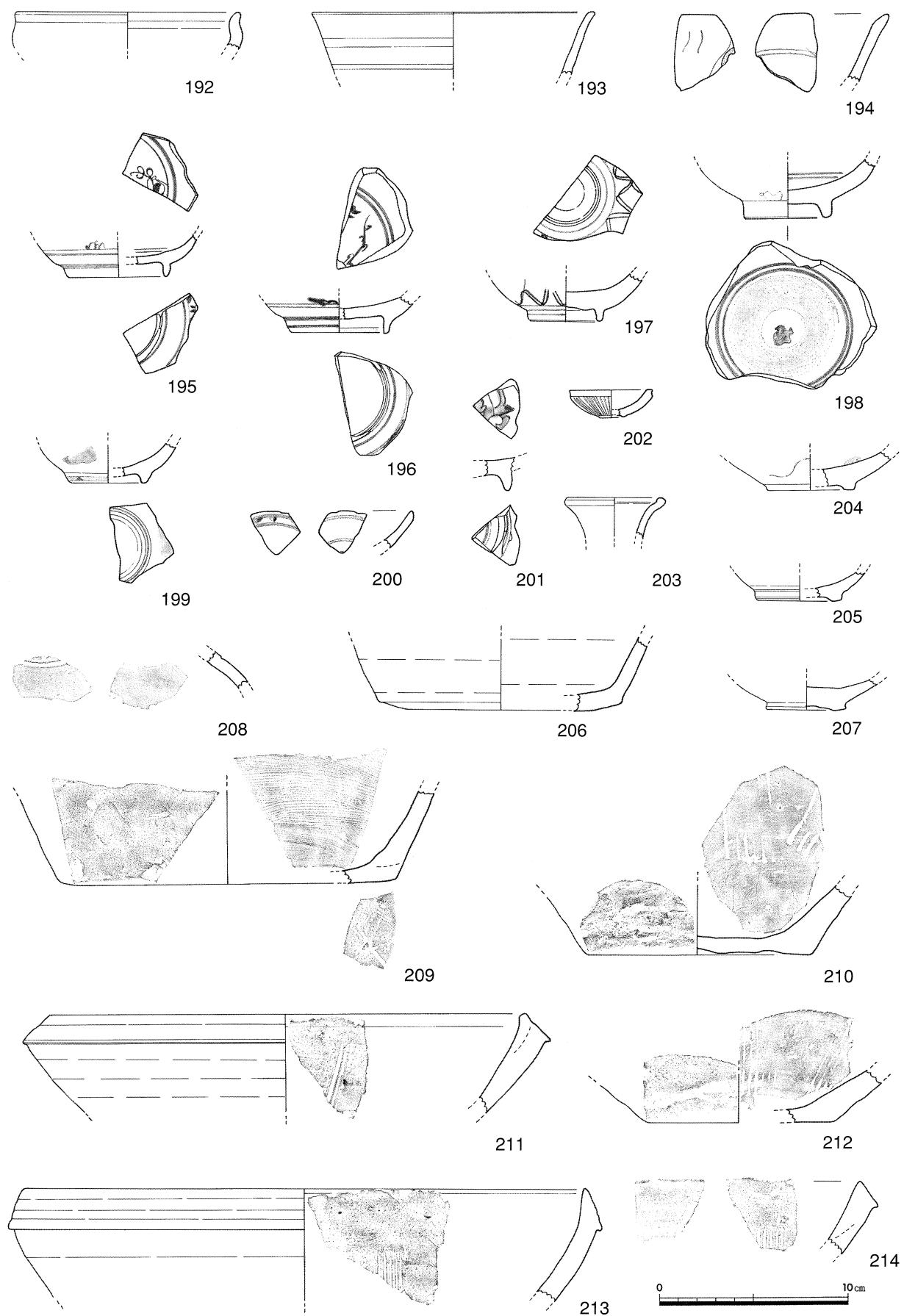
第25図 出土遺物実測図



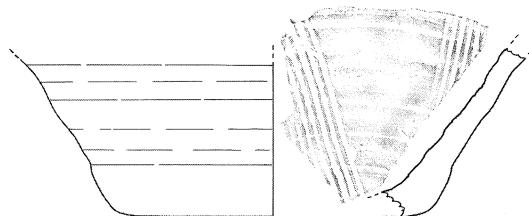
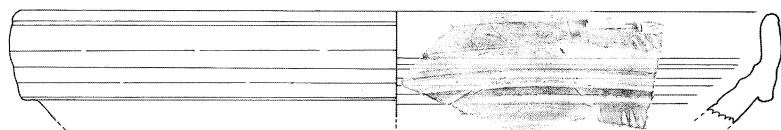
第26図 出土遺物実測図



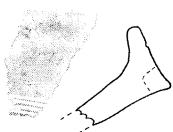
第27図 出土遺物実測図



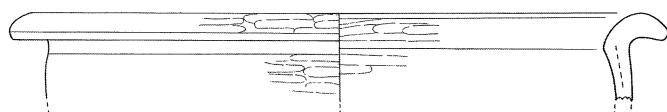
第28図 出土遺物実測図



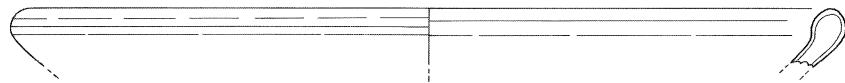
215



216



217

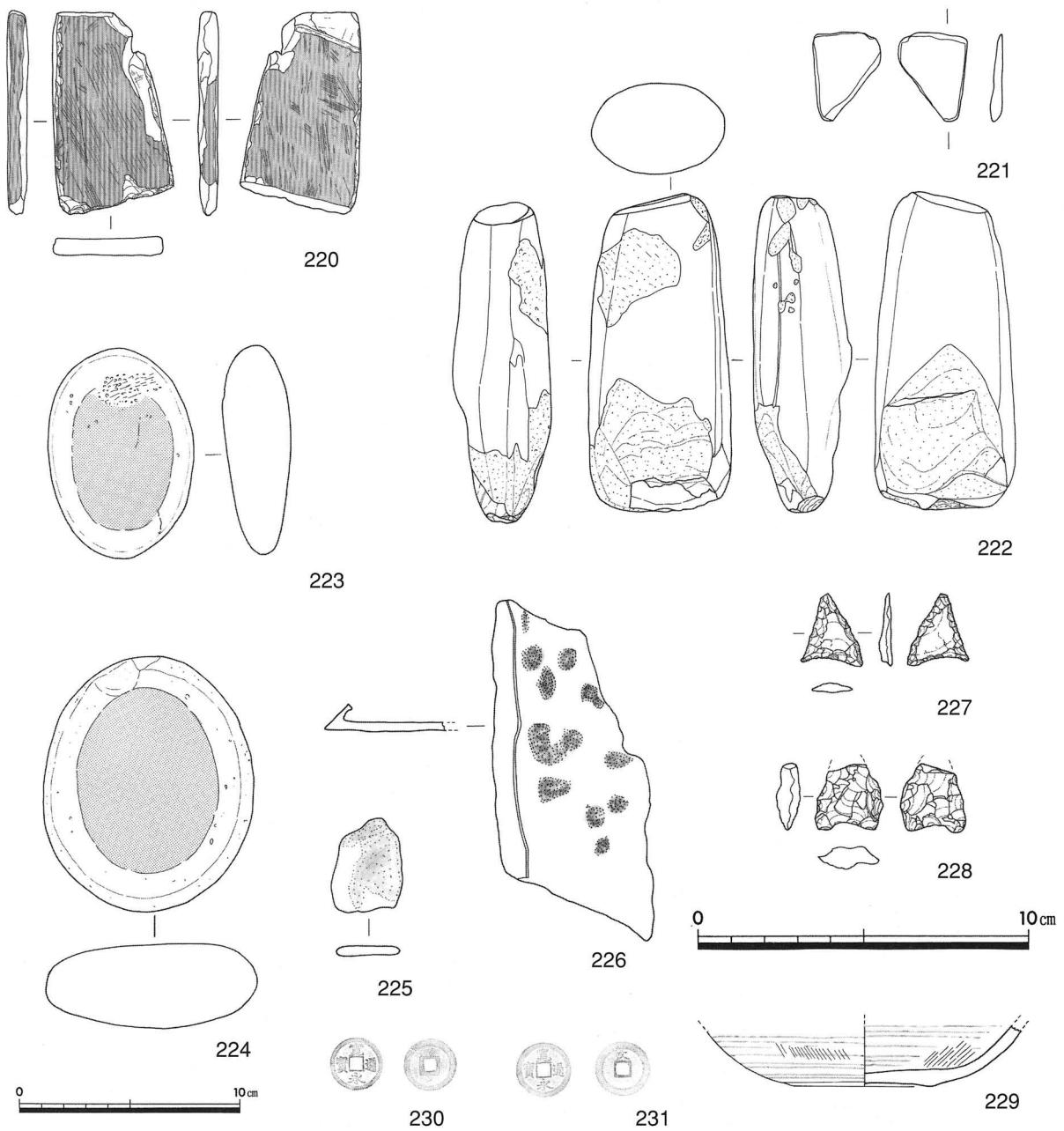


218



219

第29図 出土遺物実測図



第30図 出土遺物実測図

VII. 総 括

神代屋遺跡の調査は弥栄村としては初めての考古学的調査である。それだけに十分な対応ができたかについては内心忸怩たるものがある。しかし、島根県教育委員会文化財課を初めとして関係者の指導と援助によって所期の目的は達成できたものと考える。

本遺跡は長安川北岸に位置する大型の集落遺跡であり、長安本郷地域はもとより周辺地域の中心的集落として生成・発展してきたことが明らかになった。その初源は、出土した弥生前期の土器より、およそ、紀元前3世紀前後が考えられ、以後、盛衰期を挟みながらも古墳時代・奈良時代・平安時代・鎌倉時代・室町時代・江戸時代と継続的に集落が営まれてきたと判断される。

弥生時代に関しては、とりわけ前期に集落としての繁栄振りが推定された。このことは当該期の土器が調査区の全域からかなりの量で出土したことから想定される。ここで本遺跡は長安川流域の中心的な集落としての位置が築かれたと思われる。

次には弥生時代末期から古墳時代前半期に繁栄期のあったことが考えられた。この時期の土器は4区と7区において集中的に発見された他全体的に出土量が多く、集落遺跡としての相対的な繁栄期があつたことをうかがい知ることができた。冒頭に示したように、古墳時代前期には奥の原古墳（方墳）群を初めとして栃木・坂本古墳群等が存在したと見られ、4世紀から5世紀頃に中山間地の小盆地にも近畿中央政権と支配関係を結んだ豪族層が誕生していたことが想定された。神代屋遺跡はその位置や弥生時代以来の展開状況とも併せ考えると、これら長安地域と周辺地域を支配した豪族のお膝元の集落として政治的地位を確保していたものと考えられる。

古墳時代中・後期の後の繁栄期と目されたのは奈良時代である。1区から5区にかけて検出された多数のピットは一部建物として復元されたが、残余のピット群も同類の建物跡に相異なく、この一帯に掘

立柱建物が集中的に建て続けられたことを想定しうる。のことと相即的な関係をもつ事実として奈良時代の須恵器が大量に出土したことを上げなければならない。残念ながら墨書き土器やへら書き文字をもつ土器を検出することはできなかつたが、たとえば三足盤土器（第26図166）のような役所的遺跡から出土するものも見られ、弥生・古墳時代に統いて奈良時代から平安時代にも地域の核となる集落として繁栄したことを確認しておく必要がある。明確な遺構として検出された特異な構造のSI01は奈良時代前半期頃の住居跡であり、このような建物が近辺に少なからず存在したことを予測しておきたい。

古代末から中世期に關していくれば中国・朝鮮からの輸入陶磁器片が相当数出土したことが特筆されよう。総数は100点近くに及び、神代屋遺跡が当該期中山間地の遺跡中でも看過できない存在になったといえよう。これら焼物は、おそらく周辺の強大な在地勢力であった益田氏や三隅氏等との政治的交通関係を通じて招来されたものとみられ、その受け入れ主体が長安本郷地域を拠点とした土豪永安氏であった蓋然性は高いと思われる。そして、その本拠地もまたこの神代屋遺跡の一角に置かれたことを推定することも許されるのではないだろうか。

今回の調査は中山間地における耕地の改造工事に伴なうものであって、その範囲が限られ、また、調査地そのものも長年に亘る地形変化により包含層・遺構等が本来的な状態で保全されていなかった。そのため出土品の量・質の豊かさに較べると集落遺跡としての本体を把握することがきわめ不十分に終わらざるをえなかつたのはまことに残念という他はない。

しかし、長安本郷地域において長期にわたる大型集落変遷の一端を描き出すことができたことは今後の地域史を構想する上でその貢献度は高いのではないかと想像する。このことをもって今次調査の第一の意義とし、報告のまとめとしたい。

土器・陶器・陶磁器観察表

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
1	4 区	甕 (弥生)	19.0			如意状口縁 (外)ヨコナデのち指圧痕、3条の平行沈線、ハケ (内)ハケのちナデ、浅い溝	外:黒褐 内:にぶい 黄橙	~3mm 程度の砂粒 を含む	普	
2	1 区	〃 (〃)	18.8			如意状口縁 (外)ヨコナデ、指圧痕、5条の平行沈線、タテハケ (内)ハケ、ナデ、細ハケ	にぶい黄橙	~3mm 〃	〃	風化氣味
3	7 区	〃 (〃)	17.4			如意状口縁 (外)ヨコナデ、指圧痕、6条の平行沈線 (内)ヨコナデ	〃	~2mm 〃	良好	スス付着
4	1 区 2 区	〃 (〃)	19.0			如意状口縁 (外)ヨコナデ、6条の平行沈線 (内)ヨコナデ	〃	~3mm 〃	〃	風化氣味
5	4 区	〃 (〃)				如意状口縁 (外)ナデ、2条の平行沈線 (内)ナデ、ケズリ	灰白	~2mm 〃	普	風化氣味
6	7 区	〃 (〃)				如意状口縁、端部は平坦 (外)ハケ、3条以上の平行沈線、指圧痕 (内)ハケ、ナデ	にぶい黄橙	~2mm 〃	良好	スス付着
7	3-1 区	〃 (〃)				端部は平坦 (外)ヨコナデ (内)ヨコナデ	黄白	~3mm 〃	不良	風化氣味
8	3 区	壺 (〃)				端部は平坦 (外)無軸の羽状文、ハケ、ナデ、指圧痕 (内)ヨコナデ、指圧痕	淡黄白	~2mm 〃	良好	
9	6-2 区 7区 SD	〃 (〃)				端部に突帯、ラッパ (外)ハケ、ナデ、刻目の刺突文 (内)ミガキ、指ナデ	にぶい褐	~3mm 〃 金雲母含	〃	
10	1 区	〃 (〃)	17.0			端部斜面は平坦、上下に凹線 (外)ミガキ、ナデ (内)ミガキ、指ナデ	にぶい黄橙	~4×3mm 〃 金雲母含	〃	
11	7-3 区	甕 (〃)				(外)6条以上の沈線	〃	~3mm 〃 金雲母含	不良	風化氣味 スス付着
12	4-2 区 S K	〃 (〃)				(外)ハケ、ナデ、5条の平行沈線 (内)ケズリ	浅黄橙	~3mm 〃	良好	
13	7 区	〃 (〃)				(外)1条以上の沈線、ハケ、ナデ (内)ケズリ	黄褐	~4mm 〃 金雲母含	〃	スス付着
14	7 区	壺 (〃)				(外)ハケ、8条以上の平行沈線 (内)ケズリ	にぶい黄橙	~3mm 〃	不良	スス付着
15	1 区	〃 (〃)				(外)ハケ、2条以上の平行沈線、ナデ (内)ナデ	淡黄白	~3mm 〃	良好	
16	4-1 区 土器群	〃 (〃)				(外)6条と3条の平行沈線、複線山形文	にぶい黄橙	~3mm 〃	不良	風化氣味
17	4 区	〃 (〃)				(外)ヘラ描き7条の平行沈線、円形竹管文 (内)ナデ、指圧痕	明黄褐	~3mm 〃 金雲母含	良好	
18	2 区	甕 (〃)				(外)4条以上の平行沈線 (内)ナデ	浅黄橙	~2mm 〃 金雲母含	良好	スス付着
19	3-1区	甕底部 (〃)		8.6		平底 (外)ハケ、指ナデ (内)ナデ、指圧痕	明黄褐	~2mm 〃	〃	スス付着 (内)コゲ跡
20	T7-22	〃 (〃)		7.2		上底状 (外)ハケ、ナデ、指圧痕 (内)ナデ、指圧痕	にぶい黄橙	~2mm 〃 金雲母含	〃	
21	3 区	〃 (〃)		11.6		平底 (外)ハケ (内)ナデ、指圧痕	浅黄橙	~3mm 〃	不良	風化氣味
22	7 区	〃 (〃)		11.0		上底 (外)ハケ、指ナデ (内)ナデ	外:灰黄 内:にぶい 黄橙	~3mm 〃	良好	スス付着
23	4-3 区	壺底部 (〃)		8.0		平底 (外)ハケ、ナデ、指圧痕 (内)ハケ、ナデ、指圧痕	黄橙	~3mm 〃 金雲母含	〃	

捕団番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
24	3-1 区	甕底部(弥生)		8.0		平底 (外)ハケ (内)ナデ、指ナデ	黄白	~2mm 程度の砂粒を含む	良好	風化氣味
25	3 区	壺底部(〃)		12.0		平底 (外)ナデ、ミガキ (内)ナデ(?)	にぶい黄橙	~4×5mm 〃 金雲母含	不良	風化氣味
26	4 区	〃(〃)		11.0		平底 (外)ナデ、指圧痕 (内)ナデ、指圧痕	浅黄橙	~3mm 〃 金雲母	〃	風化氣味
27	4 区	〃(〃)		16.0		平底 (外)ハケ、ナデ	〃	~2mm 〃	良好	風化氣味
28	2 区	〃(〃)				風化 (内)ナデ、指ナデ	外:明黄褐 内:灰黄褐	~3mm 〃	普	外:風化
29		壺底部(〃)		7.2		平底 (外)ナデ、指圧痕 (内)ナデ、指圧痕	にぶい黄橙	~3mm 〃	良好	
30	6-2 区 7 区 S D I	〃(〃)		8.0		厚手、上底 (外)ナデ、指圧痕 (内)ナデ、指圧痕	にぶい灰黄 金雲母含	~3mm 〃	〃	
31	4-1 区 ベルト	〃(〃)		5.4		平底 (外)ナデ (内)ナデ、指圧痕	にぶい橙	~3mm 〃	不良	
32	T3-39	甕底部(〃)				(外)ハケ、ナデ	にぶい黄橙	~3mm 〃	〃	内:コゲ跡
33	2 区	〃(〃)		6.0		平底 (外)ナデ (内)ナデ、指圧痕	灰白	~2mm 〃 金雲母含	普	風化氣味
34	1 区	〃(〃)		5.8		やや上底氣味 (外)ナデ、指圧痕 (内)ケズリ、指圧痕	外:明黄褐 内:灰黄褐	~2mm 〃	〃	風化氣味
35	7 区	〃(〃)		6.6		平底 (外)ナデ、指圧痕 (内)ナデ、指圧痕	浅黄橙	~4mm 〃	良好	
36	4-2 区 D 7	甕(〃)	18.6			(外)2条の凹線、ヨコナデ、ミガキ (タテ、ナナメ) (内)ヨコナデ、指圧痕、ケズリ	にぶい黄橙	~3mm 〃	不良	スス付着
37	1 区	〃(〃)	22.0			(外)巾狭・4条の凹線、ナデ (内)ナデ、ケズリ	〃	~3mm 〃 金雲母含	普	風化氣味
38	6-2 区 7 区 S D 1	〃(〃)	21.8			(外)3条の凹線、ヨコナデ、刺突文(クシ状工具) (内)ハケ、ナデ、ケズリ	褐灰	~2mm 〃 金雲母含	良好	スス付着
39	4-1 区 土器群	〃(〃)	15.0			(外)4条の凹線、ナデ、連続刺突文 (工具) (内)ヨコナデ、ケズリ	灰白	~2mm 〃	普	風化氣味
40	1・2 区	〃(〃)	21.0			(外)ヨコナデ、浅く薄い沈線状の2条線、連続刺突文 (内)ヨコナデ、ケズリ	にぶい黄橙	~2mm 〃	〃	スス付着
41	6-2 区 7 区 S D 1	〃(〃)	21.2			(外)2条の凹線、ナデ、刺突文、連続刺突文(クシ状工具)、ハケ (内)ハケ、ナデ、ケズリ	〃	~3mm 〃	良好	〃
42	T3-43	〃(〃)	16.8			(外)3条の凹線、ナデ (内)ヨコナデ、指圧痕	〃	~2mm 〃 金雲母含	〃	〃
43	7 区	〃(〃)	15.6			(外)4条の平行沈線、ヨコナデ、連続刺突文(クシ状工具)、ハケ、ナデ (内)ヨコナデ、ケズリ	黄褐	~2mm 〃 金雲母含	不良	〃
44	〃	〃(〃)	19.2			端部は平坦 (外)ヨコナデ、從凹線状の連続刺突文 ハケ、ナデ (内)ヨコナデ、ケズリ	にぶい橙	~2mm 〃	良好	〃
45	4-1 区 土器群	〃(〃)	16.0			(外)ハケ、3条の凹線 (内)ヨコナデ、ケズリ	〃	~2mm 〃	不良	風化氣味
46	6-2 区 7 区 S D 1	〃(〃)	17.0			上胴部はナデ肩 (外)2条の凹線、列状の連続刺突文 (ヘラ状工具) (内)ヨコナデ、ケズリ	にぶい黄褐	~3mm 〃 金雲母含	良好	スス付着
47	6-2 区	〃(〃)	16.2			(外)4条の凹線、連続刺突文(ハケ目原体) (内)ヨコナデ、指ナデ、ケズリ	にぶい黄橙	~2mm 〃 金雲母含	〃	
48	7 区	〃(〃)	16.0			(外)3条の凹線、2条の沈線、連続刺突文(ヘラ状工具) (内)ヨコナデ、指圧痕、ケズリ	〃	~3mm 〃 金雲母含	〃	

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
49	2区	甕(弥生)				(外)4条の凹線、連続刻目の刺突文 (内)ナデ、指圧痕、ケズリ	灰白	~3mm 程度の砂粒を含む 金雲母含	良好	
50	T3-54	〃(〃)	14.0			(外)2条の凹線、連続刺突文(クシ状工具)、ナデ (内)ナデ、ケズリ	浅黄橙	~3mm 〃 〃	普	風化気味
51	6-2区 7区 S D 1	〃(〃)				(外)沈線(多条、クシ状工具)、連続刺突文(クシ状工具) (内)ヨコナデ、指圧痕、ケズリ	明黄褐	~2mm 〃 〃	良好	
52	4-1区	〃(〃)	17.0			複合口縁? (外)ヨコナデ、多条の平行沈線 (内)ヨコナデ、ケズリ、ハケ	灰黄	~2mm 〃 〃	〃	(外)スス付着 (内)コゲ跡
53	4-1区 土器群	〃(〃)	15.0			複合口縁 (外)ヨコナデ(強)、ハケ(クシ状工具) ハケ、ナデ (内)ヨコナデ(強)、指ナデ、ケズリ 指圧痕	にぶい黄橙	~2mm 〃	〃	スス付着
54	T3-45	〃(弥生～土師)	16.6			複合口縁 (外)ヨコナデ、2条の平行沈線、ナデ (内)ヨコナデ	〃	~2mm 〃 金雲母含	〃	
55	7区 S D 1	〃(〃)	25.4			複合口縁 (外)ヨコナデ、ハケ (内)ヨコナデ、ケズリ、指圧痕	にぶい橙	~2.5mm 〃	〃	
56	4-1区 土器群	〃(弥生～土師)	17.0			単純口縁 (外)ヨコナデ、連続刺突 (内)ヨコナデ、ケズリ、ナデ	浅黄橙	~6×2mm 〃	不良	スス付着
57	7区 土器群	〃(〃)	13.0			単純口縁 (外)ヨコナデ、1条の細い溝 (内)ヨコナデ、ケズリ、指圧痕	にぶい黄橙	~2mm 〃	良好	〃
58	7区 S D 1	〃(〃)	16.0			単純口縁 (外)ヨコナデ (内)ヨコナデ、ケズリ、指圧痕	にぶい橙	~3mm 〃 金雲母含	〃	赤色顔料塗付 スス付着
59	7区	〃(〃)	16.0			単純口縁 (外)ハケ、ヨコナデ (内)ヨコナデ、指ナデ、ケズリ	にぶい黄橙	~1mm 〃 金雲母含	〃	
60	7区 S D 1	〃(〃)	15.0			単純口縁、端部は平坦 (外)ヨコナデ、ハケ、ナデ (内)ヨコナデ、ケズリ、指圧痕	にぶい橙	~2mm 〃	良好	
61	7区 土器群	〃(〃)	13.8			単純口縁、体部は扁平 (外)ヨコナデ、ナデ(強)、ハケ (内)ヨコナデ、指ナデ、ハケ、ケズリ	にぶい黄橙	~2mm 〃 金雲母含	〃	スス付着
62	7区 土器群	甕(〃)	15.6			単純口縁 (外)ヨコナデ (内)ヨコナデ、ケズリ、指圧痕	〃	~1mm 〃	〃	〃
63	YKYM T3-A	〃(〃)	14.0			単純口縁、端部は平坦 (外)ヨコナデ、ハケ、ナデ (内)ヨコナデ、ケズリ、指圧痕	〃	~2mm 〃 金雲母含	〃	
64	7区 土器群	埴(〃)	12.0			単純口縁 (外)ヨコナデ、指圧痕 (内)ヨコナデ、ケズリ、指圧痕、ハケ	にぶい黄褐	~1mm 〃	〃	
65	4-1区 土器群	甕(土師)	11.0			単純口縁 (外)ヨコナデ、指圧痕 (内)ナデ(クシ状工具)、ヨコナデ ナデ、ミガキ	明黄褐	~1mm 〃	〃	
66	4-1区 土器群	〃(〃)	12.0			単純口縁 (外)ハケ、ヨコナデ (内)ヨコナデ、ケズリ	黄橙	~1mm 〃	〃	スス付着
67	7区	〃(〃)	12.0			単純口縁 (外)ヨコナデ、指圧痕 (内)ヨコナデ、ケズリ	にぶい黄橙	~3mm 〃	〃	
68	4-2区 S K	〃(〃)	16.0			単純口縁 (外)ヨコナデ (内)ヨコナデ、ケズリのち指ナデ	〃	~3mm 〃 金雲母含	〃	スス付着
69	7区 土器群	〃(〃)	15.2			単純口縁、倒卵形 (外)ヨコナデ、ハケ、ナデ、列状文 (内)ナデ、ケズリ	〃	~3mm 〃	〃	
70	7区	壺(弥生)	19.0			(外)3条の凹線、ハケ、ナデ、連続刺突文(クシ状工具) (内)ヨコナデ、ナデ(ヘラ状工具)、ハケ、ケズリ	〃	~3mm 〃	〃	

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
71	7区	甕(弥生)				単純口縁 (外)ヨコナデ、ハケ、タテナデ、指ナデ (内)ヨコナデ、ケズリ、指圧痕、指ナデ	明黄褐	~3mm程度の砂粒を含む	良好	
72	T5-5	壺(々)	16.0			口状漏状 (外)4条の平行沈線、ハケ、ナデ (内)ハケ、ナデ、指圧痕、ケズリ	浅黄橙	~3mm 〃 金雲母含	〃	風化氣味
73	T3-61	(々)	16.0			ラッパ状 (外)5条の凹線、連続状刺突文(四の中)、ヨコナデ (内)ハケ、ヨコナデ、指圧痕	明黄褐	~3mm 〃 〃	〃	
74	7区 土器群	(土師)	19.0			複合口縁 (外)ヨコナデ、有軸をはさんで 羽状文(板状工具) (内)ナデ、指圧痕	にぶい褐	~3mm 〃 〃	〃	
75	T3-65	大型壺(々)				複合口縁状 (外)ヨコナデ、ミガキ、タテ方向ミガキ (入念な暗文状) (内)ヨコナデ、ミガキ	赤褐	~1mm 〃 〃	〃	赤色顔料塗付 特殊土器
76	7区 土器群	小型壺(々)	12.0			単純口縁 (外)ヨコナデ、ハケ、ナデ (内)ハケ、ナデ、指圧痕、ミガキ、ケズリ	にぶい黄褐	~2mm 〃	〃	スス付着
77	T3-64 6-2区、7区 S D 1	小型壺(々)	10.7			単純口縁 (外)ハケ、ナデ(強)、ヨコナデ、ハケ (内)ナデ(強)、指ナデ	〃	~1mm 〃	〃	
78	6-2区 7区 S D 1	小型壺(々)	11.2			単純口縁 (外)ヨコナデ、ナデ、指圧痕 (内)ヨコナデ、ケズリ	明黄褐	~2mm 〃	〃	
79	7区 土器群	小型壺(々)				偏球形 (外)ナデ、指圧痕、ハケ (内)ケズリ(強)	にぶい黄橙	~2mm 〃 金雲母含	〃	赤色顔料塗布 スス付着
80	T3-67 6-2区、7区 S D 1	小型壺(々)				いびつな平底 (外)ハケ、ナデ(工具) (内)ハケ、ナデ、ケズリ	にぶい橙	~1.5mm 〃	〃	スス付着
81	7区 S D 1	小型壺(々)				小型丸底(?) (外)ヨコナデ (内)ヨコナデ、ナデ、指圧痕	にぶい黄橙	~2mm 〃	不良	赤色顔料塗布
82	7区	小型壺(々)				偏球形 (外)ナデ、ナデ(工具) (内)ナデ、ケズリ	〃 橙(外一部)	~1.5mm 〃	良好	
83	7区 土器群	小型壺(々)				偏球形 (外)ハケ、ナデ	にぶい黄橙	~2mm 〃	〃	スス付着
84		壺(々)				(外)ナメハケ、ハケに交差する平行 沈線(クシ状工具・3~4条) (内)ケズリ	明黄褐	~2mm 〃	〃	〃
85	4-2区 土器群	甕(々)				薄手、棗目状に膨らむ (外)多方向の太いハケ (内)ケズリ、指圧痕	にぶい黄橙	~3mm 〃	〃	〃
86	4-1区	(々)				(外)多方向のハケ、ナデ (内)ケズリ、ナデ	灰白	~6×3mm 〃	〃	
87	T3-46	(々) (弥生)				(外)多方向の細いハケ、逆「ノ」字状 の連続刺突(ヘラ状工具)、ナデ (内)ケズリ	にぶい黄橙	~3mm 〃 金雲母含	〃	
88	7区 土器群	(々)				(外)多方向の細いハケ、ナデ (内)ケズリ	〃	~5mm 〃	〃	スス付着
89	4-1区	壺(々)				(外)多条の平行沈線 (内)ナデ、絞り目	黄橙	~3mm 〃	普	風化氣味
90		鉢(土師)	12.0			(外)ナデ (内)ナデ、指ナデ	にぶい黄橙	~2mm 〃 金雲母含	不良	赤色顔料塗布 風化氣味
91	7区 土器群	(々)	13.0			単純口縁 (外)ヨコナデ、細いハケ、ナデ (内)ハケ、ヨコナデ、ケズリ、指圧痕	浅黄	~3mm 〃	良好	スス付着
92	T7-17	甕(々)	15.2			単純口縁 (外)ヨコナデ、指圧痕、指ナデ (内)ヨコナデ、ミガキ、ケズリ	明黄褐	~1mm 〃 金雲母含	〃	〃
93	2区	(々)	17.0			単純口縁 (外)ヨコナデ (内)ナデ、指圧痕、ケズリ	にぶい黄褐	~2mm 〃	〃	風化氣味
94	7区 土器群	壺(々)				(外)ナデ (内)ナデ、指圧痕	にぶい褐	~1mm 〃	〃	

挿図 番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
95	T6-8	手づくね (土師)	5.0		2.2	丸底 (外)ナデ、指圧痕 (内)ナデ、指圧痕	浅黄橙	~2mm 程度の砂粒 を含む	良好	スス付着
96	6-2区 7区 S D 1	壺 (々)	7.4	3.0	3.1	底部は波形 (外)ナデ、指圧痕 (内)ナデ、指圧痕	々	微砂粒 金雲母含	々	
97	7区	壺 (々)				(外)ナデ (内)ナデ	灰黄	密	々	
98		甕 (々)	20.0			単純口縁 (外)ヨコナデ、ハケ、ナデ (内)ヨコナデ、ケズリ	にぶい黄橙	~3mm 々	々	スス付着
99	T3-53	鉢 (弥生)	19.6			(外)ハケ、ナデ、指圧痕 (内)ケズリ、指ナデ	明黄褐	~2mm 金雲母含	々	
100	1区	甕底部 (々)		7.0		厚手 (外)ナデ、指圧痕 (内)ナデ、指圧痕	にぶい黄橙	~3mm 々 々	々	スス付着
101	6-2区 7区 S D 1	脚付鉢 (弥生)	16.8	9.7	12.4	(外)ヨコナデ、ハケ、ナデ、指圧痕 (内)ハケ、ナデ、指圧痕	々	~3mm 々 々	々	脚部一赤色顔料塗布 スス付着
102	6-2区 7区 S D 1	鉢 (々)	17.0			(外)ナデ、指圧痕 (内)ナデ、指圧痕	浅黄橙	~3mm 々	々	
103	6-2区 7区 S D 1	脚? (々)		6.4		(外)ナデ (内)指圧痕	明黄橙	~3mm 々	普	風化氣味
104	6-2区 NO.1	高杯部 (々)	20.0			(外)ハケ、ヨコナデ(強)、指圧痕 (内)ナデ、指ナデ	にぶい黄褐	~1mm 々	良好	スス付着 風化氣味
105	7区 土器群	々 (々)	15.0			(外)ナデ、ミガキ (内)ナデ、ミガキ	にぶい黄橙	~3mm 々	々	風化氣味
106	7区 土器群	々 (々)	16.0			充填円盤法、複合状の段 (外)ミガキ、ナデ (内)ミガキ、ナデ、指ナデ	赤褐	~3mm 々 金雲母含	々	赤色顔料塗布 スス付着
107	7区 土器群	々 (々)	17.0			(外)ミガキ、ヨコナデ (内)ミガキ、ヨコナデ、指ナデ	々	~3mm 々	々	赤色顔料塗布
108	7区	高杯脚部 (々)		7.2		充填円盤法 (外)タテナデ、ヨコナデ、細いハケ (内)絞り目、指ナデ、細いハケ	淡黄	砂粒含まず 良選の胎土	々	
109	7区 土器群	々 (々)				(外)ハケ (内)ケズリ	にぶい黄橙	~2mm 々	々	
110	7区 S D 1	々 (々)				(外)ハケ、ナデケシ (内)ケズリ、ナデ、絞り目	外:にぶい橙 内:橙	~2mm 々	々	
111	7区	々 (々)				(外)タテハケ (内)絞り目	外:々 内:々	~2.5 々	々	
112	7区	々 (々)		11.2		(外)ハケ、ナデ (内)ハケ(裾部)	にぶい橙	~3mm 々	々	
113	T3-63	々 (々)				真填円盤法 (外)ハケ、ナデ、ミガキ、指圧痕 (内)絞り目、ヨコナデ、指圧痕	明黄褐	~1mm 々	々	風化氣味
114	7区	々 (々)				(外)ナデ (内)ナデ	々	~1mm 々	々	
115		々 (々)				(外)ミガキ、ナデ、指圧痕 (内)ハケ、ナデ、指圧痕	にぶい黄橙	~2mm 々	々	
116	7区 土器群	々 (々)		10.8		(外)ハケ、ナデ、ミガキ (内)ケズリ	々	~3mm 々 金雲母含	々	
117	6-2区 7区 S D 1	鼓形器台 (土師)		16.0		(外)ハケ、ナデ (内)ヨコナデ、指ナデ	明黄褐	微砂粒	々	
118	6区 土器群	小型壺 (々)	8.0			体部中段に段状のふぐらみ (外)ミガキ (内)ミガキ	暗灰	密	々	
119	6区	浅鉢 (々)	11.6			波状口縁(浅い) (外)ミガキ (内)ミガキ、ヨコナデ(強)	胎:にぶい 褐色:黒褐	々	々	顔料塗布

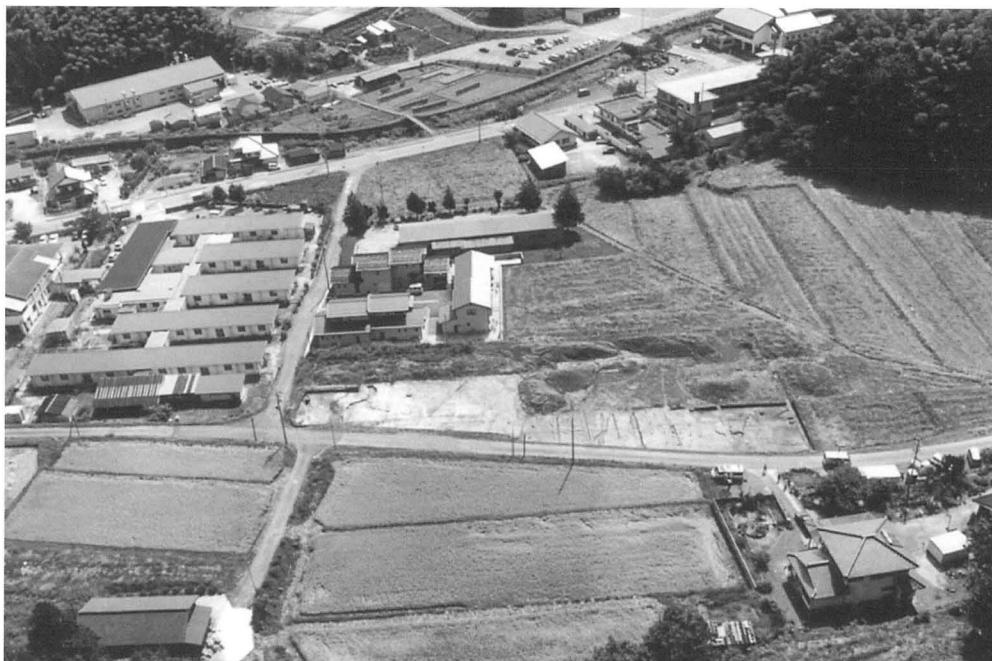
挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
120	T3-53	環の蓋(須恵器)	12.4			深身の蓋、端部:凹線 天井部と体部の境の突出はひさし状	暗青灰	~2mm 程度の砂粒を含む	良好	
121	2区	（）				天井部と体部の境の突出はひさし状 端部は深いくぼみ	灰	密	（）	
122	1区	（） （） （つまみ縁） 5.4				輪状つまみ(貼り付け?) つまみ端頂部に浅いくぼみ	（）	~2mm （）	（）	肩部:自然釉
123	4区	（） （）	13.0			端部は鳥嘴状、外側に凹線状のくぼみ	（）	~3mm （）	（）	重ね焼跡
124	4-1区	（） （） 6.9				輪状つまみ(つまみ出し) つまみ部と天井部の境に浅い溝	（）	~1mm （）	（）	
125	4区	（） （）	8.0			輪状つまみ(つまみ出し)	にぶい黄澄	~3mm （）	（）	
126	T7-2区	（） （） 7.6	14.4 （） 3.8			輪状つまみ	灰	密	（）	
127	T7-2区	（） （） 6.2				輪状つまみ、削り出し 端部は鳥嘴状	（）	微砂粒	（）	
128	7区	（） （）	13.0			端部は鳥嘴状	（）	~3mm （）	（）	
129	3区	（） （）	12.0			深みのある蓋 端部は鳥嘴状	（）	~7×5mm （）	（）	
130	1区	（） （）				内:ハケ	外:灰 内:褐灰	~0.5mm （）	（）	
131	2区(38)	環 （）	14.4			回転ナデ	外:褐灰 内:灰黄褐	~2mm （）	（）	
132	2区	（） （） （高台縁） 10.0				貼り付け高台 内:凹凸あり	外:褐灰 内:灰	~2mm （）	（）	
133	1区	（） （） 9.0				削り出し高台 畠付部に巾広い溝	外:灰 内:灰白	~0.5mm （）	（）	
134	T7-11	（） （） 11.0				削り出し高台、深身 高台端部に浅い溝	灰	~1mm （）	（）	
135	4区	（） （） 8.0				削り出し高台 高台端部に溝	（）	~1mm （）	（）	
136	3区	（） （） （） 10.0				高台は体下半部の形成と一体化して 貼り付ける 端部に溝	外:黄澄 内:にぶい 黄澄	~3mm （）	（）	
137	T9	（） （） 14.0				貼り付け高台	褐灰	密	（）	
138	T10-1	（） （） 12.2				回転ナデ	外:黒褐 内:灰	密	（）	外:薄い自然釉 搬入品?
139	1区	（） （） 17.0				（）	灰	~0.5mm （）	（）	
140	T5-12	（） （） 15.0				（）	（）	密	（）	
141	T9-1	（） （） 14.2				端部は強くつまみ出し	外:灰黄褐 内:にぶい 黄澄	~2mm （）	（）	
142	2区	（） （） 12.0 （） 7.0	（） 5.0			削り出し高台 高台部の断面 三角形	灰白	~6×4mm （）	やや不良	重ね焼跡
143	1区	（） （） 8.4				貼り付け高台	灰	~2mm （）	良好	
144	1区	（） （） 14.0				平底 低部は回転糸切り	灰白	~1mm （）	（）	
145	T13-5	（） （） 6.4				薄手、低部は高台状、平底、強くシボ り込み、回転糸切り	灰	~1mm （）	（）	
146	4-3区	（） （） 7.4				貼り付け高台、高台端部に溝 低部は静止糸切り、低部(内)布目ナデ	褐灰	~1mm （）	（）	
147	4区	（） （） 11.6				大型環 削り出し高台	（）	~1mm （）	（）	
148	5区	杯底部 （） 6.0				低部は平底でしづる、回転糸切り	灰	密	（）	
149	7区	甕 （） 34.8				外:2条の沈線(口縁)、ナデのち波状文	褐灰	（）	（）	内:自然釉
150	4区	（） （） 24.0				口縁端部は平坦	灰			
151	T10-10	大甕 （） 138				玉縁状の口縁端部 外:凹線をはさんでヘラ状工具による 細長い波状文	褐灰	密	（）	施釉
152	2区 138	甕 （）				外:平行タタキ目 内:同心円状のタタキ目	外:褐灰 内:灰	（）	（）	自然釉

挿図 番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
153	4区 4-1区	甕 (須恵器)				外:平行タタキ目 内:同心円状のタタキ目	褐灰	密	良好	自然釉
154	1区	々 (々)				外:格子文のタタキ目 内:同心円状のタタキ目のちナデ	暗褐灰	々	々	
155	1区	々 (々)				外:平行タタキ目、粗い縄目 内:タタキ目	灰	密	々	
156	1区 2区	壺 (々)				体部は扁球形	々	~2mm 々	々	
157	1区	長頸壺 (々)	9.4			回転ナデ	々	~0.5mm 々	々	内:薄い自然釉
158	2区	壊? (々)		9.0		高台部は削り出し、端部に溝	々	密	々	
159	4区	壺底部 (々)		12.0		高台部は貼り付け	外:黄灰 内:灰白	々	々	外:薄い自然釉
160	4-1区	々 (々)		11.2		高台部は貼り付け	灰	~2mm 々	々	
161	T9-2	小壺 (々)		6.0		底部は平底で回転糸切り	外:暗灰 内:灰	~3mm 々	々	
162	2区	々 (々)		6.6		底部は平底	灰	~2mm 々	々	
163	1区	鉢 (々)				複合口縁状	々	~1.5mm 々	々	内:磨滅して光沢あり
164	1区	こね鉢 (々)					灰白	~1mm 々	々	
165	T6-1区	高杯の 脚部?					褐灰	密	々	
166	T10-1	三足盤 (々)				大型の足付盤	灰白	~1mm 々	々	外:自然釉
167	TS-16	碗	15.0			口縁端部はつまみ出し 尖り気味 外:線刻文	灰白	緻密	良好	白磁、V類、12C
168	7区	々	17.0			上部で外に屈曲、端部は尖り気味 外:線刻文	々	密	々	白磁、V類、12C
169	3区 4-1区	皿	10.0	5.6	3.0	口縁部は口ハゲ、端部直下に浅い沈線	々	緻密	々	白磁(中国)、IV類、12C
170	6-1区	碗	16.6			口縁部は玉縁状	オリーブか かった灰白	密	々	白磁(中国)、IV類、12C
171	2区	々	14.2			口縁部は玉縁状	灰白	々	々	白磁、IV類、12C、大宰府
172	6-1区 T12-1 T19-2	鉢	18.0			口縁部は玉縁状	々	々	々	IV類 (中国)
173	1区	碗				口縁部は玉縁状	オリーブか かった灰白	々	々	白磁、大宰府、IV類
174		壺か 水注					胎:灰白 釉:にぶい 黄澄	緻密	々	白磁、袋物、11C~12C前
175	4区	碗				内:クシ状工具による曲線文様	にぶい黄澄	密	々	白磁、IV類、12C
176	1区	皿		3.4			灰白	々	々	白磁(中国)、IV類、 12C
177	1区	碗		7.0		体部に巾狭い湾刃による縦凹線文を 連続的に施す	オリーブか かった灰白	々	々	白磁、12C、大宰府 IV類
178	T3-16	皿		4.9			灰白	緻密	々	白磁、15C後~16C 端反皿
179	6-1区	碗		6.4		高台は浅い削り出し 内:1条の浅く巾広の溝	オリーブか かった灰白	密	々	白磁(中国)、IV類 12C
180	1区	々		4.8		見込み部分で外に折曲	灰白	々	々	白磁、IV類、12C
181	4区	々	12.0				オリーブか かった灰白	緻密	々	青磁龍泉窯系、I類 12~13C
182	7区	々	13.0			口縁部で外に折曲	々	々	々	青磁、13~14C後
183	T2-4	々	10.0			口縁部で外に折曲	灰オリーブ	々	々	青磁、戦国時代
184	7区	皿				口縁端部は花びら形 内:ヘラ彫り文様	々	々	々	青磁、16C、稜花、IV類
185	7区	盤	20.0			口縁部で大きく外に折曲 外:鎬蓮弁文	々	々	々	青磁、12~14C 龍泉窯系
186	7区	皿		5.2		内:ヘラ彫りによる文様 クシ状工具によるかく花文様	々	々	々	青磁、13~14C 同安窯系

挿図 番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
187	1区(54)	盤	24.0			口縁部は大きく外反、斜め上下に拡張する	オリーブ灰	々	々	青磁(中国) 14~15C
188	6区	碗		4.8		外:鎧蓮弁文	々	密	々	青磁、15C頃
189	T3-22	盤		9.0		高台は低く尖り気味	々	々	々	青磁(中国)
190	2区	碗		5.8		厚手、高台は浅い削り出し 同一個体に鎧蓮弁文あり	灰・オリーブ	々	々	青磁、13C 龍泉窯系
191	1区	々		5.8		高台付	オリーブ黄	々	々	青磁、I類、龍泉窯系
192	7区	々 (天目)	12.0			口縁部は外に屈曲	黄褐		々	中国、13~14C
193	2区	々	15.0			薄手、間入 口縁端部は外反し尖り気味	白灰	緻密	々	白磁 朝鮮
194	1区	々				口縁部は外板 外:線刻(花弁様) 内:浅い沈線風平行線文	オリーブ灰 白	密	々	白磁 V類 12C
195	7区	々 (染付)		5.2		外:高台と体部の境に1重線、2重線 文、植物文様 内:見込み部分に2重線文と植物文様	灰白 文:藍	緻密	々	中国
196	1区	々 (々)		4.2		高台部は高い 外:2重線文様と文様 内:見込み部分に2重線文、花文様	胎:灰白 釉:青味透明 文:藍	々	々	中国、16C
197	1区	々 (々)		3.8		外:2重線文、1条線文、網目文様	白灰 文:藍	々	々	肥前系 伊万里系、江戸時代
198	6-1区	々		4.0		内:見込み部分に太い2重線文、砂目跡	灰白 文:藍	々	々	肥前系、伊万里焼 18C
199	3区	(染付)		4.0		外:1重線の太い文様、文様	灰白	緻密	々	中国、16C
200	T13-5	皿 (染付)				口縁端部は尖り気味 外:2条の線文様、文様 内:2条の線文様	灰白 文:藍	良好		漳州窯系、16C後
201	6区	碗 (々)				内:巾広の2重線文 文様	胎:灰白 釉:青味透明 文:藍	々	々	中国、16C中
202	7区	紅皿	4.4	1.2	1.5	外:細い沈線を放射状に施す、口縁端部は平坦	灰白	々	々	肥前系 江戸時代
203	4-3区	壺	5.4			口縁部は大きく外反、端部は玉縁状	灰オリーブ	々	々	16C 中国か?朝鮮か?
204	T7-12	皿		4.6		高台部は浅い削り出し 外:薄い釉 内:砂目跡	胎:にぶい 灰白 釉:灰オリーブ	密	々	唐津、江戸前半
205	4区	々	4.4			高台部は浅い削り出し	胎:灰白 釉:灰オリーブ	々	々	朝鮮、16C
206	1区 2区	壺		13.0		回転ナデ	黒灰	~1mm 程度の砂粒 を含む	々	
207	6区	皿		4.2		高台部は浅い削り出し	胎:灰オリーブ 釉:オリーブ	密	々	朝鮮
208		壺				褐釉、肩部に1条の中広い沈線	胎:にぶい橙 釉:にぶい褐	緻密	々	中国、13~14C
209	6-F区	壺 (陶器)		18.0		外:ハケのちナデ 内:ハケ		~2mm わずかな 金雲母	々	外:着色料
210	6-1区	擂鉢		12.0		底部は薄手 外:ハケのち粗いナデ、(底)粗いナデ 内:5条の擂目、指圧痕	にぶい橙	~3mm 程度の砂粒 を含む	々	備前焼
211	T12-4	々	25.4			口縁端部は斜め上下に拡張し外側は 平坦 外:ヨコナデ 内:ナデのち擂目	褐灰	~2mm 々	々	々
212	1区	々		10.0		外:粗いナデ 内:7条の擂目のちナデ	暗青褐	~2mm 々	々	々
213	T11-2	々	30.2			口縁端部は斜め上下に拡張し尖り気味 内:ナデのち6条の擂目	黄褐	~3mm 々	々	々
214	7区	々				口縁端部は斜め上下に拡張し外側は 平坦 外:ヨコナデ 内:ヨコナデのち擂目	褐灰	~2mm 々	々	々

挿図 番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
215	4-3 区	擂鉢	30.2			口縁部は上下に長く拡張 内:強いクロ目のち7条の擂目	暗青灰	密	×	備前焼 々
216	4-3 区	々	25.0			口縁部で逆「く」字状に屈曲、端部は平坦 内:回転ナデのち列状のヨコ方向の擂目	灰褐	~2mm 々	々	鎌倉時代
217	7 区	火鉢 (瓦質)	26.0			口縁部は逆「L」字状に屈曲 端部は平坦 外、内:ミガキ	胎:にぶい黄 橙 釉:黒	密	々	戦国時代
218	1 区	火? (々)	33.0			口縁端部は玉縁状 体部は逆「八」字状に開く 外、内:ナデ	暗灰緑	々	々	々
219	T3-55	火鉢 (々)				外:大、小の格子文 花文様 内:ナデ	外:黒 内:にぶい黄澄	~1mm 々	良	々
220	7 区	砥石(?)				薄い板状台形状 磨き面2面				
221	1 区	包丁 (?)				片面にミガキ				
222	7 区	磨製 石斧				両凸(蛤刃?)、刃縁部は直刃				
223	2 区	磨								
224		磨								
225	6-2 区 7 区 S D 1					小さい板状鉄斧				
226	6 区 ベルト	鉄器				鋤先状鉄器、平らな板状部縁に折り 曲げたような着接部がみられる				
227		石族				扁平な身、浅い凹基式				
228		々				凹基式				黒曜石
229	7 区 S D 1	椀 (木製)				底部は平底				
230		錢				寛永通法 ス宝錢				
231		々				文錢				

図版



I-1
遺跡の全景・その1
(北方より)



I-2
遺跡の全景・その2
(南方より)



I-3
調査区全景・その1
(上空より)

図版Ⅱ



II-1
調査区全景・その2
(西方より)



II-2
1区、2区調査区全景
(上空より)



III-1
3区、4区調査区全景
(上空より)



III-2
6区、7区調査区全景
(上空より)



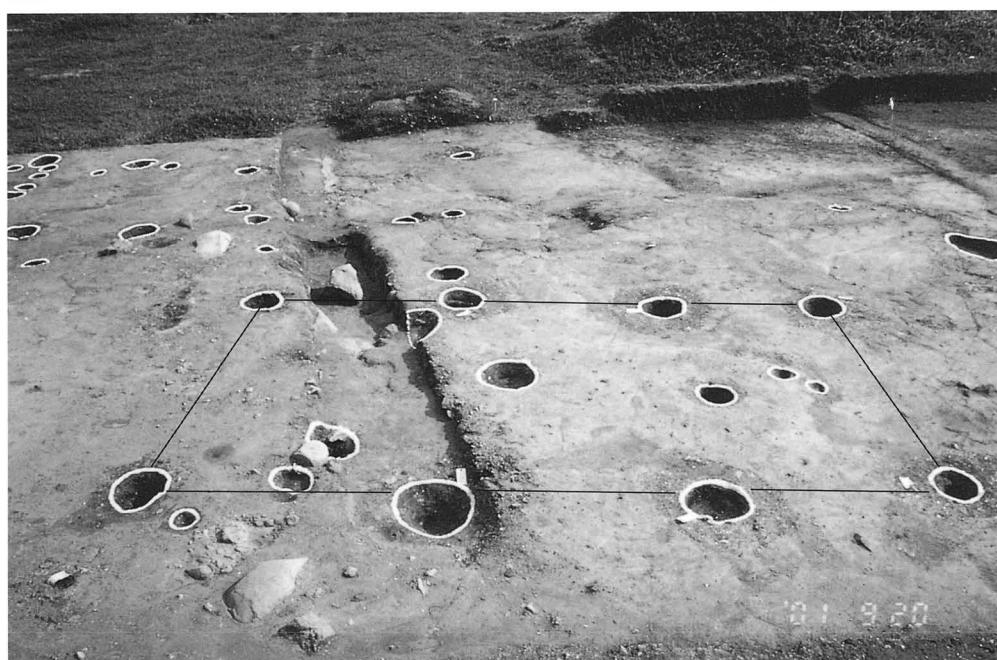
III-3
S101の全景
(北方より)

図版IV

V-1
焼失したS101
横たわる炭化材
(北方より)



V-2
SB01全景
(北方より)



V-3
SB02全景
(北方より)





V-1
SK01と周辺の
ピット群
(北方より)



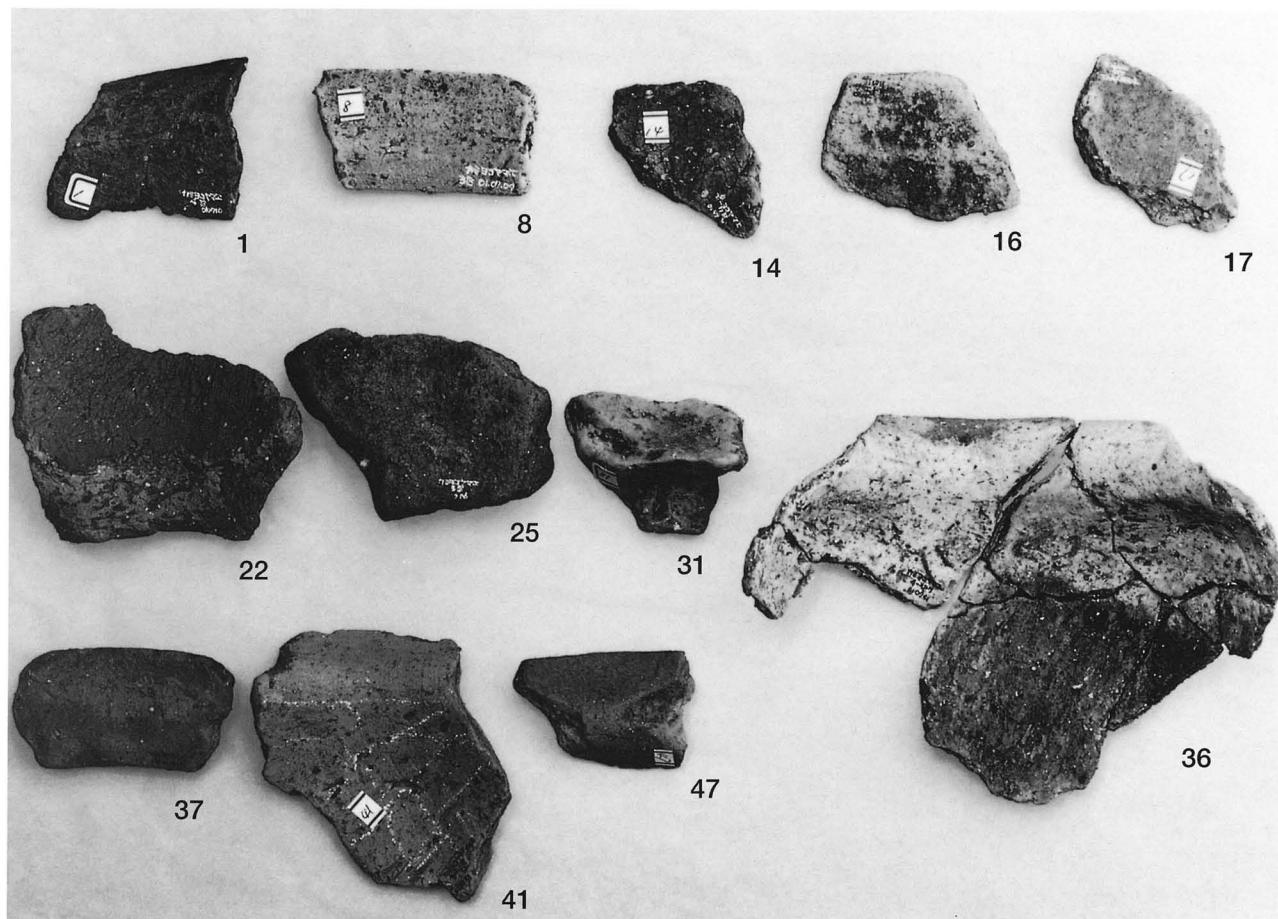
V-2
SK02



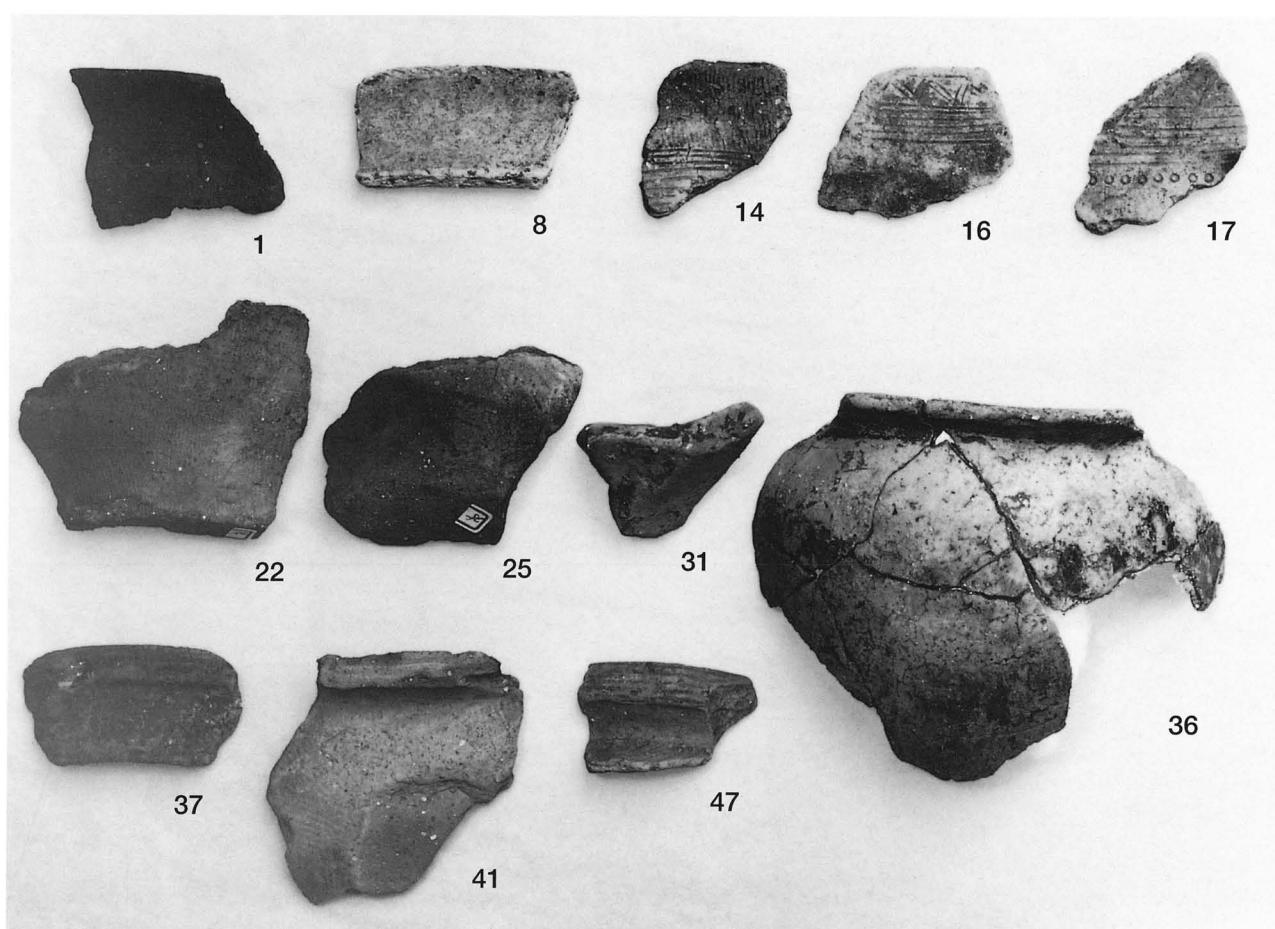
V-3
SK01と埋土
(北方より)

図版VI



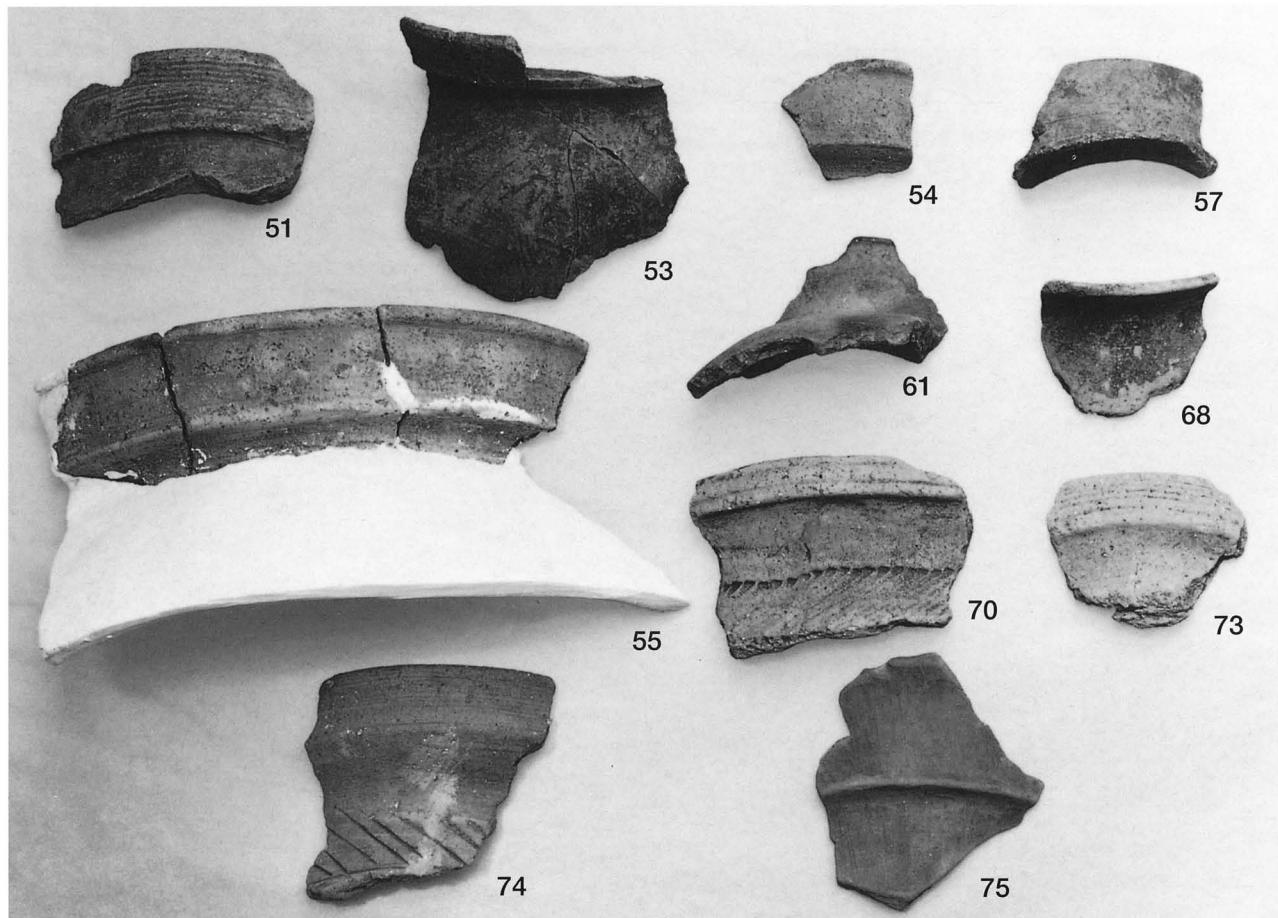


VII-1 弥生土器（1/3）（数字は挿図の土器番号。以下同じ）外面

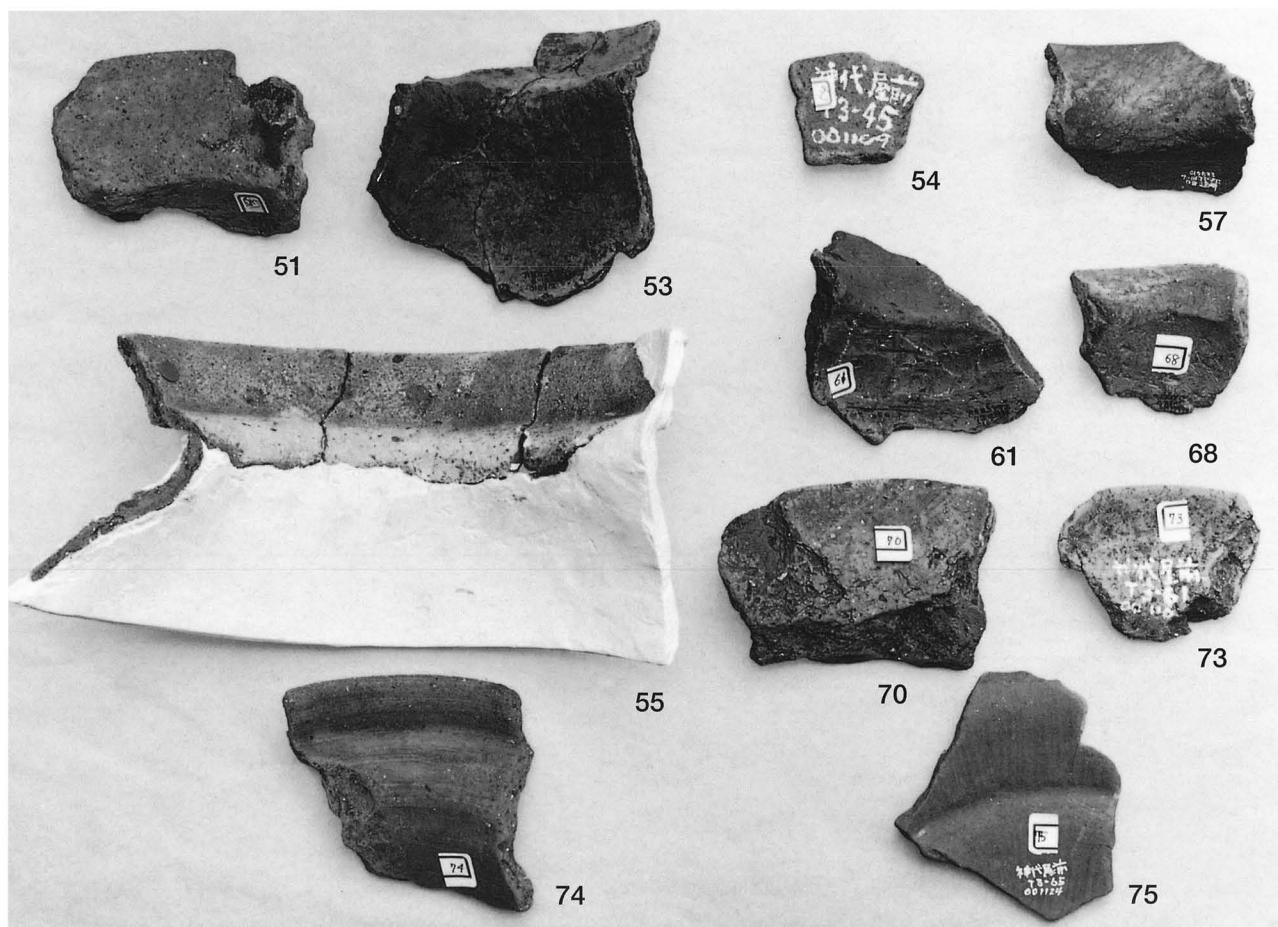


VII-2 弥生土器（1/3）内面

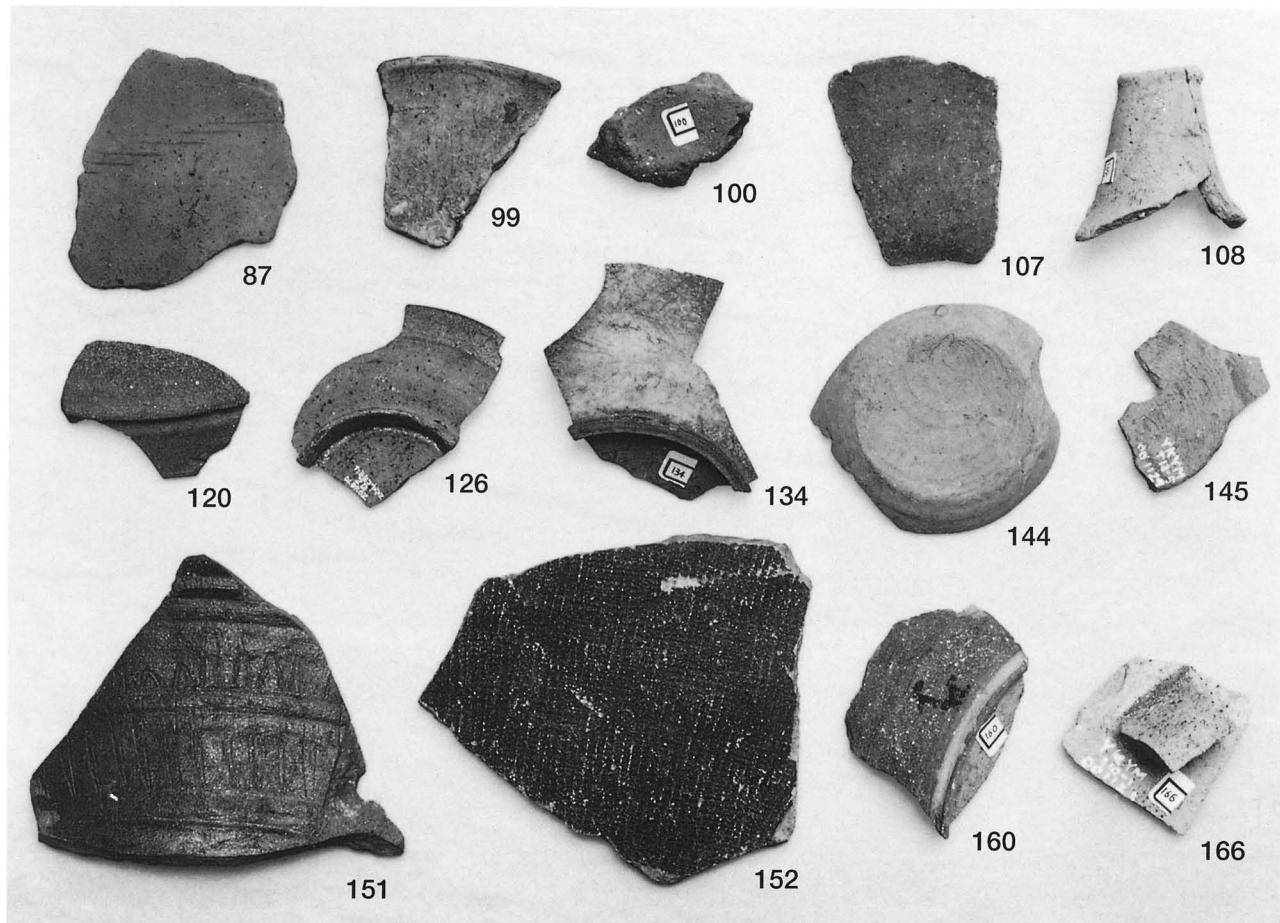
図版VIII



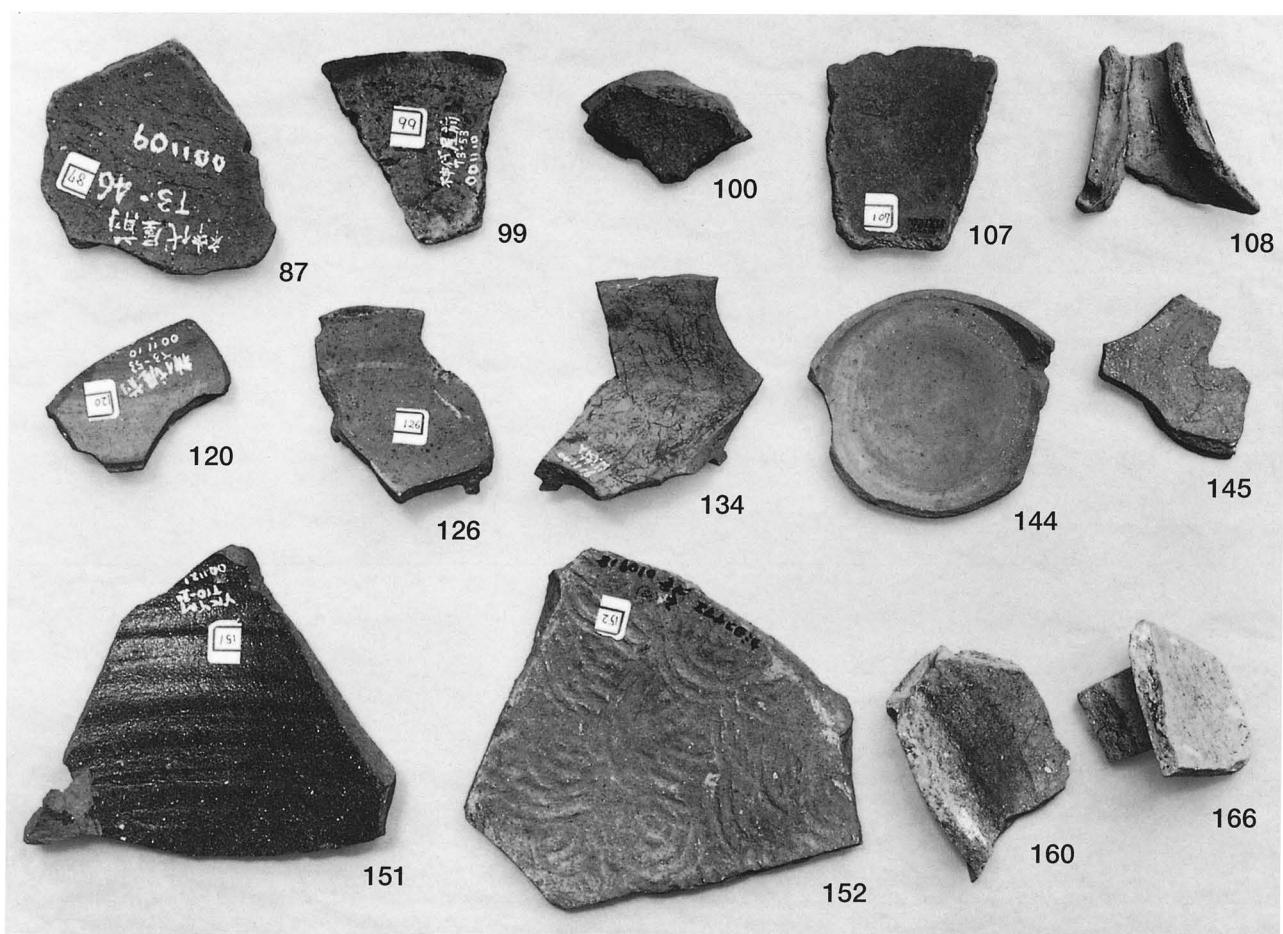
VIII-1 弥生土器 (1/3) 外面



VIII-2 弥生土器 (1/3) 内面

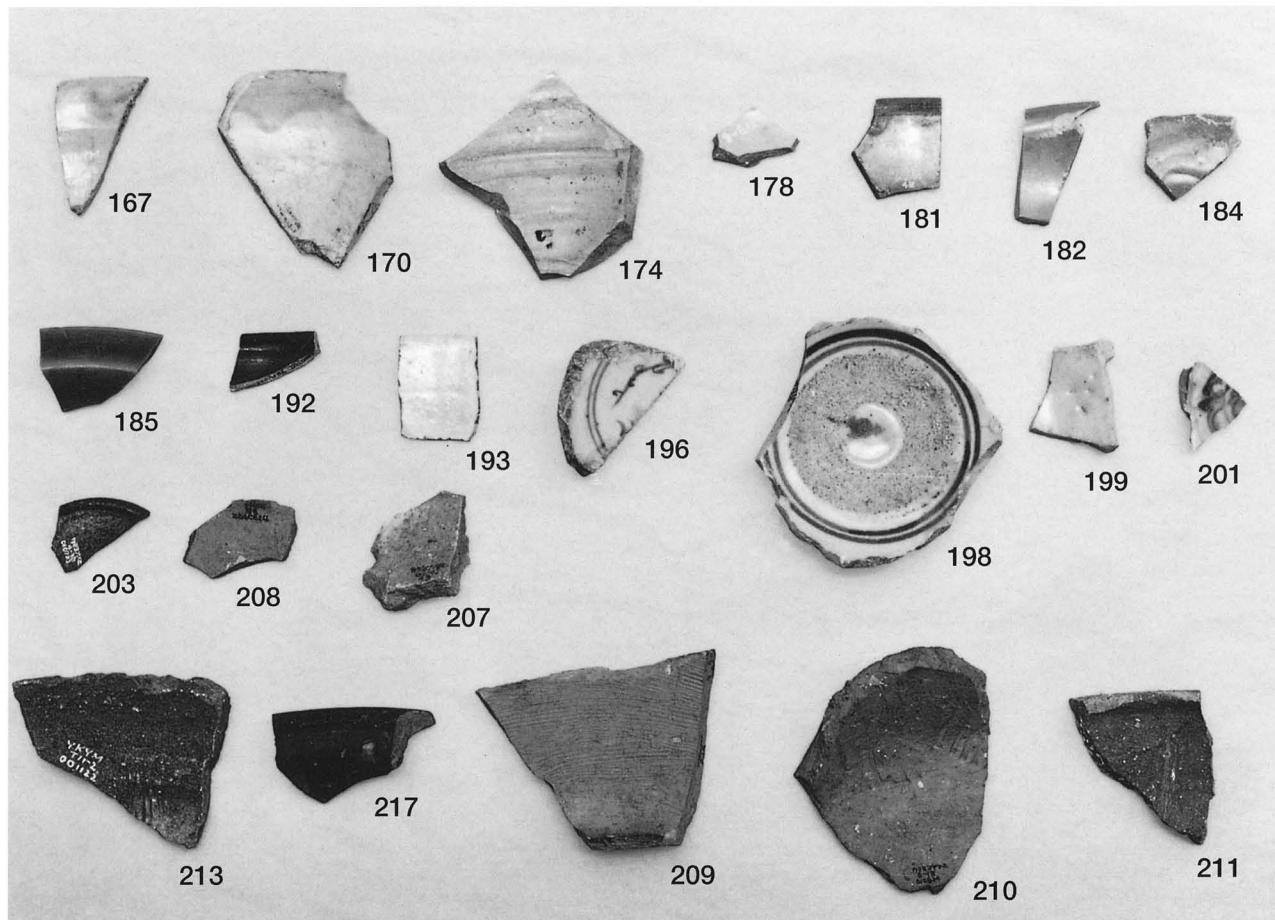


IX-1 弥生土器・須恵器（1/3）外面

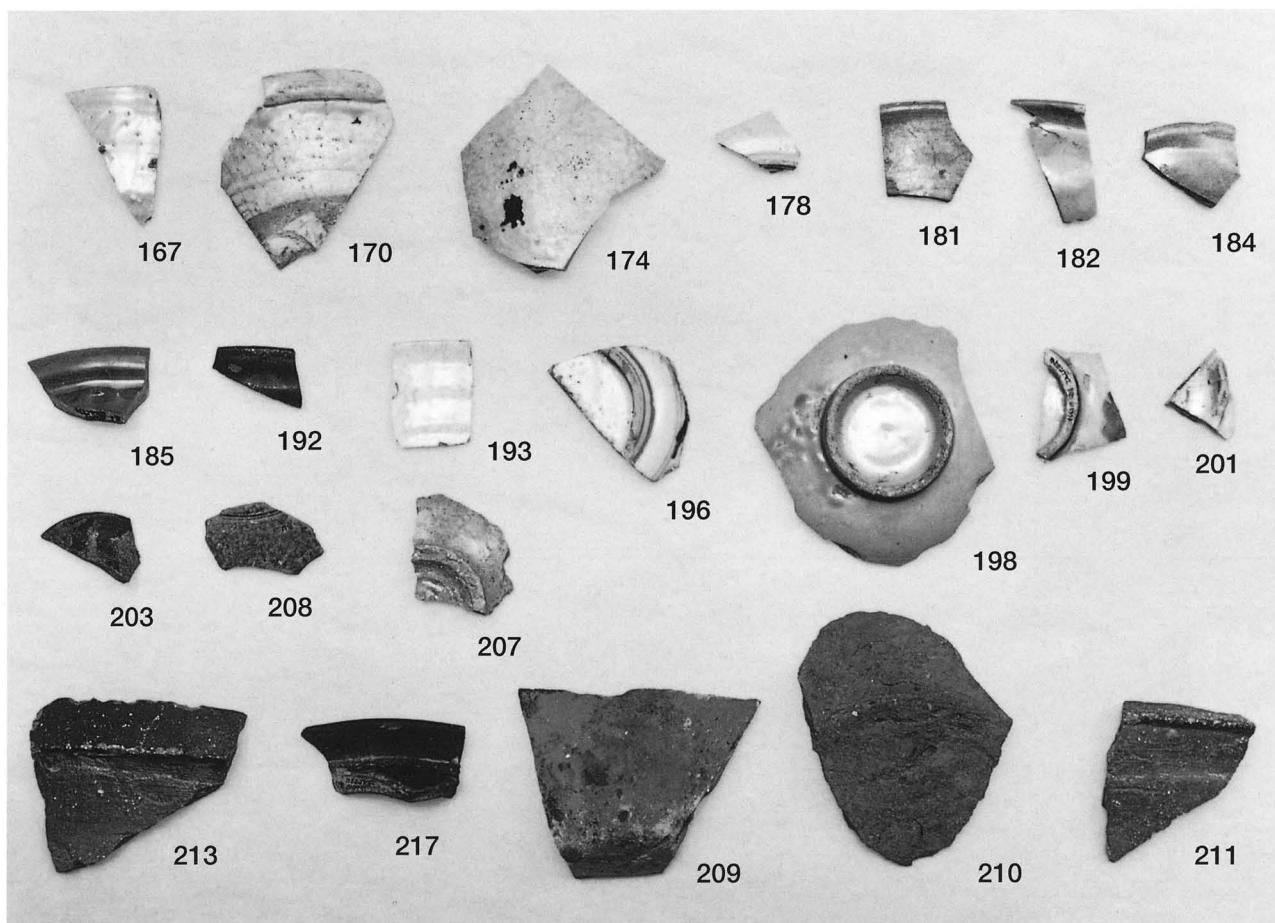


IX-2 弥生土器・須恵器（1/3）内面

図版X



X-1 陶器・陶磁器 (1/3) 外面



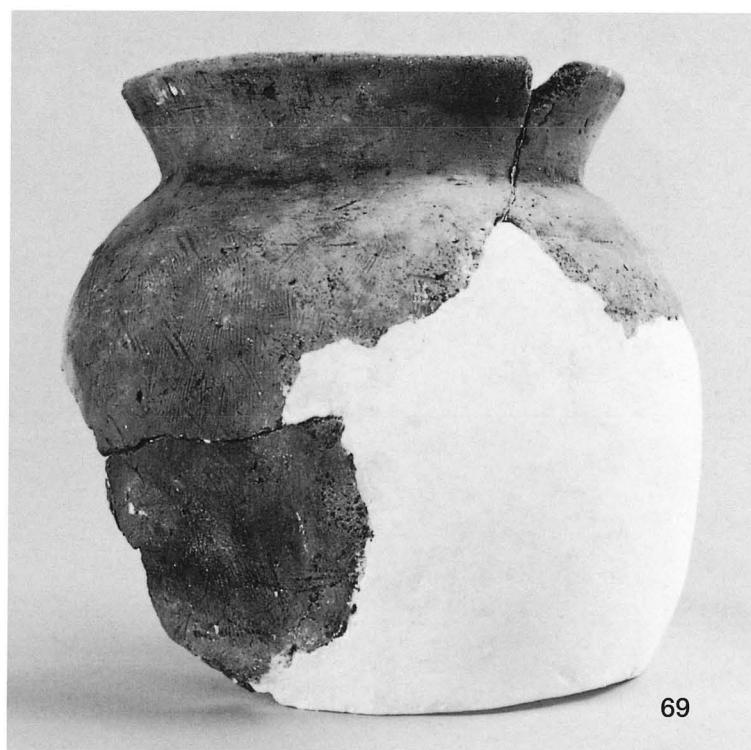
X-2 陶器・陶磁器 (1/3) 内面



XI - 1 土師器・甕 (1/2.5)



XI - 2 土師器・小壺 (1/2.5)



XI - 3 土師器・甕 (1/2.5)

XII-1 土師器・高杯 (1/2.5)

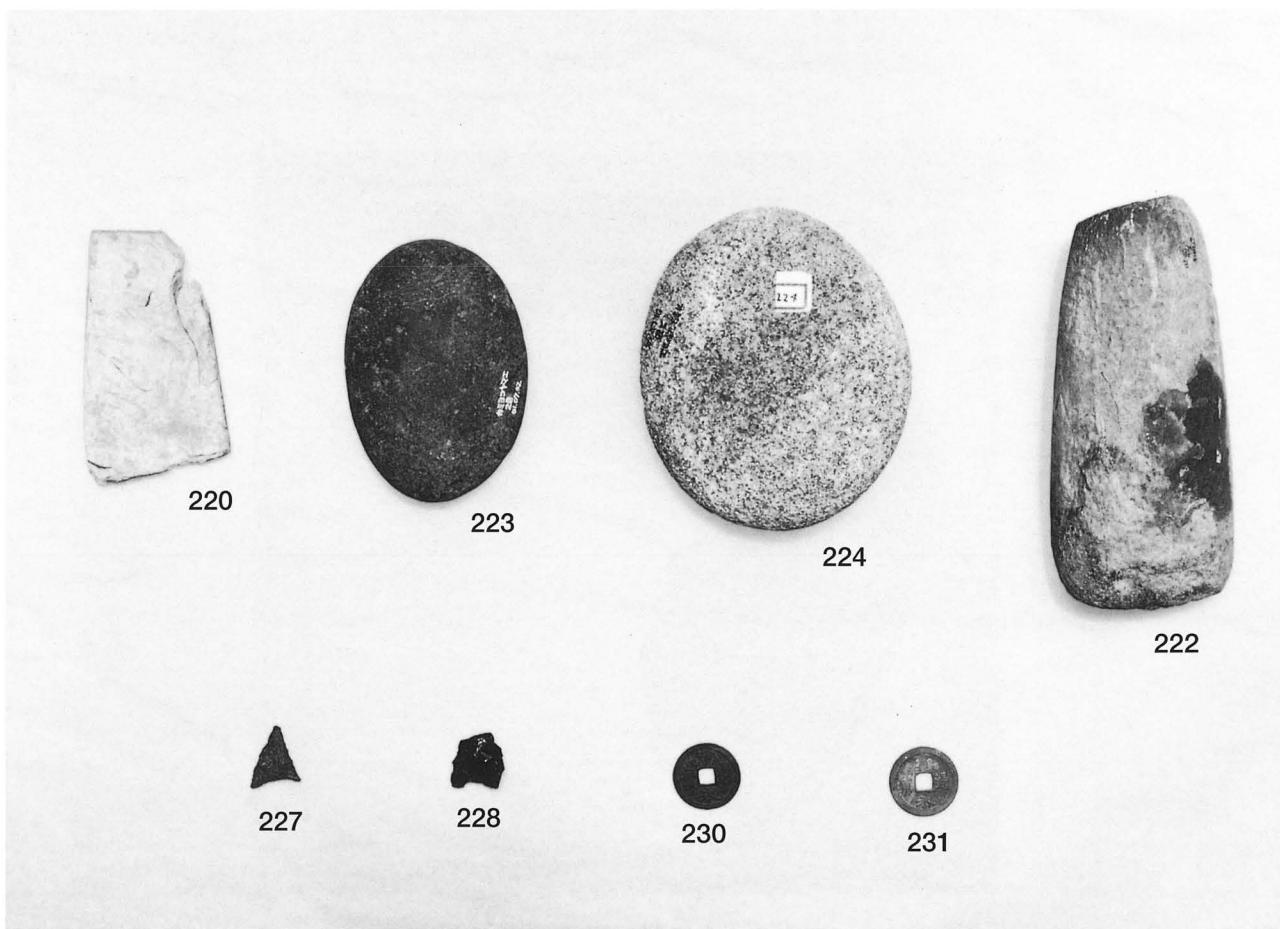


104



101

XII-2 弥生土器・高杯 (1/2.5)



227

228

230

231

XII-3 石器・銅錢 (1/3)

報告書抄録

フリガナ	ヨコヤイセキ							
書名	神代屋遺跡							
編集者名	上田俊雄 佐々木誠 田中義昭 (いなか舎)							
編集機関	弥栄村教育委員会							
所在地	〒697-1211 島根県那賀郡弥栄村大字長安本郷542-1 電話0855-48-2121							
発行年月日	西暦2002年3月1日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
神代屋遺跡	島根県 那賀郡弥栄村 大字長安本郷 438-1	32464		35° 46' 59"	132° 06' 35"	20010601 ~ 20011031	1,000m ²	圃場整備
所収遺跡名	種別	主な時代	遺構		主な遺物		特記事項	
神代屋遺跡	集落址	弥生時代 ~ 奈良・平安時代	溝状遺構 竪穴住居址 掘立柱建物跡		弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器 (青磁、白磁) 木製品 鉄製品 石器			

長安本郷神代屋遺跡

**中山間地綜合整備事業に伴う
埋蔵文化財調査報告書**

2002年3月発行

発 行 島根県弥栄村教育委員会
〒697-1211 島根県那賀郡弥栄村大字長安本郷542-1
印 刷 柏木印刷株式会社
〒690-0859 島根県松江市国屋町452-2